

阿賀川改修(長井地区)遺跡発掘調査報告 2

小田高原遺跡（2次調査）

2012年

福島県教育委員会
財團 法人 福島県文化振興財團
国土交通省北陸地方整備局

阿賀川改修（長井地区）遺跡発掘調査報告 2

おだこはら
小田高原遺跡（2次調査）

序 文

文化財は、それぞれの地域の歴史に根ざした文化遺産であると同時に、我が国の歴史や文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものであります。

国土交通省が実施する「阿賀川下流狭窄部改修事業(長井地区)」は、阿賀川下流部のうち喜多方市長井地区にある狭窄部を河道として掘削し、川幅を広げる事業です。この工事の完成により、河川の流れが円滑になり、出水による冠水被害などの災害を防ぐことができます。

福島県教育委員会では、この計画地区内にある周知の埋蔵文化財包蔵地、いわゆる遺跡を含めた文化財を保存するため、関係機関と協議を重ねてきましたが、現状で保存が困難なものについては、詳細な記録を残すために発掘調査を実施することとなり、平成22年度から調査を開始しました。

本報告書は、平成23年度に発掘調査を実施した、喜多方市長井地区に所在する小田高原遺跡の第2次調査結果をまとめたものです。

今回の調査では、平安時代の堅穴住居跡2軒、土師器を焼成した窯跡6基、縄文時代の4基連なる落し穴や石器集中地点1箇所、土器埋設遺構1基などが確認されました。また遺構の周辺では、縄文時代の縄文土器や石器、古墳時代及び平安時代の土師器や須恵器・鉄製品なども数多く出土しました。

調査の結果、小田高原遺跡は平安時代に営まれた集落と考えられますが、集落の一部でやきもの作りなどの生産活動が盛んに行われていたことが分かりました。またそれ以前の太古より、狩猟場や石器製作の場、生活の場となっていたことが明らかとなりました。

今後、この報告書が、県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習等の資料として広く活用していただけることを切に願います。

最後に、発掘調査の実施に当たり、御協力いただいた喜多方市教育委員会、国土交通省北陸地方整備局阿賀川河川事務所、財団法人福島県文化振興財團を始めとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成24年12月

福島県教育委員会

教育長 杉 昭 重

あいさつ

財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模な開発に先立ち、開発対象地内にある埋蔵文化財の調査を実施しています。

本報告書は、阿賀川下流狭窄部改修事業（長井地区）の実施に伴い、平成23年度に発掘調査を行った喜多方市慶徳町山科地区に所在する小田高原遺跡の調査成果をまとめたものです。

小田高原遺跡の発掘調査は、平成22年度に1次調査を開始し、今回の調査が2次調査となります。1次調査では平安時代の調査が中心で、当時の竪穴住居跡や土器製作に関連した遺構・遺物が確認されました。2次調査でも、土師器と呼ばれる平安時代のやきものを製作した遺構を検出しています。今回の2次調査では縄文時代の遺構・遺物も多く確認されました。縄文時代は石器時代ともいわれますが、石器がまとまって出土する箇所が見つかりました。また落し穴も認められ、縄文時代の小田高原遺跡は狩場として利用されていたものと思われます。

今後、この報告書を郷土の歴史研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、この調査に御協力いただきました喜多方市並びに地域住民の皆様に、深く感謝申し上げますとともに、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成24年12月

財団法人 福島県文化振興財団

理事長 遠藤俊博

緒 言

- 1 本書は、平成23年度に実施した阿賀川下流狭窄部改修事業（長井地区）に関連する遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、福島県喜多方市慶徳町山科字古屋敷・西新田に所在する小田高原遺跡（2次調査）の成果を収録した。
- 3 本発掘調査事業は、福島県教育委員会が国土交通省北陸地方整備局阿賀川河川事務所の委託を受けて実施し、調査・報告にかかる費用は国土交通省が負担した。
- 4 福島県教育委員会では、発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団（現、財団法人福島県文化振興財團）に委託して実施した。
- 5 財団法人福島県文化振興事業団（現、財団法人福島県文化振興財團）では、遺跡調査部の以下の職員を配置して調査にあたった。

専門文化財主査 香川 慎一 文化財主査 今野 徹
- 6 本書の執筆・編集は担当職員が行い、文末に文責を示した。
- 7 付章については、新潟大学災害復興科学研究所准教授 卜部厚志氏に執筆を依頼した。
- 8 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図「喜多方」の該当範囲を複製したものである。
- 9 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 10 発掘調査および報告書作成にあたり、次の諸機関から御協力・御助言をいただいた。

喜多方市 喜多方市教育委員会 卜部厚志（新潟大学災害復興科学研究所）
(敬称略・順不同)

用 例

1 本書における地形図・遺構図の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方位・座標 圖中の方位は座標北を示す。表示のないものは本書の天を北とした。座標軸には国土座標IX系に基づく座標値を記した。
- (2) 毛 羽 遺構内の傾斜部は「」、相対的に緩傾斜の部分には「」、後世の搅乱および削平部には「」を用いた。
- (3) 網 点 圖中の網点は以下を示す。これら以外を示す場合は同挿図中に凡例を示した。
 焼 土 面 強い焼土面
- (4) 土 層 遺跡内堆積土層は、アルファベット大文字Lにローマ数字、遺構内堆積土層はアルファベット小文字lに算用数字を付して表記した。土色およびその記号は『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄1967)に基づく。
- (5) 標 高 水準点を基にした、海拔高度を示す。
- (6) 縮 尺 各挿図中にスケール・縮小率を示した。
- (7) 小 穴 小穴に付した()内の数値は、検出面からの深さ(cm)を示す。

2 本書における遺物図の用例は、以下のとおりである。

- (1) 土 器 断 面 純文土器・土師器は断面白抜きで示し、須恵器は断面を黒く塗りつぶした。纖維混和痕は「」、粘土縫の積み上げ痕は一点鎖線で示した。
- (2) 網 点 圖中の網点は以下を示す。これら以外は同挿図中に凡例を示した。
 内面黑色処理 火だしき
- (3) 遺 物 番 号 挿図ごとの通し番号とした。遺物番号に続く括弧内には、出土位置・層位を示した。
- (4) 計 測 値 遺物の計測値は、図中に示した。()は推定値、[]は残存値である。
- (5) 縮 尺 各挿図中にスケール・縮小率を示した。

3 本書および調査・整理の上で使用した略号は以下のとおりである。

喜多方市…K T 小田高原遺跡(2次調査)…O D K 2 壁穴住居跡…S I
須恵器窯跡…S R 構 跡…S D 土 坑…S K 焼 土 遺 構…S G
土器埋設遺構…S M その他(堅穴・畝状遺構、石器集中地点)…S X
小 穴…P グリッド…G

4 参考・引用文献は執筆者の敬称を略し、本文末にまとめて収めた。

目 次

序 章

第1節 事業の概要	1
第2節 調査に至る経緯	2
第3節 遺跡周辺の環境	3

第1章 調査の概要

第1節 遺跡の位置と地形	9
第2節 調査経過	9
第3節 調査方法	11

第2章 調査成果

第1節 遺構・遺物の分布	17		
第2節 基本土層	19		
第3節 壁穴住居跡	22		
14号住居跡(22)	15号住居跡(27)		
第4節 土坑	34		
36号土坑(34)	37号土坑(36)	38号土坑(37)	39号土坑(41)
40号土坑(42)	41号土坑(42)	42号土坑(43)	43号土坑(45)
44号土坑(45)	45号土坑(45)	46号土坑(46)	47号土坑(46)
第5節 焼土遺構	47		
2号焼土遺構(47)	3号焼土遺構(47)	4号焼土遺構(48)	
5号焼土遺構(49)	6号焼土遺構(50)	7号焼土遺構(51)	
第6節 その他の遺構	51		
1号土器埋設遺構(51)	石器集中地点(54)		
第7節 遺構外出土遺物	58		
縄文時代の遺物(58)	古代の遺物(70)		

第3章 総 括

第1節 縄文時代	75
第2節 平安時代	77

付 章 小田高原遺跡における簡易ボーリング調査および遺跡立地の形成過程に関する考察

はじめに(83)	遺跡の立地環境(83)	簡易ボーリングによる調査(84)
各地点の層相と対比(85)	今後の課題(92)	

挿図目次

序 章

- 図1 阿賀川狭窄部改修事業位置図 1
図2 遺跡周辺の地形分類 4
図3 小田高原遺跡と周辺の遺跡 6

第1章

- 図4 調査範囲と工事計画 10
図5 調査範囲の区割りとグリッド配置 12
図6 1・2次調査遺構配置図 15

第2章

- 図7 2次調査区遺構配置図 18
図8 基本土層(1) 20
図9 基本土層(2) 21
図10 14号住居跡(1) 23
図11 14号住居跡(2) 24
図12 14号住居跡出土遺物(1) 26
図13 14号住居跡出土遺物(2) 27
図14 15号住居跡(1) 28
図15 15号住居跡(2) 29
図16 15号住居跡出土遺物(1) 31
図17 15号住居跡出土遺物(2) 32
図18 15号住居跡出土遺物(3) 33
図19 36・37号土坑 35
図20 38・42号土坑 38
図21 36・37号土坑出土遺物 39
図22 37・38号土坑出土遺物 40
図23 38・42号土坑出土遺物 41
図24 39~41・43~45号土坑 44
図25 46・47号土坑 46
図26 2・3・7号焼土遺構 48
図27 4~6号焼土遺構 49
図28 2・4号焼土遺構出土遺物 50
図29 1号土器埋設遺構・出土遺物 52
図30 石器集中地点・出土遺物(1) 55

- 図31 石器集中地点出土遺物(2) 56

- 図32 石器集中地点出土遺物(3) 57

- 図33 遺構外出土縄文土器(1) 62

- 図34 遺構外出土縄文土器(2) 63

- 図35 遺構外出土縄文土器(3) 64

- 図36 遺構外出土縄文土器(4) 65

- 図37 遺構外出土縄文土器(5) 66

- 図38 遺構外出土縄文土器(6) 67

- 図39 遺構外出土土製品 68

- 図40 遺構外出土石器 69

- 図41 遺構外出土土師器(1) 72

- 図42 遺構外出土土師器(2)・須恵器 73

- 図43 遺構外出土鉄製品 74

第3章

- 図44 6・11号住居跡、3号須恵器窯跡
出土遺物 78

- 図45 6・11・14・15号住居跡出土
杯類指紋分布 79

付 章

- 図46 小田高原遺跡の位置と

周辺地域の地形 83

- 図47 簡易ボーリングの実施地点 84

- 図48 簡易ボーリング機器 85

- 図49 遺物包含層との対比 85

- 図50 逆級化砂層の特徴 86

- 図51 断面A~D 87

- 図52 断面E~G 88

- 図53 断面Aにおける層相変化 89

- 図54 調査II区下流側の試掘トレンチ 91

- 図55 遺物包含層を含む地層の円弧すべり 91

- 図56 基底部の液状化による地層の変形 92

- 図57 №1~8コア 93

- 図58 №9~20コア 94

表 目 次

序 章	
表 1 周辺の遺跡一覧	7
第 1 章	
表 2 坪穴住居跡一覧	13
表 3 須恵器窯跡一覧	13
表 4 溝跡一覧	13
表 5 土坑一覧	13
表 6 焼土造構一覧	14
表 7 その他の遺構一覧	14

写真図版目次

1 調査区全景	97
2 調査区全景	97
3 調査区全景	98
4 調査区近景	98
5 J30G 基本土層	99
6 J30G 基本土層	99
7 H・I33G 基本土層	100
8 K35G 基本土層	100
9 14号住居跡	101
10 14号住居跡細部	101
11 15号住居跡	102
12 15号住居跡細部	102
13 土坑(1)	103
14 土坑(2)	104
15 土坑(3)	105
16 土坑(4), 焼土造構(1)	106
17 焼土造構(2), 土器埋設造構	107
18 石器集中地点	107
19 14号住居跡出土遺物	108
20 15号住居跡出土遺物(1)	109
21 15号住居跡出土遺物(2)	110
22 土坑出土遺物	111
23 土坑・焼土造構・土器埋設造構 出土遺物	112
24 石器集中地点出土石器(1)	113
25 石器集中地点出土石器(2)	113
26 造構外出土遺物(1)	114
27 造構外出土遺物(2)	115
28 造構外出土遺物(3)	115
29 造構外出土遺物(4)	116
30 造構外出土遺物(5)	117
31 造構外出土遺物(6)	117
32 造構外出土遺物(7)	118

序 章

第1節 事業の概要

会津盆地のほぼ中央を貫流してきた阿賀川は、喜多方市南西部の慶徳町付近で盆地を抜け、越後山脈東縁の山間部に入る。山間部での阿賀川は河道が狭窄し、また大きく蛇行している。この地形的特徴が相まって洪水時の円滑な流れを妨げる要因となり、阿賀川は古くから度々氾濫を繰り返してきた。記録では、「会津慶長地震」(1611)の余波で慶徳町山崎地区の河道が堰き止められ、出現した「山崎新湖」によって多くの集落が水没したとされる。

大正10年～昭和13年、狭窄部蛇行区間「泡の巻・土塚・袋原」の河道改修工事が行われ、屈曲箇所をつなぐ3本の捷水路が開削された。しかし、戦時機運などの影響により、大量の未掘削部を残したまま昭和14年に工事が中断された。蛇行する旧河道は、現在も三日月湖状に残っており、喜多方市慶徳町山科地区・会津坂下町長井地区の境界にもなっている。

昭和57年9月、台風18号の影響によって大規模な洪水が発生し、喜多方市も甚大な出水に見舞われている。この水害が契機となり、昭和58年から待望の阿賀川下流狭窄部改修事業が再開された。改修区域は「泡の巻・津尻・長井」の3カ所で、平成10年度に泡の巻地区、平成20年度に津尻地区が完了した。現在、長井地区的改修事業が進行中である。なお、国土交通省北陸地方整備局阿賀川河川事務所(以下、阿賀川河川事務所と略す)は、東北地方整備局郡山国道事務所の道路整備事業と調整を図り、コスト縮減策として本事業で発生した掘削土砂の一部が地域高規格道路国道121号「会津継貫北道路」の盛土材として活用されている。

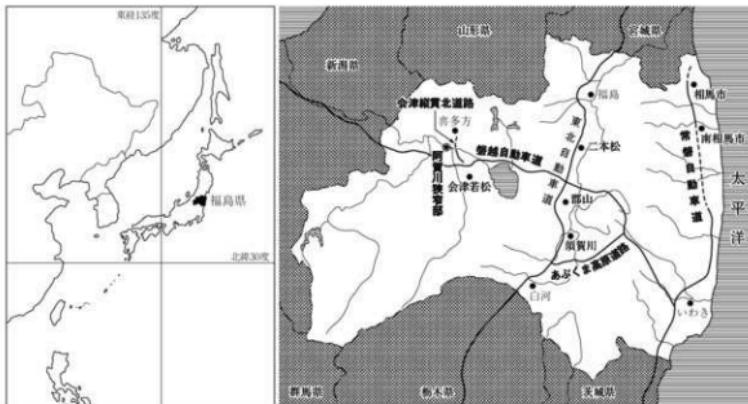


図1 阿賀川狭窄部改修事業位置図

第2節 調査に至る経緯

平成19年11月、阿賀川河川事務所から喜多方市教育委員会へ、阿賀川下流狭窄部改修事業(長井地区)に係る埋蔵文化財所在の協議依頼があった。工事予定地内には小田高原窯跡が含まれ、また工事予定地と小田高原遺跡が隣接していたことから、喜多方市教育委員会は、福島県教育委員会とも協議のうえ、工事予定地全域を対象とした試掘調査を計画した。

喜多方市教育委員会による試掘調査は、計25,350m²を対象として、平成21年6～8月に実施されている(『喜多方市文化財調査報告書第8集』)。試掘調査の結果、調査対象区のほぼ全域から绳文時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺構・遺物が確認され、大規模な複合遺跡であることが判明した。小田高原遺跡の範囲は大幅に増補され、旧範囲に西側の河道部が新たに加えられた。

試掘調査の結果を受けて、福島県教育委員会は、喜多方市教育委員会と協議を行い、さらに阿賀川河川事務所と小田高原遺跡の保護を目的とする協議を重ねた。結果、工事計画上、遺跡の現状保存は困難であると判断され、記録保存のための発掘調査が実施されることになった。調査対象面積は、最上位面の18,000m²と、同北西部(調査II区)の下層に重なる文化面6,000m²(=3,000m²×2面)を加えた計24,000m²相当が予定された。

小田高原遺跡の発掘調査は、平成22年度から福島県教育委員会が、財團法人福島県文化振興事業団(現、財團法人福島県文化振興財團 以下省略)に委託して実施することになった。

1次調査

1次調査の開始日は、条件整備の終了が遅れたこともあり、平成22年5月13日である。調査終了日は平成22年12月17日で、作業ができなかつた雨天日を除く調査日数は107日である。調査員は6名を配置し、計15,800m²の発掘調査を行った。

1次調査では、まず工事予定地に掛かる18,000m²の範囲を地区分けし、工事工程上、最優先箇所とされた東部を調査I区(当初面積3,000m²)とした。また、南北長約330mを測る河川敷の箇所については、北部を調査II区(当初面積6,500m²)、中央～南部を調査III区(8,500m²)とした。しかし、SD01の延伸などで遺跡範囲が広がったため、工事予定地に掛かる遺跡面積は18,000m²から20,300m²に増加した。その内訳は調査I区4,900m²・II区6,900m²・III区(変更なし)である。

1次調査の実施面積15,800m²の内訳は、調査I区4,900m²・II区7,900m²・III区3,000m²である。調査I区の調査は1次調査で終了し、平成22年度中に引き渡しを完了している。調査II区の当初予定面積は上位6,900m²・下位6,000m²の計12,900m²である。1次調査は、上位文化面6,900m²・下位文化面1,000m²について行った。なお、調査II区の残5,000m²は、平成22・23年度の予備調査によって4,000m²に縮小となった。調査III区は、1次調査3,000m²、2次調査5,500m²を実施し、平成23年度にすべての引き渡しが完了した。調査II区の残4,000m²については、平成24年度に3次調査として予定されている。

第3節 遺跡周辺の環境

地理的環境

福島県は、東北地方の最南部に位置する。福島県の面積は13,782km²で、北海道・岩手県に次ぐ3番目の広さである。県土の8割は山地で占められ、南北に縱走する越後山脈・奥羽山脈・阿武隈高地の各山稜によって、西から「会津」・「中通り」・「浜通り」と呼ばれる3地方に区画されている。

小田高原遺跡が所在する喜多方市は、福島県北西部の会津地方北部に位置付けられる。会津の語意は、「古事記」によれば北陸道・東海道へそれぞれ遠征した將軍が出会った所とされ、古来より会津地方が両地域の文化融合地点として認識されていたことを推測させる。喜多方市の南部を流れる阿賀川は、新潟県に通じている。また、会津地方の気候は日本海岸型気候に属しており、風土の点において北陸地方との関連が窺われる。

現在の喜多方市は、会津盆地の北部を占める旧喜多方市と、旧市を取り巻く塙川町・山都町・熱塩加納村・高郷村の1市2町2村が平成18年1月に合併して成立した。喜多方市の北部は、飯豊連峰を境界に山形県と接している。喜多方市の西部は西会津町、南部は阿賀川・日橋川を境界に会津坂下町・湯川村・会津若松市と接している。

喜多方市の市名は会津盆地の北方「きたかた」に由来するといわれ、その地形は盆地部と周縁の山間部に代表される。盆地部の地形分類は、濁川・田付川・日橋川など周囲の山間部から流入する阿賀川支川によって形成された扇状地が大半である。各支川は、喜多方市の南西部で阿賀川に合流する。盆地部の標高は喜多方市街地付近で210m前後、阿賀川合流付近で180m前後である。盆地部の周囲は、東は標高1,404mの猫魔ヶ岳を主峰とする磐梯高原に、西は越後山脈から派生する標高1,000m前後の山地に、北は飯豊連峰によってそれぞれ遮られている。

小田高原遺跡が所在する慶徳町は、喜多方市の南西部に位置する。会津盆地を概ね北流してきた阿賀川は、喜多方市南端で流れを北西方向に転じ、慶徳町山科地区から盆地を抜けて越後山脈東縁の山間部に入る。山間部での阿賀川は、左右に大きく蛇行を繰り返しながら山地を切り開いており、小田高原地区および周域の袋原・長井地区では河岸段丘地形が発達している。

喜多方市の地質を見ると、盆地部の表層は主に礫・砂・泥層からなる。喜多方市街地は扇状地の末端部に位置付けられ、砂礫層に含まれていた良好な地下水の湧水域としても知られる。喜多方市西方の山地・丘陵地の基盤は、新第三期中新世に属するものとされる。慶徳町の阿賀川右岸は礫岩・砂岩・泥岩、左岸部の高郷地城が緑色凝灰岩や砂岩・泥岩などからなっている。阿賀川・只見川流域に発達する中位段丘面は、「会津シラス」とも呼ばれる沼沢火山起因の堆積物で覆われている。

喜多方市域の気候は、年較差・日較差が比較的著しい内陸性気候である。さらに日本海岸型気候にも属し、夏はフェーン現象、冬は日本海側からの季節風に伴う豪雪の影響を受ける。しかし、この気候的特徴が稻作には適しているため、喜多方市は米どころとしても有名である。

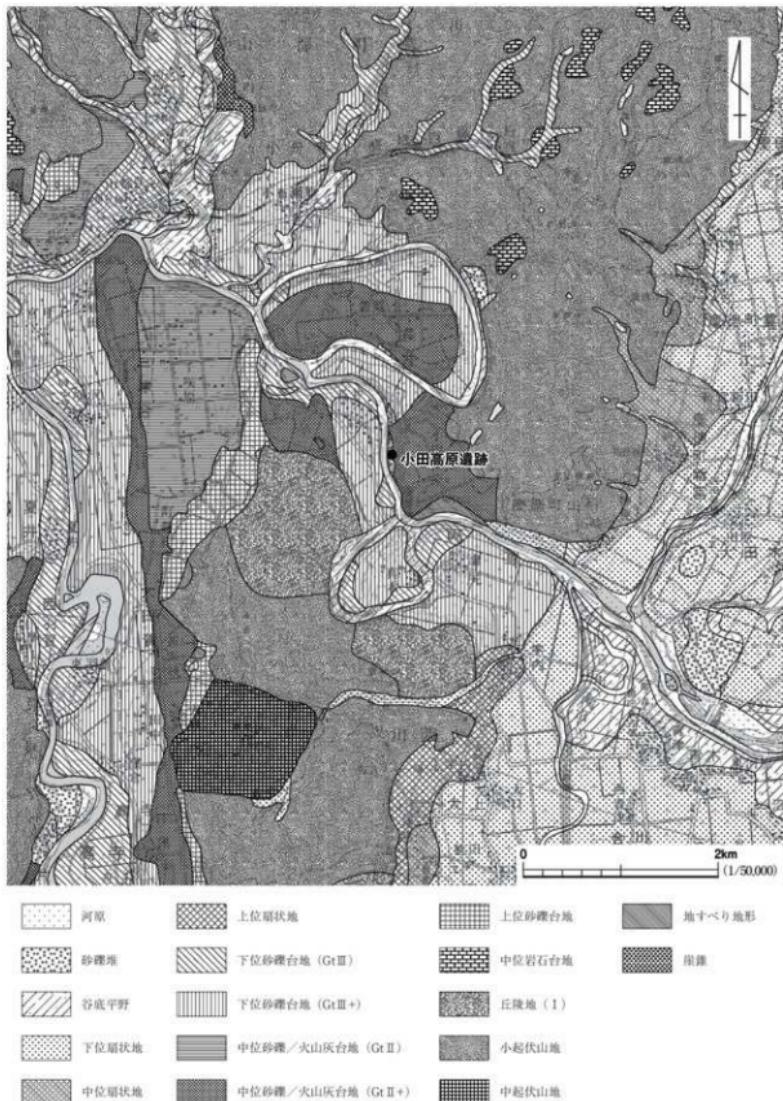


図2 遺跡周辺の地形分類(中村ほか1976を基に作成)

歴史的環境

喜多方市で確認された旧石器時代の遺跡は、市南西部の高郷町塩坪遺跡が知られる。阿賀川左岸の塩坪第1段丘面に立地し、遺跡は2m以上の沼沢バミス層で被覆されている。1982年に福島県立博物館によって学術調査が行われており、福島県を代表する後期旧石器時代の遺跡である。

会津盆地域の縄文遺跡は、盆地内部よりも周縁部に立地するという分布傾向がすでに指摘されている。会津盆地北西域では、山間部に入った阿賀川・只見川流域に縄文遺跡が集中している。小田高原遺跡の北西約4.2kmに所在する山都町の上林遺跡は、江戸時代の記録にも残る遺跡である。大正9年には鳥居龍藏らが来跡し、猪苗代町で同遺跡の講義を行っている。上林遺跡では複式炉をもつ大木9・10式期の堅穴住居跡や、縄文時代晩期～弥生時代の遺構・遺物が確認されている。小田高原遺跡の北西2kmに所在する会津坂下町の龜原遺跡は、戦前に行われた阿賀川蛇行部の捷水工事中に発見された遺跡で、縄文時代後期中葉に位置付けられる片口漣過型土器などの小型土器が多数出土している。龜原遺跡は不時の発見であるが、会津坂下町の北川前遺跡では、津尻地区河川改修工事関連の発掘調査が平成20年に行われ、中位河岸段丘面の突端部で複式炉をもつ大木9式期の堅穴住居跡が検出されている。小田高原遺跡の北側にある袋原遺跡は縄文時代晩期の遺跡であり、土偶・石刀・独鉛石など出土遺物の多彩さで知られる。小田高原遺跡の周辺では、比較的古くから知られた縄文時代中期後葉～晩期の遺跡が目立つ。

喜多方市周辺では、弥生時代の遺跡数は比較的少ない。現在、JR喜多方駅となっている長内遺跡では、駅工事の際に弥生時代中期の土器・石庖丁が出土したとされる。この遺物も不時の発見であり、長内遺跡の詳細については不明である。

しかし、古墳時代に入ると喜多方市の遺跡数は増加する。古墳時代の前夜～黎明期に位置付けられる遺跡としては、阿賀川・日橋川の合流部付近に立地する塙川町の館ノ内遺跡・内屋敷遺跡が上げられる。館ノ内遺跡では、四隅突出墓の影響を受けたと考えられる周溝墓が確認されている。周溝内から出土した土器には北陸・北関東地方の影響と推測されるものも含まれており、他地域からもたらされた墓制の受容は前期古墳築造へと継承されていくようである。内屋敷遺跡では周溝内から赤彩の壺・器台などが出土したほか、周溝墓とほぼ同時期の堅穴住居跡も確認されている。慶徳町木曾原遺跡では、3～4世紀代と考えられる土器や、管玉の未成品が出土している。

会津盆地の西部は、会津坂下町の男塙・宮東遺跡など初現期古墳が集中している地域である。古墳時代前期前葉以降、会津盆地の約3カ所で比較的大型の古墳が築造されるが、その一つが喜多方市慶徳町～会津坂下町の一帯である。同集中域の中で最も有名な古墳が会津坂下町青津地区的亀ヶ森・鎮守森古墳である。亀ヶ森古墳は4世紀前半頃の築造と推測される前方後円墳であり、東北地方で2番目の規模をもつ。「亀ヶ森」の名称は、慶長期に出現した「山崎新湖」によって青津地区も水没し、水面から突き出た墳丘が亀のように見えたためとも伝わる。同古墳は、現在、一部が墓地になっており、また前方部と後円部を分断するように道路が通っている。鎮守森古墳は、亀ヶ森古墳の南西約100mの地点にある前方後方墳である。

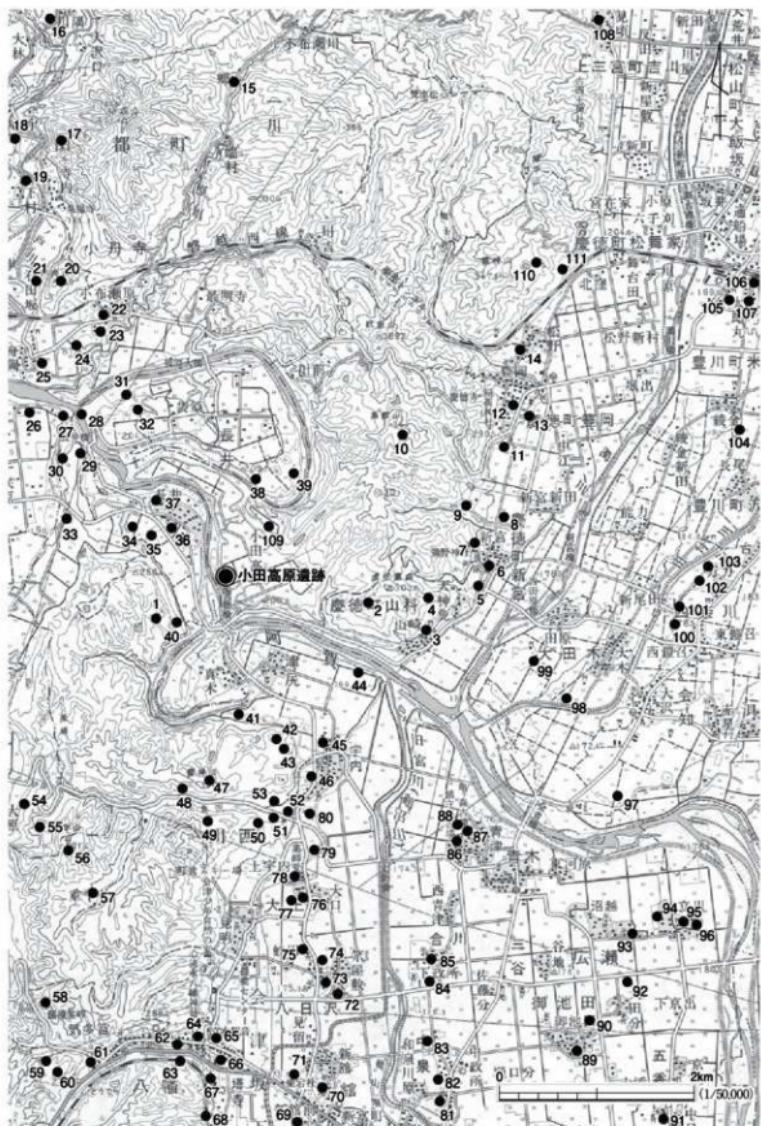


図3 小田高原遺跡と周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	種別	時期	番号	遺跡名	所在地	種別	時期
1	萩ノ御跡	(会)長母字松曾根有林	古跡	平安	58	常光堂跡	(会)高寺宇施安堂	城郭跡	中世
2	虚空蔵古墳群	(愛)新宮字虚空蔵	古墳	古墳	59	堂平A道跡	(会)久多宮宇堂平	散布地	縄文・平安
3	山崎横穴古墳群	(愛)山科字星葉	古墳	古墳	60	堂平B道跡	(会)久多宮宇堂平	散布地	平安
4	天神免古墳群	(愛)山科字虚空蔵	古墳	古墳	61	堂平C道跡	(会)久多宮宇堂平	散布地	平安
5	桜木道跡	(愛)新宮字桜木	集落	平安	62	松原道跡	(会)寺宇松原	散布地	縄・平・中
6	新宮中徒墓地	(愛)新宮字雄中	墳墓	中世	63	上ノ山道跡	(会)塔寺字上ノ山	散布地	縄文・平安
7	敷河船跡	(愛)新宮字敷野	城郭跡	中世	64	茶碗塚地蔵經塚	(会)寺宇	塚	近世
8	新宮城跡	(愛)新宮字御内	城郭跡	中世	65	大門道跡	(会)寺宇大門	散布地	縄文・洪生
9	尾塙山古墳	(愛)新宮字山小屢	古墳	古墳・中世	66	經冢道跡・古墳群	(会)塔寺字經塚	散布地	縄・佛・弥・古
10	高畠の城跡	(愛)農園字石筋	城郭跡	中世	67	鶴音森古墳	(会)寺宇上ノ山	古墳	古墳
11	八幡船跡	(愛)農園字不動前	城郭跡	中世	68	稻荷森古墳	(会)寺宇上野	古墳	古墳
12	斐徳城跡	(愛)農園字寺町	城郭跡	中世	69	稻荷塚道跡	(会)船橋塚・上野他	散布地	縄文・平安
13	新船跡	(愛)農園字寺町	城郭跡	中世	70	大道道跡	(会)大道	散布地	平安
14	松野船跡	(愛)松野字船荷前	城郭跡	中世	71	森前道路	(会)新館字森前	散布地	縄・古・平
15	一郷道跡	(山)一郷字一郷	散布地	平安	72	天王道跡	(会)八日沢字天王	散布地	平安
16	川隅塚	(山)木幡	塚	中世	73	御沼A道跡	(会)八日沢字御沼	散布地	平安
17	高船船跡	(山)小舟字高船	城郭跡	中世	74	御沼B道跡	(会)八日沢字御沼	散布地	古墳・平安
18	日照田跡	(山)木幡字日照田	散布地	縄文	75	八日沢道跡	(会)八日沢字船内	散布地	平安
19	下村地・越程塚	(山)木幡字ノ越	塚	近世	76	寺ノ内道跡	(会)大字寺ノ内	散布地	平安
20	初尚の塚	(山)小舟字尚山	塚	中世・近世	77	柳下B道跡	(会)大字柳下	散布地	平安
21	上ノ平道跡	(山)小舟字上ノ平	散布地	平安	78	村北道路	(会)大字村北	散布地	平安
22	中条道路	(山)小舟字中条	城郭跡	中世	79	惣座原道路	(会)大字惣座原	散布地	平安
23	小布施跡	(山)小舟字布施	城郭跡	中世	80	障ノ峯城跡	(会)字布字五日	城郭跡	平安
24	船岡道跡	(山)小舟字宇船岡	散布地	縄文	81	中條城久道跡	(会)中條字中條城	散布地	平安
25	舟岡跡	(山)小舟字宇舟岡南	散布地	縄文	82	中所日置道跡	(会)中所字日置城	散布地	平安
26	大村の塚群	(会)勝字大村	古墳	古墳	83	三本木道跡	(会)川字三本木	散布地	平安・中世
27	水上道跡	(会)勝字水上	散布地	平安	84	宮ノ北道跡	(会)川字宮ノ北・村前	散布地	彌生・平安
28	蘿原道跡	(会)長井字蘿原	散布地	縄文	85	政所招拍跡	(会)川字政所	散布地	平安・中世
29	板沢古墳	(会)長井字板沢	古墳	古墳	86	鏡守古墳	(会)津字鏡守・越・中西	古墳	古墳
30	板沢道跡	(会)長井字板沢	散布地	古墳・平安	87	龜ヶ森古墳	(会)青津字館ノ越	古墳	古墳
31	龜船跡	(会)長井字船	城郭跡	平安	88	男瀬道跡・石堀跡	(会)津字男瀬	古墳・石造物	古墳・中世
32	龜塚	(会)長井字龍	塚	平安	89	旭田船跡	(会)朝進田字旭田	城郭跡	中世
33	立子道沼下道跡	(会)長井字立子道沼下	散布地	平安	90	御進田山ノ神道跡	(会)御進田山ノ神地	散布地	平安・中世
34	山田道跡	(会)長井字山田	散布地	縄文・平安	91	中経塚	(会)大字中経	塚	中世
35	宮田道跡	(会)長井字宮田	散布地	平安	92	福井北道跡	(会)沼字福井北	散布地	平安・中世
36	福栄寺跡	(会)長井字寺	社寺跡	中世	93	辻道跡	(会)沼字辻田	散布地	平安
37	花畠道跡	(会)長井字花畠	散布地	縄文	94	高畠道跡	(会)川字高畠	散布地	縄・弥・平・中
38	袋原塚跡	(会)長井字袋上	窓跡	平安	95	中立田道跡	(会)立字中立田	散布地	平安
39	袋原道跡	(会)長井字袋原	散布地	縄文	96	東立田道跡	(会)川字東立田	散布地	平安
40	長井前山古墳	(会)長井字山前	古墳・古墳	平安	97	内開乾道跡	(集)知字内開乾	古墳・中世	古墳・中世
41	山子道跡	(会)宇内字山子乙	散布地	縄文	98	鶴塚道跡	(集)大木字鶴塚・下野垂	集落跡	縄文・平安
42	歎治山道跡	(会)宇内字歎治山	散布地	旧・繩・平	99	古岸敷道跡	(集)大木字古岸敷	散布地	古墳
43	鎌治山古墳群	(会)宇内字宇鎌治山	古墳	古墳	100	碌力經塚	(集)四奈田字碌力	塚	近世
44	北川田道跡	(会)宇内字北川田	散布地	縄・古・平	101	波ノ町道跡B	(集)四奈田字波ノ町	官衙開達	奈良・中世
45	宇内字古岸敷道跡	(会)宇内字古岸敷	散布地	縄文	102	國ノ町道跡A	(集)四奈田字國ノ町	官衙開達	奈良・中世
46	五日道跡	(会)宇内字五日	散布地	縄文	103	牛坂古墳	(集)四奈田字幕ノ前	塚	近世?
47	雷神山古墳群	(会)大字次郎坂	古墳	古墳	104	夏ノ前道跡	(集)四奈田字幕ノ前	散布地	奈良・平安
48	鷹負川塚群	(会)宇内字鷹負坂	中世	中世	105	太郎丸西船跡	(農)米字船跡	城郭跡	中世
49	森古北古墳群	(会)宇内字森北	古墳	古墳	106	長内道路	(農)米字長内	散布地	弥生
50	出崎古道跡	(会)大字上森北	散布地	旧・繩・平	107	太郎丸東船跡	(農)米字太郎丸	城郭跡	中世
51	出崎山古墳群	(会)大字上森北	古墳	古墳	108	見唄船跡	(上)吉田字船跡中	城郭跡	中世
52	勝負沢道跡	(会)宇内字勝負沢甲	散布地	縄文	109	西新田鹿跡群	(愛)山科字西新田也	窓跡	奈良・平安
53	次郎前道跡	(会)大字次郎前坂	散布地	旧・繩・平	110	松野千子寺經塚跡	(愛)山科字金山	塚	平安・中世
54	福富船跡	(高)大田賀字大原	城郭跡	中世	111	松野千子寺跡	(愛)松野字大門	社寺跡	奈良
55	二ノ平船跡	(高)大田賀字樺ノ峯	城郭跡	中世					
56	高寺山古墳	(会)高寺字高寺	古墳	古墳					
57	高寺道跡	(会)高寺字二重平	散布地	縄文・平安					

凡例 (愛)香多方市庵町 (農)香多方市農川町 (山)香多方市山都町
 (高)香多方市高郷町 (集)香多方市昌川町
 (土)香多方市土三宮町 (台)河沼郡会津岬町

慶徳町では、新宮・山科地区の丘陵上に築造された灰塚山古墳、虚空蔵森・天神免古墳群がある。各古墳は、福島県立博物館等によって測量調査が実施されているが、築造年代などの実態は不明である。灰塚山古墳は前方後円墳、虚空蔵森古墳群は前方後円墳2基、天神免古墳群は前方後円墳1基・円墳2基が確認されている。また慶徳町では、時期がやや離れるが7世紀前葉頃の造営と推測される山崎横穴古墳群がある。同横穴墓群は、明治26年に子供が偶然発見し、勾玉を見た村人によって発掘されている。当時の横穴墓や遺物の様子は、「山崎神靈山真図」や写真に残されている。

古墳時代の集落遺跡としては、塩川町大田本地区に所在する古屋敷遺跡が知られる。同遺跡は5世紀後半の「豪族居館」として国史跡に指定され、「コ」字状に配置された倉庫群や方形区画施設・祭祀跡などが発見されている。古屋敷遺跡の西方には新宮・山科地区に分布する先の古墳群があるが、いずれかの前方後円墳に居館の主が埋葬されている可能性も指摘されている。弥生時代末～古墳時代の遺跡分布状況から、喜多方市南西部は比較的古い段階に開けた要衝の地と推測される。

しかし、奈良時代では遺跡数が減少するようである。小田高原遺跡内の小田高原窯跡は、出土須恵器から8世紀中葉頃の操業と推測されており、杯・蓋などの遺物が採取されている。なお、同窯跡はその後の削平によって消滅した可能性がある。

平安時代に入ると、喜多方市南西部でも遺跡数が増加する傾向にある。724年以降、阿賀川・日橋川を境界として会津郡から耶麻郡が分置されたとされる。平安時代の喜多方市域は概ね耶麻郡に属し、慶徳町付近は耶麻郡の南限に位置付けられる。小田高原遺跡の周辺部では、西新田窯跡や対岸の萩ノ窪窯跡など概ね9世紀前半代の須恵器窯跡が点在する。しかし、9世紀中葉を境に小田高原遺跡周辺部の須恵器生産は衰退していくようである。

慶徳町付近の平安時代を代表する遺跡には、塩川町鏡ノ町遺跡A・B、内屋敷遺跡がある。鏡ノ町遺跡A・Bでは多数の掘立柱建物のほか、柵列・周溝状遺構などが検出されており、規模・内容の大きさから官衙関連の可能性も指摘されている。内屋敷遺跡では、猿投産施釉陶器・瓦塔などの出土資料がある。小田高原遺跡でも瓦塔片・獸脚片など仏教関連の遺物が出土している。

中世では、江戸時代に発見された慶徳町の松野千光寺経塚跡が知られ、会津藩の『家世実記』に記録が残っている。東北地方最古の経塚遺物とされ、経筒・独鉢杵・五鉢鉢や大治5年(1130)の銘をもつ石櫃が出土している。新宮中世墓地は大正3年に発見されたもので、「諸行無常」と刻まれた出土藏骨器は現在、東京国立博物館で見ることができる。新宮城跡は、新宮氏の中世城館であったが、1420年、蘆名氏によって落城する。平成18年に実施された発掘調査では、地下木組遺構が発見され、また景徳鎮産と推測される象型の青白磁が出土している。

江戸時代、慶徳地区に関連する大事件として、慶長16年(1611)の9月27日に発生した所謂「会津慶長地震」がある。この大地震で生じた旧山崎村の山崩れによって阿賀川が堰き止められて冠水し、東西4～5km・南北2～4kmに及ぶ山崎新湖が形成された。この湖によって23の集落が水没したとされ、山崎新湖が完全に消滅したのは震災後34年以上と伝えられている。また山崎新湖によって、会津坂下町が越後街道筋の宿駅に変更されている。

(香 川)

第1章 調査の概要

第1節 遺跡の位置と地形

小田高原遺跡は、喜多方市慶徳町山科字古屋敷・西新田に所在する。JR磐越西線喜多方駅を基点としてその南西約6.4kmの地点に位置し、県道61号の「泡の巻橋」東端から北側へ入った水田地帯の一画に小田高原遺跡はある。遺跡の西辺を阿賀川が緩やかに北流するが、かつての河道は大きくS字状に蛇行しており、その旧河道が対岸の河沼郡会津坂下町(長井地区)との市・町境界である。

小田高原遺跡の立地は阿賀川の下流域右岸であり、その地形は通称「小田高原台地」と呼ばれる中位河岸段丘面と河道部に大きく分けられる。調査対象域の地区分けでは、調査Ⅰ区が中位河岸段丘面、調査Ⅱ・Ⅲ区が河道部に位置付けられる。小田高原台地は火山灰で被覆された中位砂礫台地で、標高200m前後のなだらかな地形が広がる。平成22年度に実施した1次調査の成果から、古代集落の中心は小田高原台地で展開していたものと推測される。なお、小田高原台地は、圃場整備等による土地改変が大規模に行われており、部分的に旧地形を消失している。

一方、調査Ⅱ・Ⅲ区の河道部では、概ね2段の小段丘状地形が認められ、狭長なテラス状の平坦面が流路方向に延びている。同地形は段丘斜面からの崩壊性堆積物によって埋没した河床が再度侵食されたもので、基盤侵食による一般的な段丘形成とは異なる。崩壊性堆積の要因には降雨・地震等があり、1次調査では大規模な地すべり痕を確認している。また、調査Ⅱ・Ⅲ区を分けた沢も崩壊性地形である。調査Ⅱ・Ⅲ区は、畑地・山林等に利用されていた。

第2節 調査経過

平成22年度の1次調査では、調査Ⅲ区8,500m²の内、北部3,000m²について発掘調査を実施している。今回の2次調査は、調査Ⅲ区の残部5,500m²が対象である。2次調査の早期着手を目的として平成23年3月7日から重機を導入し、約2週間の日程で作業用道路の確保・大型土叢による安全対策などの事前整備を行う計画であった。また、慶徳地区を対象とした作業員募集説明会を3月28日に予定していたが、3月11日の東日本大震災により、2次調査に向けた準備作業をすべて中断する事態となった。その後、準備作業の回復に伴い、作業員募集説明会を5月12日に実施した。

5月23日、調査員2名が現地入りし、2次調査を開始する。作業用道路などの整備を行い、5月25日から重機による表土除去を始める。しかし、震災の影響もあって重機の台数確保が容易でなく、表土除去作業がやや遅滞した。

6月6日から作業員の雇用を開始し、調査区北部より遺構検出作業に入る。6月14日にS I 14、16日にSK 36を検出する。6月21日、東北地方南部が梅雨入り。6月30日、S I 15を検出する。

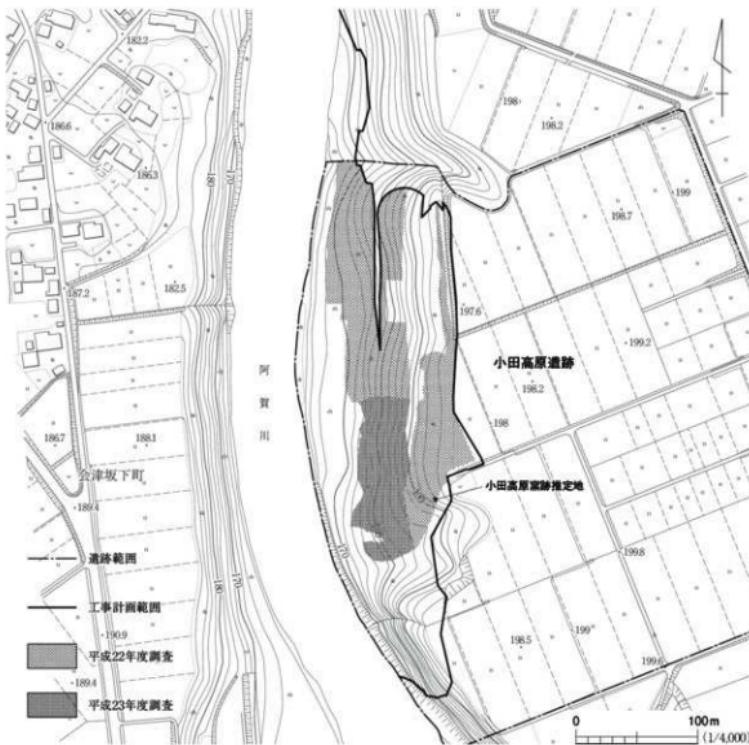


図4 調査範囲と工事計画

7月上旬の雨量は比較的少なく、11日に梅雨明け宣言。同日、喜多方市の最高気温は37.4℃を記録する。7月15日、慶徳・豊川地区を対象とする作業員追加の募集説明会を実施する。7月の調査は、6月と同様に調査区北部を中心に行う。7月28日、未明から大雨。翌29日も大雨で、遺跡に隣接する阿賀川の水位が著しく上昇する。この集中豪雨により、新潟県および会津地方の被害甚大。

8月3日、ようやく夏の日差しとなる。8月8日から追加雇用の作業員が加わる。8月12日、調査区北部の遺構精査がほぼ終了した。8月15~19日はお盆期間として調査を休止し、22日から調査を再開する。8月後半は、主に調査区中央部の調査を行う。しかし、同部の遺構・遺物量は比較的希薄であったため、9月から調査の主力を調査区南部に移し、縄文時代の遺構検出を行う。

9月6日、縄文時代後期のSM01を確認する。縄文時代の遺構・遺物は、後・晚期が主体と思われたが、9月27日、SM01のはば下層から縄文時代前期以前と考えられる石器集中地点SX03を検出する。昨年度の1次調査では秋雨の影響を強く受けたが、2次調査では秋雨の影響がほとんど

どなく、順調に調査が推移する。10月4日から平成24年度調査予定地(調査Ⅱ区)の予備調査を断続的に実施し、10月19日に終了する。10月27日、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。撮影終了後、遺構の各種断面図や遺構確認作業を開始する。調査区南東部で堆積土が地すべり状に傾動しているのが確認された。

11月8～11日、地形測量を行う。11月14日、撤収準備を開始する。11月16日、2次調査区の5,500m²の引き渡しを行い、調査Ⅲ区の調査が完了する。11月17日、来年度の調査に向けて調査Ⅱ区にブルーシートを掛け、遺構面を保護するための養生を行う。翌18日、発掘器材の撤収が終了し、小田高原遺跡2次調査の工程がすべて終了した。

平成23年5月23日～11月18日の調査期間において、作業ができなかった雨天日等を除いた調査日数は延べ93日である。

第3節 調査方法

1・2次調査区は、公共座標IX系X=179,800、Y=-3,000を基点とする10m四方グリッドで網羅している。グリッドの区画は、基点から東方向へA・B・C…の大文字アルファベットを、南方向へ1・2・3…の算用数字を付け、その組み合わせによってA1・B1・C1…と呼称した。標高は、平成22年度に設定した3級基準点をもとにしている。

調査対象範囲が広域であることから、便宜上、調査I～Ⅲ区に分け、河岸段丘面側の東部地区を調査Ⅰ区、河道側の西部地区を調査Ⅱ・Ⅲ区とした。調査Ⅱ・Ⅲ区の境界は、沢地形を基準に公共座標X=179,650を東西軸として南北に分けた。

基本土層の表記は大文字L・ローマ数字・アルファベットの順序で組み合わせた。調査Ⅲ区におけるLⅢの細分については、1次調査ではLⅢa・Ⅲbのように小文字アルファベットを付けており、2次調査でも適用している。しかし、LⅢa・Ⅲbが適用できなかった地点については新たに基本土層を設定し、LⅢA・ⅢBのように大文字を付けて区別した。遺構内堆積土や複雑に重層する沢堆積土については、小文字ℓと算用数字でℓ1・ℓ2…のように表した。

遺構番号は、1次調査から継続して付けた。遺構調査は、四分割法を原則とした。しかし、落し穴などの狭長な遺構については二分割法とし、補足的にエレベーションを付加した。遺構実測図の縮尺は、規模・細部状況に合わせて1/10・1/20である。遺構平面図の作成は、水糸の1m方眼で作成した。地形測量図の作成は1/200を行った。

写真記録は、35mm一眼レフカメラ、デジタルカメラで適時行った。また、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。

発掘調査で得られた各種記録・出土遺物は、財團法人福島県文化振興事業団遺跡調査部で整理作業を行った。報告書刊行後は各種台帳を作成し、閲覧可能な状態で福島県文化財センター白河館に収蔵・保管する予定である。

(香川)



図5 調査範囲の区割りとグリッド配置

表2 壁穴住居跡一覧

遺構番号	報告書	位置	平面形	規模(cm)			年代	遺物	備考
				長径	短径	深さ			
S101	「阿1」	I区(P27・28)	方形	400	350	20	8C末~9C前	梯柵	
S102	「阿1」	I区(P26・27)	方形	510	(410)	20	8C末~9C前	鉢具	工房?
S103	「阿1」	I区(P・Q28・29)	方形	400	—	20	8C末~9C前		南半調査区外
S104	「阿1」	II区(H・I10)	長方形	400	340	42	9C末~10C前	土師器	
S105	「阿1」	II区(I・J8)	方形	(327)	—	10	9C中~後	土師器	
S106	「阿1」	III区(J17・18)	長方形	518	405	23	9C末	土師器・須恵器	S106>S111
S107	「阿1」	I区(Q27)	方形	220	190	30	8C末~9C前		壁穴状遺構
S108	「阿1」	II区(I7)	長方形	(435)	353	23	9C末~10C前	土師器・刀子	
S109	「阿1」	II区(H・I9)	方形	244	(220)	14	9C末~10C前	土師器	壁穴式住居跡
S110	「阿1」	I区(P26・27)	方形	360	300	20	8C末~9C前	土師器・須恵器	壁穴式遺構
S111	「阿1」	III区(J17)	方形	530	498	61	9C中~後	土師器・須恵器	
S112	「阿1」	II区(H13)	方形	550	520	40	9C末~10C前	土師器・刀子	壁穴式遺構
S113	「阿1」	II区(H11)	長方形	438	350	30	9C中~後	土師器・須恵器	壁穴式遺構
S114	「阿2」	III区(I・J17-18)	方形	410	390	40	9C中~後	土師器・須恵器	
S115	「阿2」	II区(I・J24)	長方形	(378)	(284)	13	9C末~10C前	土師器・土製品	土器焼成遺構?

表3 須恵器窯跡一覧

遺構番号	報告書	位置	平面形	規模(cm)			年代	遺物	備考
				長径	短径	深さ			
SR01	「阿1」	II区(K6)	羽子板状	(206)	124	—	9C中~後	須恵器	SR01>SR03
SR02	「阿1」	II区(K6)	橢円形	(205)	(103)	—	9C中~後		
SR03	「阿1」	II区(J・K5・6)	台形	(195)	145	—	9C中~後	須恵器	

表4 溝跡一覧

遺構番号	報告書	位置	平面形	規模(m)			年代	遺物	備考
				長径	短径	深さ			
SD01	「阿1」	I区(N8~O29)		213	14	0.4	8C末~9C前		
SD02	「阿1」	I区(O28,P28・29)		100	0.6	0.6	8C末~9C前	土師器	
SD03	「阿1」	I区(O・P22)		64	0.6	0.5	8C末~9C前		排水溝?
SD04	「阿1」	II区(K5~7)		28	0.9	0.2	平安時代~		道路?
SD05	「阿1」	III区(J18)		60	174	0.2	平安時代		通路?
SD06	「阿1」	I区(O・P20)		44	0.4	0.1	奈良~平安時代	土師器	排水溝?
SD07	「阿1」	I区(O15・16)		60	16	0.5	8C末~9C前		排水溝
SD08	「阿1」	I区(O15)		32	11	0.3	8C末~9C前		排水溝
SD09	「阿1」	II区(H14)		(95)	19	1.0	平安時代~	土師器	排水溝

表5 土坑一覧

遺構番号	報告書	位置	平面形	規模(cm)			年代	遺物	備考
				長径	短径	深さ			
SK01	「阿1」	I区(Q28)	橢円形	120	90	25	8C末~9C前		
SK02	「阿1」	I区(Q28)	橢円形	110	90	25	奈良~平安時代		土器焼成土坑?
SK03	「阿1」	I区(P27)	方形	300	270	35	8C末~9C前		木炭焼成土坑?
SK04	「阿1」	I区(O29)	方形	(115)	110	35	8C末~9C前		簡易水溜用施設
SK05	「阿1」	I区(O28)	方形	(230)	215	20	8C末~9C前		土器焼成土坑
SK06	「阿1」	I区(P26)	円形	170	—	80	8C末~9C前		落し穴
SK07	「阿1」	I区(O29)	方形	140	(110)	40	8C末~9C前		
SK08	「阿1」	I区(L31)	長方形	115	55	70	礎文時代		
SK09	「阿1」	I区(P21)	橢円形	230	140	75	礎文時代		
SK10	「阿1」	II区(H10)	橢円形	192	140	18	平安時代	土師器	土器焼成土坑?
SK11	「阿1」	I区(P・Q27)	方形	135	80	20	奈良~平安時代		
SK12	「阿1」	I区(P27・28)	円形	80	—	20	8C末~9C前		
SK13	「阿1」	I区(O28)	方形	180	(160)	15	8C末~9C前		
SK14	「阿1」	I区(O28)	橢円形	120	(50)	20	8C末~9C前		土器焼成土坑?
SK15	「阿1」	I区(O28)	橢円形	(100)	(40)	10	8C末~9C前		SK14>SK15

第1章 調査の概要

遺構番号	報告書	位置	平面形	規模(cm)			年代	遺物	備考
				長径	短径	深さ			
SK16	「阿1」	I区(P26)	橢円形	170	145	25	8C末~9C前		
SK17	「阿1」	I区(P26)	円形	250	—	95	8C末~9C前		簡易水溜用施設
SK18	「阿1」	III区(J18)	橢円形	200	173	21	9C末	土師器・須恵器	SK18>SD05
SK19	「阿1」	I区(O19)	円形	90	—	25	奈良・平安時代		木炭焼成土坑
SK20	「阿1」	I区(P26)	橢円形	160	(140)	70			S102>SK20
SK21	「阿1」	III区(J18)	橢円形	95	85	30	9C末~	土師器	SK21>S106
SK22	「阿1」	III区(I20)	橢円形	56	48	14	9C中~後	土師器	
SK23	「阿1」	III区(J18)	円形	54	—	30	9C中~末	土師器	ロクロピット
SK24	「阿1」	III区(J19)	円形	58	—	14	9C中~末	土師器	
SK25	「阿1」	II区(18)	円形	150	—	23	9C末~10C前	土師器	土器焼成土坑
SK26	「阿1」	II区(H10)	不明	210	(84)	16	9C末~10C前	土師器・須恵器	
SK27	「阿1」	I区(O17)	長方形	(300)	90	15	奈良・平安時代		木炭焼成土坑
SK28	「阿1」	II区(J12)	円形	80	—	40	平安時代		
SK29	「阿1」	III区(I21~22)	長方形	(176)	(120)	26	9C	土師器	土器焼成土坑
SK30	「阿1」	III区(I20)	円形	68	62	20	8C末~9C初		
SK31	「阿1」	III区(I22)	円形	(90)	—	16	8C末~9C初		
SK32	「阿1」	II区(G12)	橢円形	213	150	14	9C代	土師器・須恵器	土器焼成土坑?
SK33	「阿1」	I区(O17)	橢円形	100	(60)	15	奈良・平安時代		
SK34	「阿1」	II区(H9)	橢円形	115	98	32	9C末~10C前		
SK35	「阿1」	II区(J5)	方形	(95)	(53)	10	平安時代~		木炭焼成土坑
SK36	「阿2」	III区(I24)	台形状	172	164	26	9C末~10C前	土師器・須恵器	土器焼成土坑
SK37	「阿2」	III区(J25)	橢円形	83	73	13	9C末~10C前	土師器・土製品	土器焼成土坑
SK38	「阿2」	III区(I~J24)	方形	(122)	(108)	8	9C後半	土師器・須恵器	土器焼成土坑
SK39	「阿2」	III区(K24)	橢円形	118	86	13	平安時代		土器焼成土坑
SK40	「阿2」	III区(K35)	橢円形	117	92	10	9C代	土師器	
SK41	「阿2」	III区(J~K35)	橢円形	130	79	78	绳文時代		落し穴
SK42	「阿2」	III区(H33)	橢円形	98	85	13	9C後半		木炭焼成土坑
SK43	「阿2」	III区(K33)	長方形	124	69	86	绳文時代		落し穴
SK44	「阿2」	III区(K34)	橢円形	148	102	86	绳文時代		落し穴
SK45	「阿2」	III区(J36)	長方形	136	(113)	56			落し穴
SK46	「阿2」	III区(K30)	橢円形	127	100	32			
SK47	「阿2」	III区(K32)	長方形	136	69	89	绳文時代		

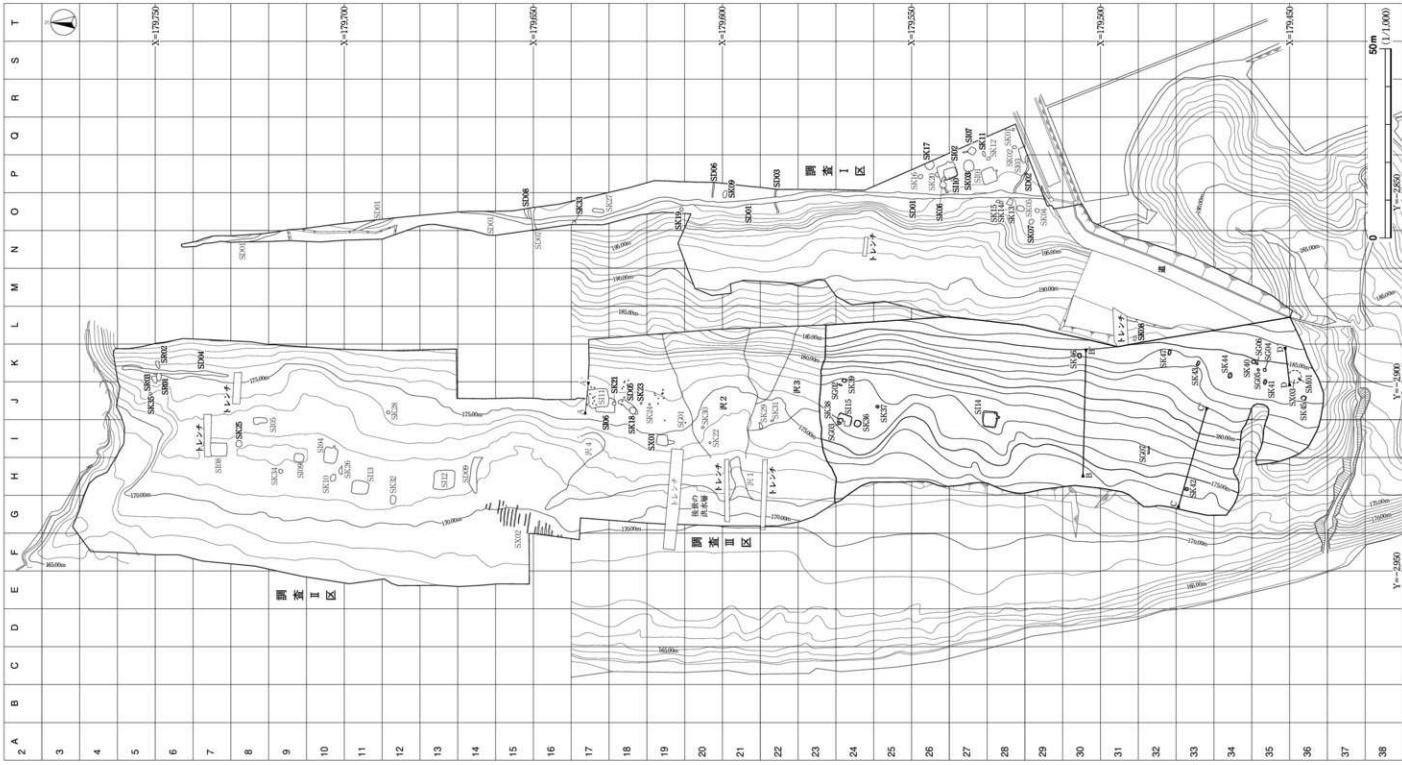
表6 燃土遺構一覧

遺構番号	報告書	位置	平面形	規模(cm)			年代	遺物	備考
				長径	短径	深さ			
SG01	「阿1」	III区(I20)		75	54	3	平安時代		
SG02	「阿2」	III区(J24)		100	35	6	平安時代	土師器	
SG03	「阿2」	III区(I24)		106	59	7	平安時代	土師器	土器焼成遺構?
SG04	「阿2」	III区(K35)		83	82	7	平安時代	土師器・須恵器	土器焼成遺構?
SG05	「阿2」	III区(K35)		60	59	6	平安時代	土師器	
SG06	「阿2」	III区(K35)		59	46	6	平安時代	土師器	
SG07	「阿2」	III区(I32)	橢円形	(206)	(43)	13			現代の木炭窯?

表7 その他の遺構一覧

遺構番号	報告書	位置	平面形	規模(cm)			年代	遺物	備考
				長径	短径	深さ			
SM01	「阿2」	III区(K36)	円形	56	34	14	绳文後期中~後	绳文土器	土器埋設遺構
SX01	「阿1」	III区(I19)	方形	302	298	70	18C後~	磁器・鉄製品	堅穴道構
SX02	「阿1」	II区(F16, G14~16)		(580)	—	—	近世?		磁状道構
SX03	「阿2」	III区(K36)		—	—	—	绳文早期末	石器・绳文土器	石器集中地點

*「阿1・2」…「阿賀川改修(長井地区)遺跡発掘調査報告1・2」
規模の()は遺存値、備考の()は新()>(旧)を示す。



うら白

第2章 調査成績

第1節 遺構・遺物の分布

今回の2次調査は、調査Ⅲ区の継続調査である。調査Ⅲ区は、阿賀川の河道部に位置し、南北約190m・東西約45mを測る。調査Ⅲ区の面積は8,500m²で、平成22年度の1次調査では23グリッド列以北の3,000m²を、2次調査では残5,500m²を対象とした。2次調査で検出した遺構は、竪穴住居跡2軒(S I 14・15)・土坑12基(S K 36～47)・焼土遺構6基(S G 02～07)・土器埋設遺構1基(S M01)・石器集中地点1カ所(S X 03)である。

調査Ⅲ区の標高は、斜面上位の東辺が約187m、下位の西辺が約170mである。比高約17mの斜面中位付近(標高約176～177m)に、南北方向へ延びる狭長な小段丘面が形成されている。同段丘面の西端は波状に入り組み、テラス状の張り出しと沢が交互に連続している。調査Ⅲ区の1・2次調査で確認した平安時代の竪穴住居跡は計4軒であるが、いずれもこの小段丘面に立地する。

調査Ⅲ区における1次調査の成果は、北端部に位置する平安時代のS I 06・11に代表される。両住居跡は重複関係にあり、S I 06が9世紀末葉～10世紀初頭頃、S I 11が9世紀中～後葉頃と推測される。S I 06の南側にあるS K 18は底面が赤褐色に焼け、また多量の土器器やスサ入粘土塊が土坑内外で出土していることなどから、土器焼成坑の可能性が推測される。出土遺物からS I 06・S K 18はほぼ同時期であり、S I 06は土器焼成坑に関連していた可能性が推測される。一方、S I 11の出土遺物にはS I 06で見られなかった須恵器杯が含まれ、胎土分析の結果、同杯は調査Ⅱ区北端部のS R 01～03で焼かれた可能性が指摘されている。このことからS I 11は須恵器生産にも関連していた可能性がある。

2次調査では、I・J 24・25グリッドでS I 15、S K 36・37、I・J 27・28グリッドでS I 14を検出し、出土遺物からS I 15、S K 36・37はS I 06に、S I 14はS I 11に関連した時期が推測される。S I 15は竪穴住居跡の名称を付けたが、S K 36・37とともに土器焼成坑に関連した遺構の可能性が考えられるものである。一方、S I 14の周囲には遺構が見当らない。S I 06・15間の距離は約60m、S I 11・14間の距離は約100mである。

斜面中位の小段丘面の形成はS I 14付近までが限界であり、以南の地域は、段差がほとんどない連続的な斜面地形に変わる。調査Ⅲ区南端部では、斜面上位のK 34～36グリッド付近に小段丘面が遺存しており、同平坦面から平安時代のS G 04～06を検出した。S G 04・05も土器焼成坑に関連した遺構の可能性がある。同平坦面の標高は約184.5mで、下方の小段丘面との比高は約8mである。

S G 04～06が立地する小段丘面には、縄文時代の遺構も分布する。K 36グリッドに位置するS M01は後期中葉の土器埋設遺構である。またS M01の下層から、縄文時代早期末葉頃と考えられ

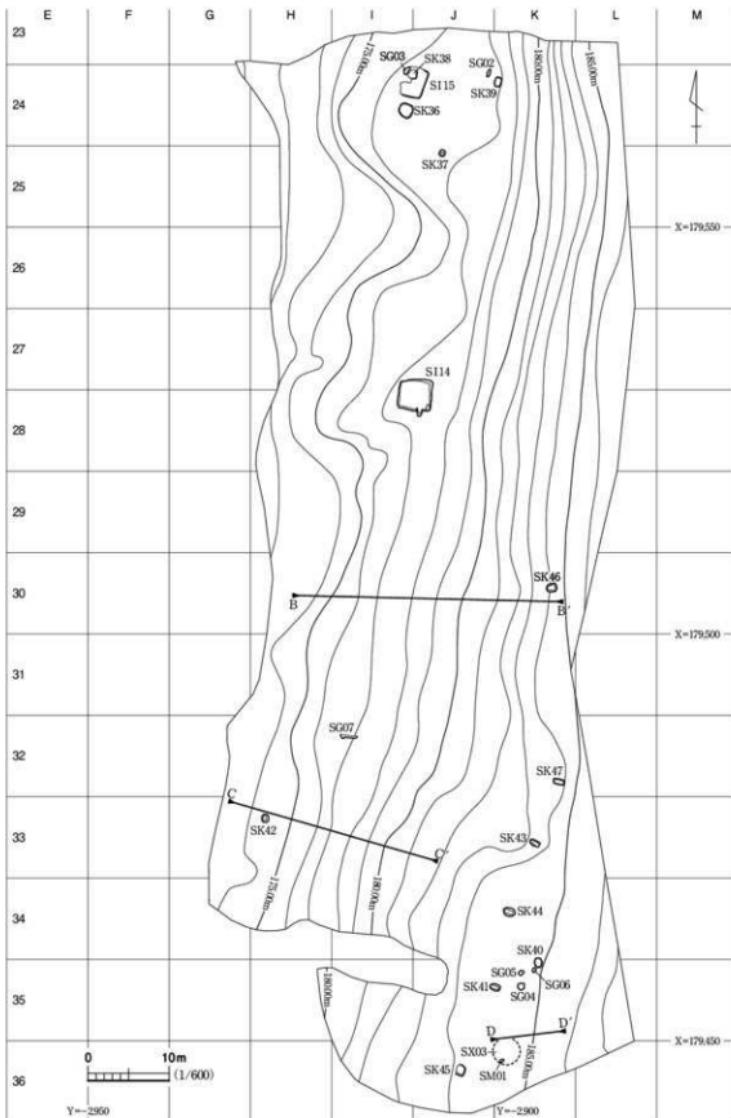


図7 2次調査区遺構配置図

るSX03を検出した。SX03は直径約35mの範囲内に80点以上の石器・剣片が散布していたもので、石質は流紋岩が大半である。他に縄文時代に位置付けられる遺構は、SK41・43・44・47の落し穴がある。1次調査のSK08(調査I区)を含めた各落し穴は、ほぼ同一標高を、10m前後の間隔で、概ね1直線に並んでおり、位置関係から同時期に配列されたものと推測される。調査III区の南西部斜面では、小規模ながら縄文時代の遺物包含層が認められ、縄文時代後・晩期の土器・石器を採取した。

なお、H24グリッドで古墳時代中期の埴・高杯が少量出土している。各土師器の出土状況から原位置を保っていないと推測したが、祭祀に関連した遺物の可能性がある。

第2節 基本土層

1次調査のSI06・11、2次調査のSI14・15は、標高176.5m前後の同一の小段丘面上に構築されている。SI14・15の調査については、1次調査時の基本土層を適用している。SI06・11の北隣に設定された基本土層(A-A')の所見では、LIIを平安時代の遺物包含層に位置付け、LIIf・IIfを平安時代の遺構の覆土、LIIIa・IIIb上面を同時代の遺構検出面としている。表土層のLIbは丘陵斜面から流入した地山崩落土で、2次調査区の小段丘面上にも厚く堆積していた。SI14・15および周辺に分布する遺構の検出面は、いずれもLIIIb上面である。また、自然埋没と推測されるSI14内の堆積土は、LIIf・IIfに類似していることが観察された。

しかし、SI14よりも南側の地域では、小段丘地形が消失して段差のない斜面地形に変貌するため、堆積土の状況が1次調査の基本土層と必ずしも合致しない。そこで、29グリッド列以南の基本土層については、土層ベルトB-B'・D-D'の観察から新たに設定した。LIIについては、1・2次調査とも平安時代の遺物包含層に位置付けている。だが、LIIIについては、1・2次調査区の間で性格が異なる。1次調査ではLIII面が遺跡基底面になっているが、2次調査ではLIII以下を縄文時代の遺物包含層に位置付けた。2次調査におけるLIIIの細分は、1次調査のLIIIa・IIIbと区別するためLIIIa・IIIbとしている。

29グリッド列以南の基本土層について概観する。LIは表土層である。1次調査区のLIbのような地山崩落土はほとんど確認できなかった。斜面上方では造成盛土が混じり、土師器・須恵器など主に平安時代の遺物を採取している。LIIは、層厚20cm前後の黒褐色土である。LII内に平安時代の土師器・須恵器が含まれていたが、遺物量は非常に少ない。

LIII・IVについては、縄文時代の遺物包含層とした。2次調査区の南端部には小規模な平坦面が形成されており、堆積土の状況はD-D'のとおりである。LIIIaからは主に加曾利B3式並行期の土器が出土し、同層は概ね縄文時代後期中葉頃の遺物を含む。LIIIbは沼沢バミスと思われるに古い黄色砂層で、下のLIVaと明確に分ける間層になっている。LIVaの下位から、縄文時代早期末葉前後頃の石器関連遺構と推測されるSX03を検出した。LIVbを地山漸移層、LVを地山とし、

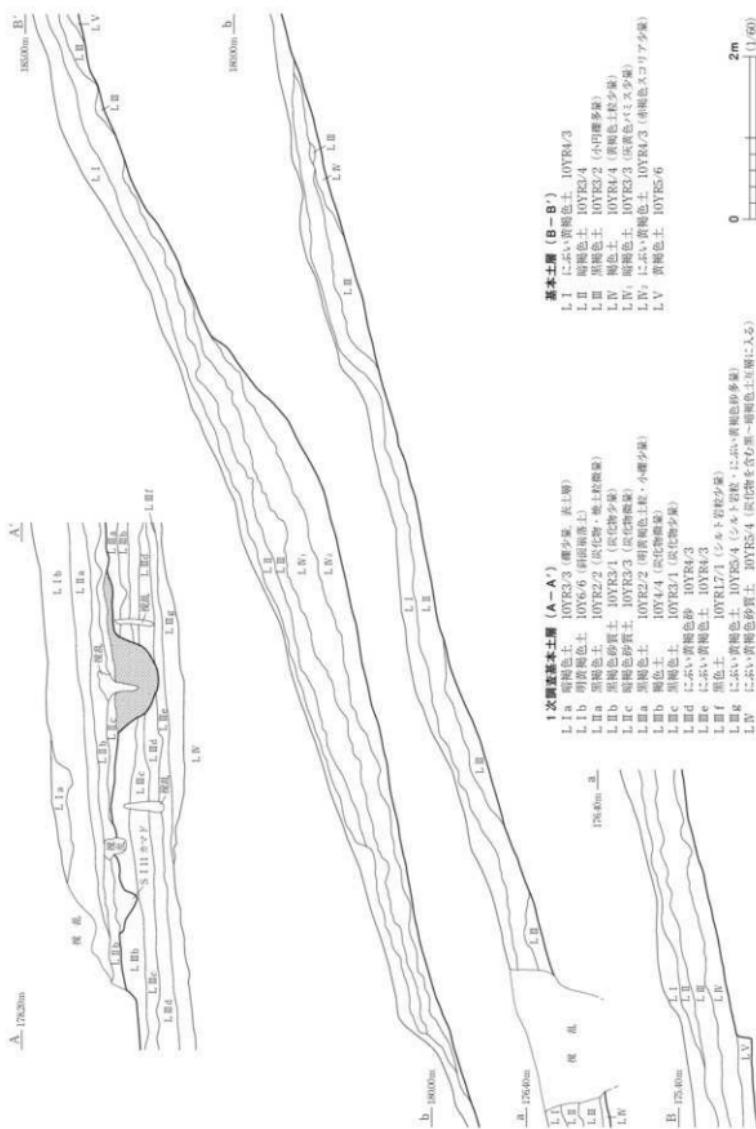
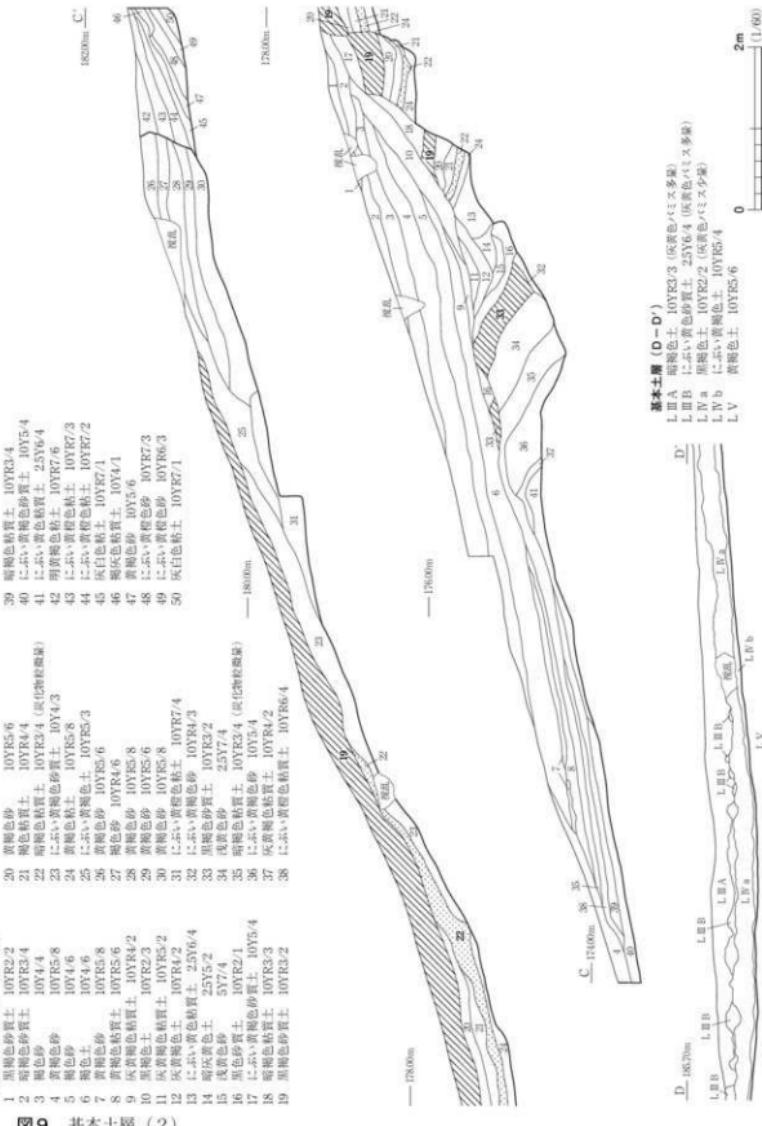


図8 基本土層(1)

圖 9 基本土層 (C-D)



落し穴の検出面とした。平坦地と斜面地ではL III・IVの土質・土色が必ずしも一致しないが、B-B'のL IIIは、縄文時代後～晩期の遺物が含まれており、L III Aに近い時期が想定される。B-B'のL IV、L IV₁・IV₂から遺物を確認することはできなかった。

2次調査区南西部のC-C'は、特異な堆積状況を呈するため、遺構と同様にℓ 1～50の土層番号を付けた。斜面上方のℓ 42～50・ℓ 26～30は不整合の関係であり、侵食後、砂層のℓ 26～30が水平に近い角度で堆積している。ℓ 26～30の形成原因・時期等は分からぬ。

ℓ 19については、斜面上方で平安時代の遺物が含まれていたこともあり、当初はL IIに比定していた。しかし、斜面下方でℓ 19以下の層が段階状に断層・傾動しており、その上部にℓ 1～6が堆積する。平安時代のSK 42はℓ 4を掘り込んでいることが確認されたため、ℓ 19の形成時期は平安時代以前と考えられる。ℓ 22は縄文時代後～晩期の遺物包含層で、L IIIに比定される。またℓ 35でも同時期の遺物が出土しており、ℓ 22・35は同一層であった可能性がある。

C-C'で観察された土砂崩落の原因については不明であるが、1次調査で地震の影響による円弧すべりの可能性が指摘された堆積状況(付章-図55)にも類似している。C-C'の崩落が発生した時期については、縄文時代晩期～平安時代の間と推測される。
(香川)

第3節 壇穴住居跡

今回の2次調査で検出した壇穴住居跡は、S I 14・15の2軒である。遺構番号は1次調査から継続して付けている。両住居跡の立地は、1次調査のS I 06・11から連続する同一の小段丘面である。S I 14は、南壁にカマドが設けられた典型的な壇穴住居跡である。S I 15は、カマド・上屋等の有無が明確でなく、住居跡以外の遺構の可能性もある。しかし、S I 15は壇穴状の構造をもつことから、本節で報告することにした。

14号住居跡 S I 14

遺構(図10・11、写真9・10)

調査区中央北寄りの、I・J 27・28グリッドに位置する。S I 15やSK 36～39と同一面の、幅の狭い段丘面に立地し、周辺は西に向かって緩やかに下っている。L II除去後、L III bおよびL IV上面で黒褐色土の広がりとして検出した。他の遺構との重複関係は認められない。遺構内堆積土は5層に分けた。全体としてはレンズ状堆積を成し、周壁際の堆積土には壁からの崩落土とみられる塊状の土が混じる。これらのことから、いずれも自然堆積と判断した。またℓ 1～3には、少量の炭化物粒が混入していた。

平面形は方形で、その規模は南北3.9m、東西4.1mである。周壁は45～70°と急角度で立ち上がる。壁の残存高は23～40cmで、斜面上位にあたる東壁の残りが良い。床面は、ほぼ平坦に整えられていた。床面の大部分に踏み締まりが確認でき、カマドの周辺は特に固く踏み締まっていた。ま

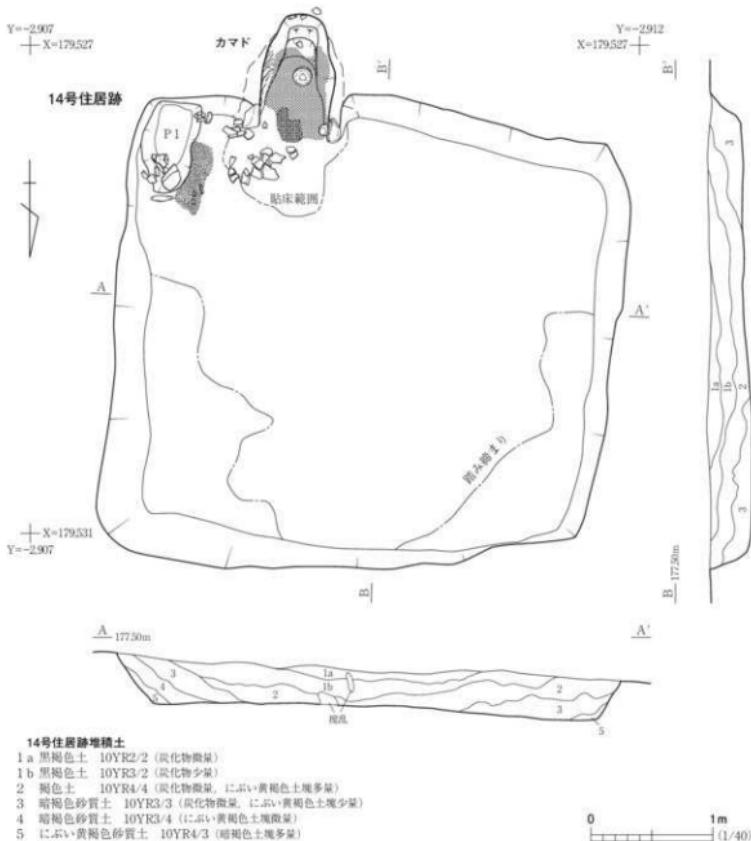


図10 14号住居跡（1）

た、北壁中央付近では壁際まで踏み縮まりが認められた。このため、北壁中央に住居の出入口があつた可能性がある。

住居内施設として、カマドとピット1個を検出した。カマドは南壁の中央から1m弱東寄りに位置する。カマドの全長は105cm、燃焼部の規模は焚口幅66cm、奥行き70cmである。燃焼部の底面は床面とはほぼ同じ高さで、5cm前後の厚さで赤褐色に熱変化していた。また燃焼部のやや奥壁寄りから、図12-7の土師器甕が倒立して出土した。甕の表面は2次的な被熱により剥落が著しい。器面の状態と出土位置から、図12-7はカマドの支脚と考えられる。煙道部は、カマド奥壁から住居外に35cmほど張り出している。煙道部の幅は上端で41cm、下端で24cmである。袖部は、左袖

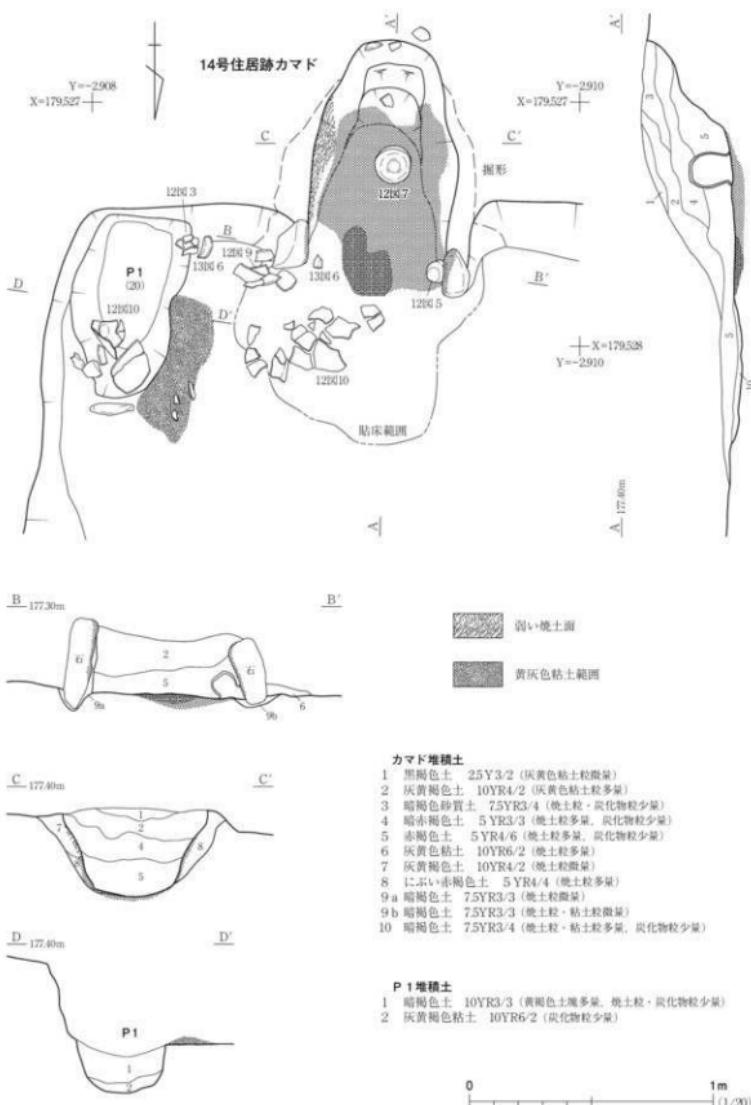


図11 14号住居跡 (2)

が30cm、右袖が40cmほど住居内に張り出している。袖部の芯材として長さ30cmほどの自然礫を立て、粘土混じりの土で構築したものとみられる。袖石の燃焼部側は、被熱していた。また図12-5に示した小型の甕が、口縁部を下にして、右袖石の根元に立て掛けられたような状態で出土している。燃焼部底面や袖石の甕に覆われた部分についても被熱していることから、図12-5は袖部の構築材でなく、遺棄されたものと考えられる。カマド内堆積土は10層に区分した。 ℓ 1はカマドの天井部が崩落した後の流入土である。 ℓ 2~5は、主にカマドの天井や燃焼部内壁からの崩落土であろう。 ℓ 6はカマドの右袖から崩れた粘土塊である。 ℓ 7・8はカマドの掘形埋土である。 ℓ 8には多量の焼土粒が含まれているため、カマドは改修された可能性がある。 ℓ 9は、袖石を立てるための埋土である。 ℓ 10は、燃焼部内からカマド前にかけて拡がる焼土粒・粘土粒を多く含む堆積土である。 ℓ 10の表面は固く踏み締まり、貼床状となっている。その範囲を平面図中に二点鎖線で示した。

ピットは南東隅の床面で検出した。P 1の平面形は南北に長い不正な方形で、P 1の上端周辺には黄灰色粘土の広がりが認められた。P 1の規模は、長さ75cm、幅43cm、深さ20cmである。堆積土は2層に分かれた。 ℓ 1は黄褐色土塊や焼土粒、炭化物粒を含む堆積土である。 ℓ 2は、粘性が強く焼土を含まない粘土で、P 1の底面に薄く堆積していた。 ℓ 2は、カマドの補修等のために貯蔵されていた粘土ではないかと考えている。P 1は小規模で浅いものの、その位置から貯藏穴として機能した可能性がある。ただし、図12-10などの遺物が ℓ 1上面から出土している。このことから、住居廃絶時にはすでに埋まっていたものと考えられる。なお、本住居跡から柱穴は検出されなかった。

遺物（図12・13、写真19）

遺構内からは土師器の杯片39点、甕片599点、須恵器の杯2点が出土している。遺物の多くは、カマドの焚口付近やP 1周辺から出土した。図12-1~4は土師器杯である。1・2・4はいずれも内面にヘラミガキと黒色処理が施されている。1~3は体部下半から底部にかけて手持ちヘラケズリが、4には回転ヘラケズリが認められる。1は、西壁際の堆積土中位から出土している。体部が緩やかに内湾する器形で、その底径／口径比は0.56、器高／口径比は0.34である。1の底面には、交差する複数本の線刻が認められる。3は、カマド脇の床面近くから出土している。体部が内湾気味に立ち上がり、口唇部でわずかに外反する。2次的な被熱により器面が爆ぜ、黒色処理は確認できない。底径／口径比は0.42、器高／口径比は0.26である。

図12-5~10・図13-1~5は土師器甕である。図12-5~7のような比較的小型の短胴甕と、同図8~10のような長胴甕が出土している。5~10の器形をみると、胴部がやや膨らみ、頸部から口縁部にかけて「く」字状に開き、口唇部が上につまみ出されている。特に6~10はつまみ出しが顕著で、口唇部に縁帶が形成されている。また6・7・10は口唇部がわずかに内傾する。個々の特徴をみると、図12-5は胴部への再調整が施されていない。胴部外面の荒れ、剥落が著しく、口縁部内面に炭化物の付着が認められる。7の胴部下端には、回転ヘラケズリが施されている。8

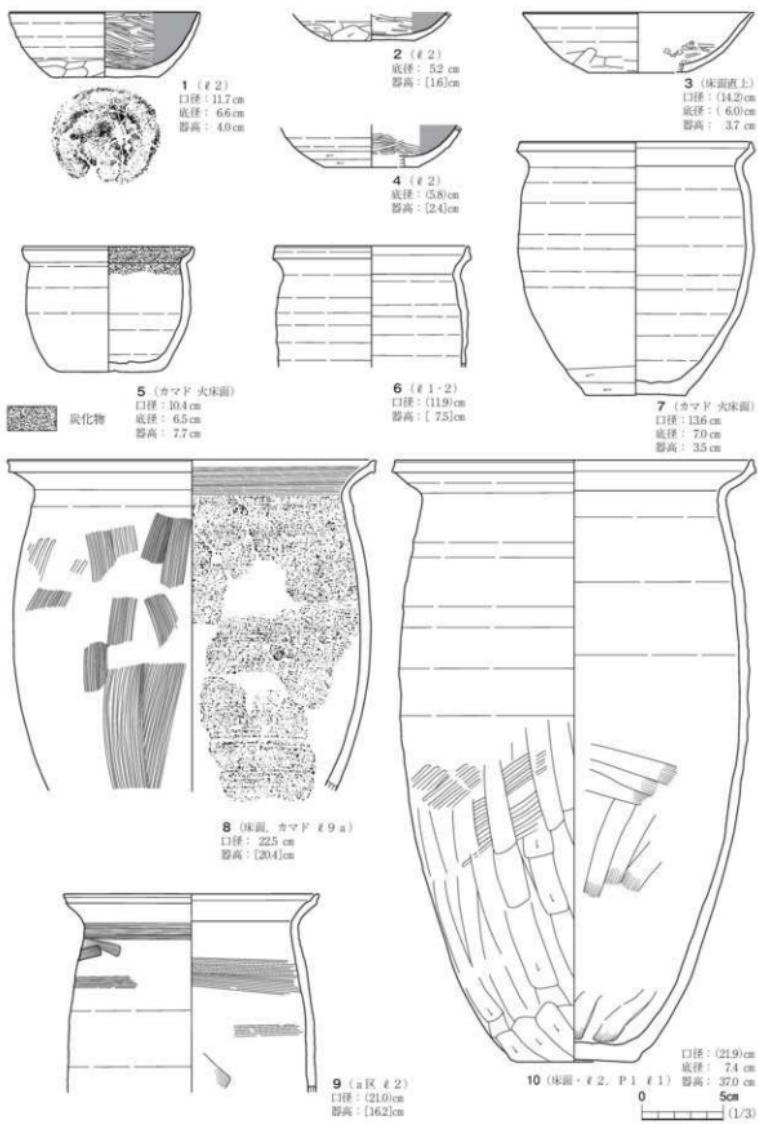


図12 14号住居跡出土遺物 (1)

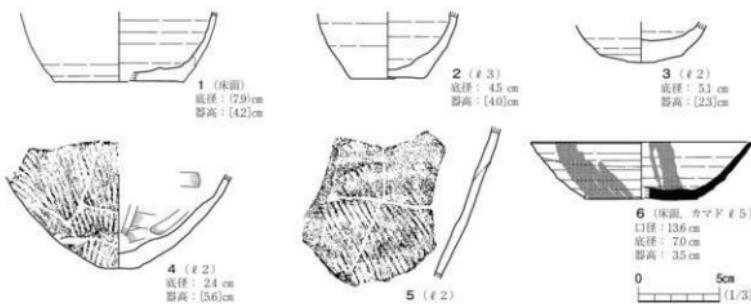


図13 14号住居跡出土遺物（2）

は外面にタタキの痕跡がわずかに残り、縦位のハケメ調整が施されている。内面には横位のカキメが密に施されている。9は口唇部が外向きにつまみ出されている。内外面には横ナデが加えられている。10の胴部下半にはタタキを加えた後、ヘラケズリ調整が施されている。内面にはヘラナデ調整が認められ、特に底部では強く撫でつけられている。胴部下半における器面の荒れ方が著しい。底部片では、平底の図13-1・2、回転ヘラ切りによって丸底風に成形された3、タタキ調整が加えられ、極端に底径が小さい4などがある。4の内面には、叩き出しによる凹凸が残る。5は甕の胴部下半に近い破片とみられ、タタキメが認められる。

図13-6はカマド脇の床面とカマド内堆積土ℓ5から出土した須恵器杯である。底部から口縁部までは直線的に立ち上がる器形である。底部の切り離しは回転ヘラ切りによるとみられ、乾燥が進まないうちにナデが加えられている。焼成は良好で堅微である。カマド脇から出土している破片の色調は灰オリーブ色だが、カマド内出土の破片は、より青味が強い色調である。杯が割れた後、破片が被熱したものであろう。内外面に火だしき痕が認められ、口縁部には重ね焼きによる帯状の変色も見られる。6の底径／口径比は0.51、器高／口径比は0.26である。

まとめ

南北3.9m、東西4.1mの規模をもつ方形の壁穴住居跡である。住居内施設として、カマドとピット1個を検出した。出土遺物の多くは、カマドとP1周辺から出土している。遺物は土師器の杯・甕が主で、須恵器の出土量は極めて少ない点が特徴的である。その時期は出土遺物の特徴から、9世紀中葉～後葉と考えられる。

(今野)

15号住居跡 S I 15

遺構 (図14・15、写真11・12)

I・J 24グリッドに位置する住居跡である。舌状に張り出す小段丘面の突端部に立地し、S I 15の西側は比高約2mの段差になっている。検出面はL III b上面である。検出面の標高は約176.7mである。S I 15の周辺には、SK 36・37が近接している。SK 38・SG 03と重複しており、

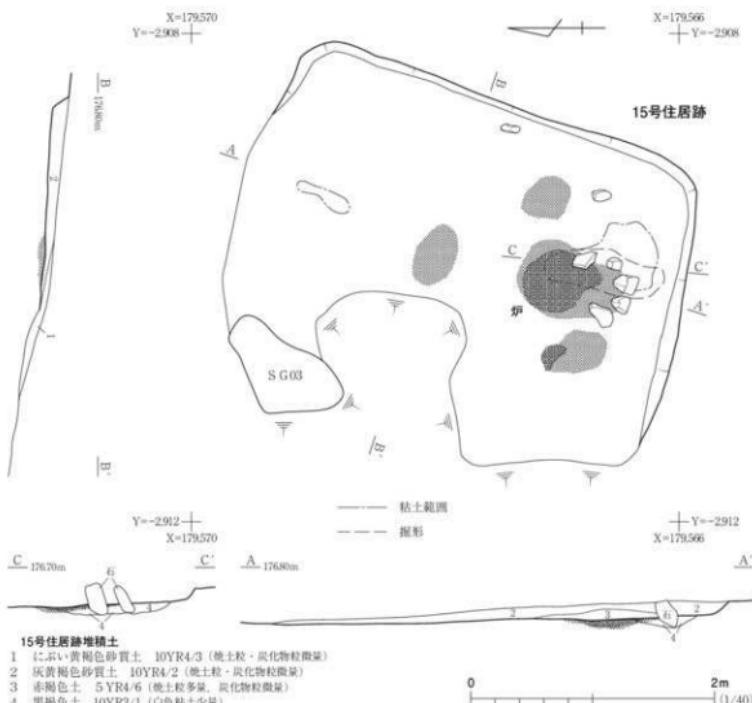


図14 15号住居跡（1）

新旧関係は古い方から S K 38 → S I 15 → S G 03である。なお、S I 15・S G 03は、位置関係から同一遺構の可能性がある。

遺構内堆積土は、 ℓ 1～3の3層に分けた。 ℓ 1・2は、黄褐色系の砂質シルトである。 ℓ 1の分布は、S I 15西側の窪地付近に限られる。同窪地は降水等による侵食痕と考えられるため、 ℓ 1はS I 15埋没後の2次堆積土と推測される。床面を覆う ℓ 2は、ほぼ単一の層であることから比較的短時間にS I 15内へ流入した可能性がある。 ℓ 3は炉上に堆積し、多量の焼土粒を含む。 ℓ 1～3の観察から人為的に埋め戻されたような痕跡は確認できず、S I 15は自然に埋没したものと考えられる。

S I 15の構成は、堅穴状の掘形と内部の焼土面に分けることができる。掘形の平面形は、西部が侵食等による擾乱を受けているが遺存部の形状から長方形であったと推測される。唯一、全体が遺存する東壁は立地斜面の等高線にはば平行しており、その方向はN 19° Eを指す。東壁長は340cm、南壁の遺存長は217cmである。東壁の両角は隅丸に近い。東・南壁は、約50°の角度で直

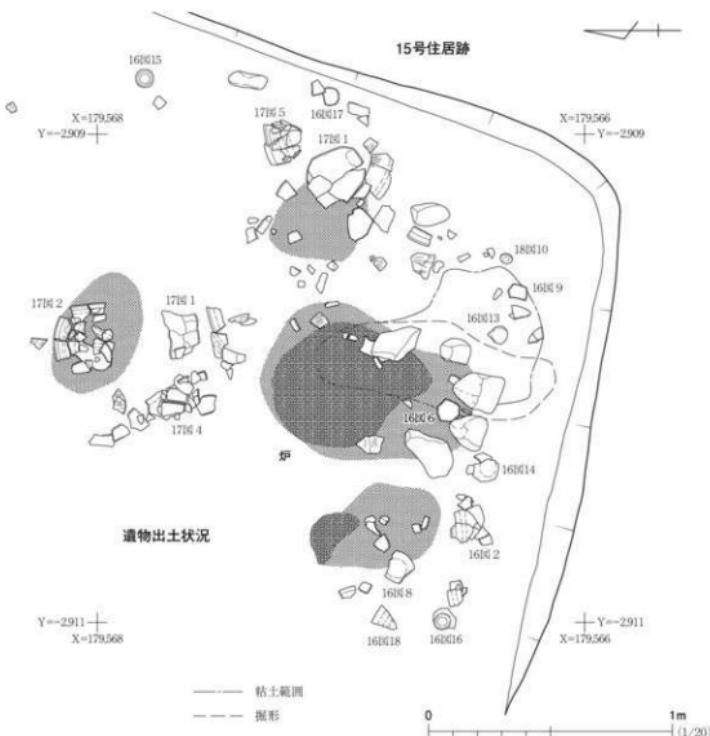


図15 15号住居跡（2）

線的に立ち上がる。検出面～床面の深さは、最深の南東角で13cmを測る。床面はわずかに傾斜しており、北・西方向に下がっている。床面は、踏み締まりによる硬化・汚れが認められた。床面の遺存規模は、南北幅368cm・東西幅284cmである。床面はLⅢ面を直接利用しており、貼床構造は確認できなかった。

S I 15の南部で大小4カ所の焼土面を検出したが、各平面形は肉眼で観察できた範囲を示している。ℓ 3下の炉とした最も大きい焼土面には、東～南縁を囲うように石が据えられている。炉東側の3個の石は、基部を浅い穴に埋めてℓ 4で固定している。しかし、南側の2個の石については、床面上に直接置かれている。各石の形状は長さ25cm前後・幅10～15cmの縦長で、いずれも表面が熱を強く受けている。各石の先端の標高差は3cm内におさまり、石の高さは概ね揃っている。炉焼土面の平面形は概ね梢円形で、その長軸は東壁の方向とほぼ平行している。炉焼土面の規模は南北85cm・東西62cmである。炉焼土面の焼け方は、北半部の方が著しい。炉の南東側で、床面上に薄

く付着する白色粘土の広がりを確認した。白色粘土の厚さは5~10mmである。粘土表面には熱を受けた痕跡はなく、また固く踏み締まる。炉の北側約2mの床面でも、薄い白色粘土の付着が認められた。S I 15の内外から柱穴と推測されるような小穴を確認することはできなかった。

遺物(図16~18、写真20・21)

S I 15内から土師器杯類420点・甕類671点、土製品3点と、焼けた粘土塊が少量出土した。また、S I 15の西側から土師器片が594点出土している。

図16-1~14は無台の土師器杯である。各杯の器面は全体的に劣化しており、黒色処理の消失や小さく爆ぜたような剥離痕などから、ほとんどの資料が2次的に熱を受けたものと思われる。杯の口径は14cm前後が主流であるが、同図7・11のように16cm以上の資料もある。各杯の底径/口径比は0.37~0.41、器高/口径比は0.30~0.35である。各杯の口唇部は、同図1のように短く外反するものが一般的である。

図16-1は、位置は示せなかったが同図4の北東側約40cmの地点で出土した資料で、全体の約85%が遺存する。底部下端のみに手持ちヘラケズリを施し、底部外面は無調整である。内面の劣化が著しいが、ヘラミガキは、口縁部付近では比較的丁寧に施されているのに対し、体部下半では粗めの調整となっている。1と同様の杯は、同図2・4が上げられる。2は底部外周にも手持ちヘラケズリが施されている。図16-8は体部下端~底部全面に手持ちヘラケズリを施し、回転糸切り痕がほとんど消失している。

図16-3は熱を強く受けたらしく、外面は橙色を呈し、内面は黒色処理が斑状になっている。体部~底部は無調整である。同図14も劣化が著しいが、外面は灰白色を呈する。内面の調整は不明で、黒色処理の有無は分からぬ。図16-19は無台杯の底部破片であるが、内面に油煙状の付着物が認められる。

図16-15~17は高台付杯である。16は強く熱を受けて、黒色処理がほとんど消失している。

図16-18の遺存度は15%程度と思われるが、その口径は約26cmと推測される鉢である。内面のヘラミガキは、杯と同様に口縁部付近が比較的丁寧に施されている。底部は手持ちヘラケズリによって回転糸切り痕がほとんど消失している。

図17、図18-1~6は土師器甕類である。図17-1の長胴甕は、口縁部側と底部側が約90cm離れて出土している。それぞれ外面の色が異なり、口縁部側が黄橙色、底部側がにぶい赤褐色を呈し、2次的に受けた熱量の違いに起因する可能性もある。外面の調整は、胴部上半がロクロナデで、下半にタタキメを残す。胴部中央には、焼成前の穿孔と考えられる直径約6mmの穴が1個貫通している。比較的小さい底部は、全面にケズリが施された平底である。図17-3、図18-1・2・5は、図17-1と同様の長胴甕と考えられ、5はケズリが施された平底である。図17-2は、同図1よりも頭部の窄まりが弱い長胴甕である。器面の劣化が著しいが、胴部下位までロクロナデが観察できる。

図17-4・5は小型甕である。5の内面には炭化物状の付着物が認められるため、同小型甕は

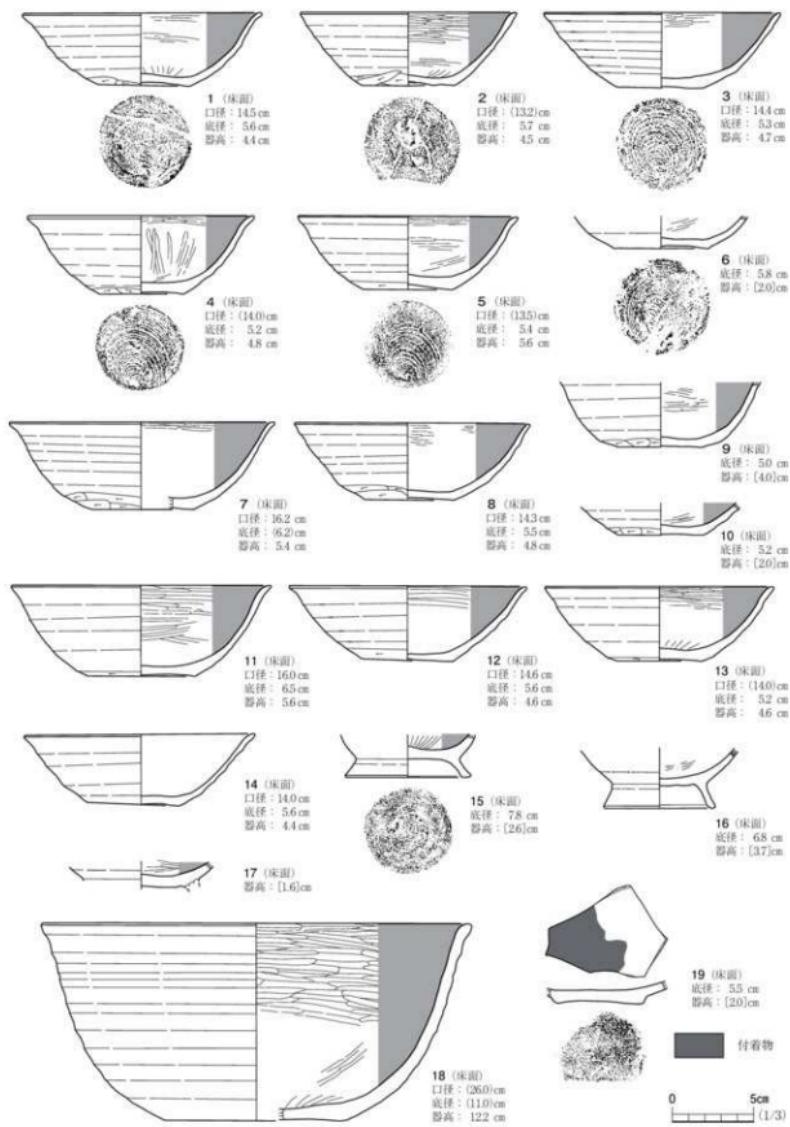


図16 15号住居跡出土遺物（1）

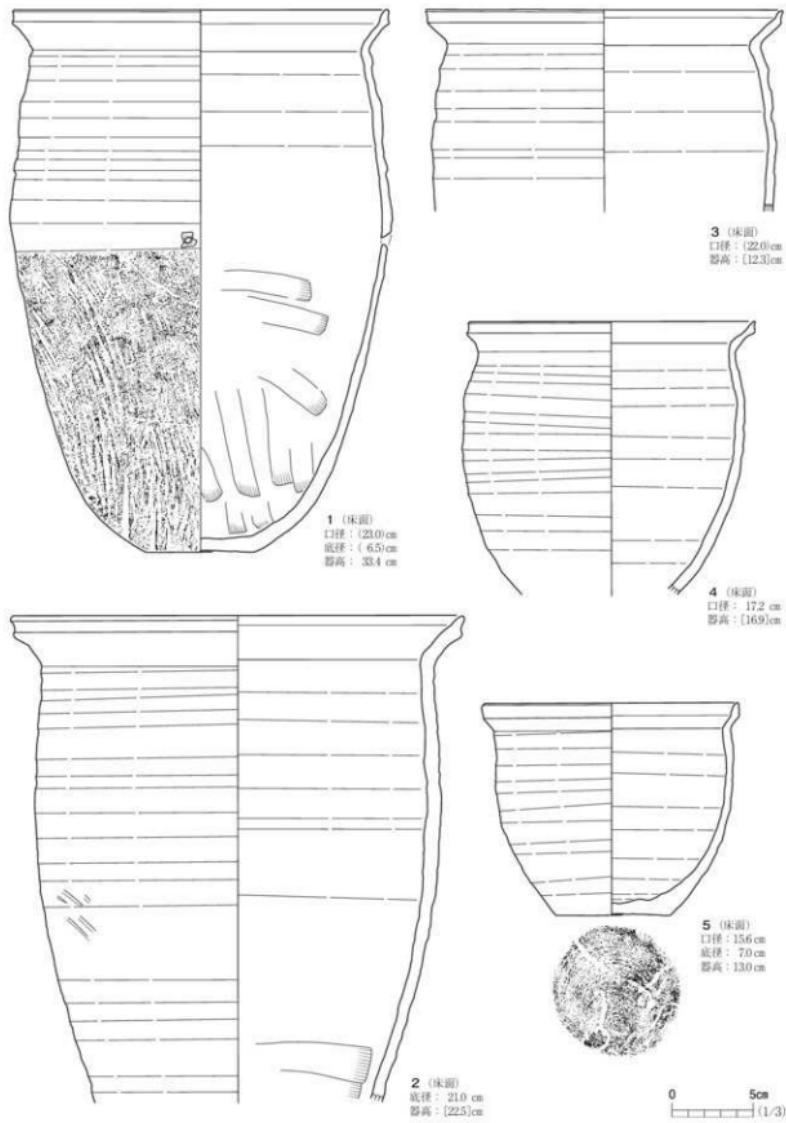


图17 15号住居跡出土遺物 (2)

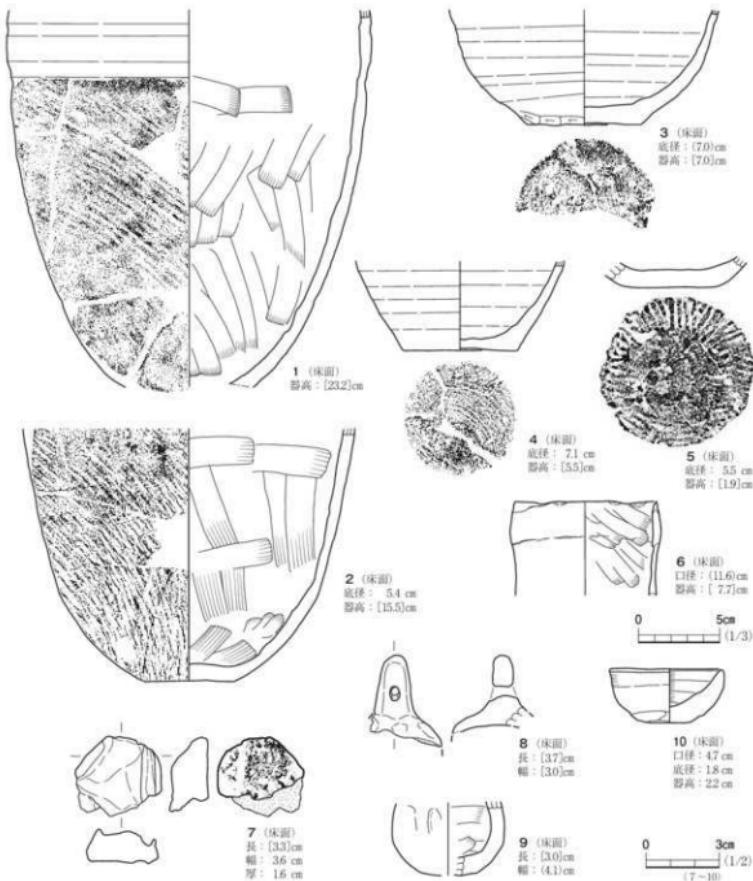


図18 15号住居跡出土遺物（3）

日常具として使用されていた可能性もある。図18-3・4も小型甌の腹部下半と考えられる資料で、底部外面に回転糸切り痕が認められる。同図6は筒型土器と呼ばれる資料で、内面は比較的丁寧なナデが施されているのに対し、外面には粘土積み上げ痕が認められる。同図8・9は土鉢の破片と推測される資料であるが、いずれも小片で劣化が著しい。同図10はミニチュア土器である。外面の体部下端～底部にはヘラケズリが施されている。内面は手回しによるナデが施されている。同図7は手捏ね風の焼けた粘土塊で、裏面が平坦になっている。表面の右側に植物質で付けたような溝があり、その直下の裏面にも浅い溝が入っている。

まとめ

S I 15の発見当初は、炉とした南部の焼土面を中心とする比較的小規模な土坑状の施設を想定していた。また、同様の遺構が複数重複しているものと思われた。しかし、S I 15の土層観察から、最終的には比較的大型の掘形をもつ遺構と判断した。南部の焼土面についてはカマドの可能性も考えられるため、本遺構を堅穴住居跡として取り扱っている。しかし、カマド構築土の未検出など、カマドの痕跡を示す傍証に乏しい。また、上屋の有無についても不明である。

S I 15の内外で土師器片が多量に出土しているが、器面の状態からそのほとんどが2次的に強い熱を受けた可能性がある。また、出土遺物の中には、土鉢・粘土塊がある。これらのことから、S I 15は、焼成施設・作業場が一体化した土師器生産関連遺構の可能性もある。炉の東～南部に据えられた石の用途は不明である。なお、S I 15の時期は、出土遺物の所属年代から9世紀末葉～10世紀前葉頃の平安時代と考えられる。

(香川)

第4節 土 坑

2次調査で検出した土坑は12基である。遺構番号は1次調査から継続してSK 36～47を付けた。特徴的な土坑には、平安時代の土師器生産に関連したと推測される遺構がある。また、縄文時代の落し穴と考えられる土坑も検出され、2次調査区南東部の小段丘面にまとまって分布している。

36号土坑 SK 36

遺構 (図19、写真13)

I 24グリッドに位置する遺構である。検出面はL III b上面である。SK 36の北側にS I 15が近接している。SK 36と重複する遺構はない。遺構内堆積土は2層に分けた。 ℓ 1は自然堆積土と考えられる灰黄褐色のシルトで、焼土粒・炭化物を含むが含有量は非常に少ない。 ℓ 2は底面上に堆積する炭化物層で、多量の土器片を含む。 ℓ 2の層厚は10cm前後とほぼ等幅である。

SK 36の平面形は、斜面上方側に開く隅丸の台形状である。東・西壁の中心を結ぶ長軸長は172cm、長軸の中心を直交する短軸長は164cmを測る。短軸方向はN 23° Eで、立地斜面の等高線とほぼ平行する。壁は内湾気味に立ち上がり、短軸方向の断面形は舟底状を呈する。検出面～床面までの深さは、東壁沿いで26cm、西壁沿いで12cmを測る。

底面は西方向に下がり、その傾斜角は約4°である。壁面・底面の一部が、受熱によって赤変しているのが観察された。肉眼観察であるが、壁・底面の赤変範囲は、北・西・南壁付近に限られる。赤変の程度は底面よりも壁面の方が強く、特に西壁の受熱が最も著しい。

SK 36の周囲から小穴を確認することはできなかった。

遺物 (図21-1～10、写真22)

SK 36内から土師器杯類520点・壺類353点、須恵器片10点が出土した。また、スサ入りの粘土

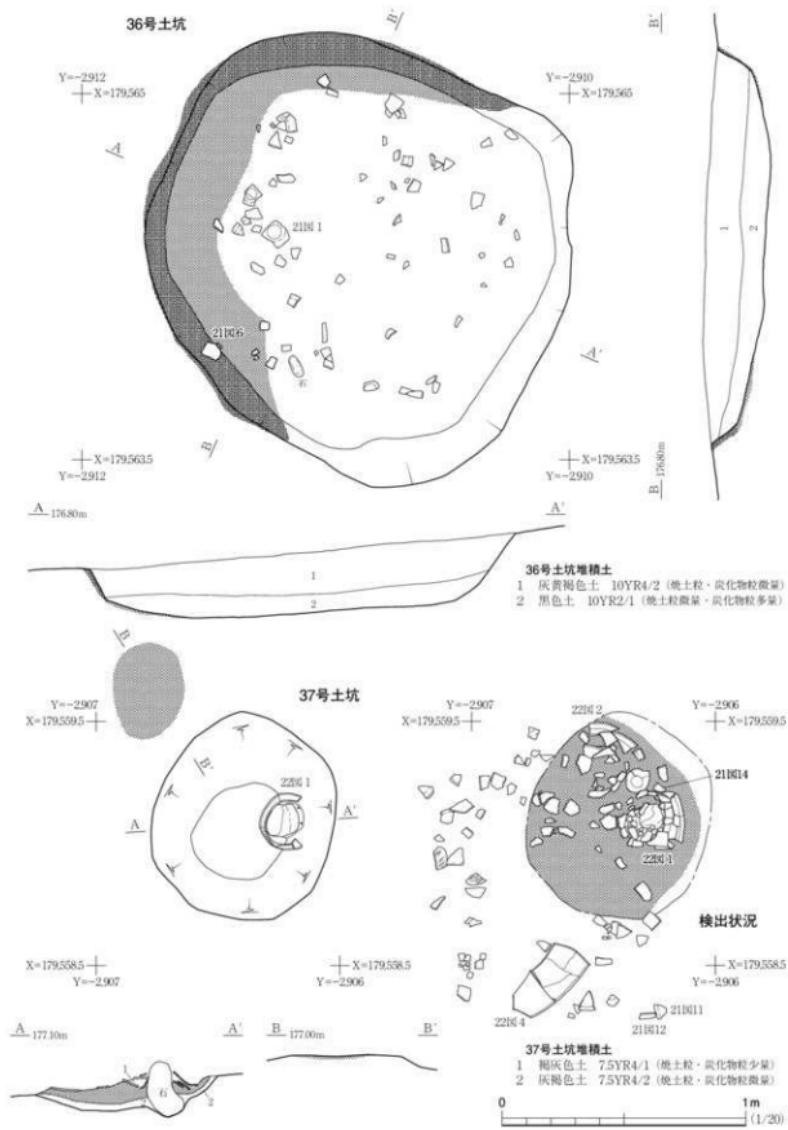


図19 36・37号土坑

小塊が計4点確認した。出土遺物は全体的に器面が劣化し、2次的に受熱した影響と思われる。

図21-1～6は土師器杯類である。1は口径が16cmを超える比較的大型の無台杯である。体部下端～底部前面に回転ヘラケズリを施している。体部は内溝気味に立ち上がり、口縁部で短く外反する。1の内面は黒色処理・ヘラミガキが施され、また外面の口縁部付近にもヘラミガキ痕が認められる。1の底径／口径比は0.36、器高／口径比は0.35である。2・3は黒色処理がほとんど消失している。2の底部外面には、ヘラミガキ状のナデ痕が認められる。5は比較的小型の無台杯で、体部の立ち上がりは比較的直線的である。6は高台付杯の資料である。

図21-7は長胴壺の上半部の破片で、頸部の窄まりが比較的緩い資料と思われる。同図9・10は長胴壺の胴部下位・底部の資料である。10の外面にタタキメが認められる。同図8はℓ1から出土した須恵器で、長頸瓶の胴部破片の可能性がある。

まとめ

S K 36は、壁・底面の一部が受熱によって赤変し、また底面上に約10cmの炭化物層ℓ2が形成されている。ℓ2内には多量の土師器の細・小片が混じるが、接合できたものはほとんどない。S K 36の平面形は、斜面上方側が開く台形状である。斜面上方側の底・壁面の焼け方は弱い。

S K 36の性格としては土師器焼成坑の可能性があるが、焼土面の形成が比較的脆弱であり別の可能性もある。S K 36の時期は、出土遺物から9世紀末葉～10世紀前葉と考えられる。（香川）

37号土坑 S K 37

遺構（図19、写真13）

J 25グリッドに位置する遺構である。検出面はL III b上面である。S K 37の北西側約7mの地点にS I 15・S K 36がある。S K 37と重複する遺構はない。遺構内堆積土は2層に分けた。ℓ1は焼土面上に堆積する褐色シルトで、自然堆積土と思われる。ℓ2は掘形を埋め戻した人為堆積土と考えられ、掘形内に立てた支脚状の石をℓ2で固定している。ℓ2は埋め戻し後に強く熱を受けており、その上面から約9cmの厚さまで橙色に変色していた。ℓ2上面で土器・土製品が出土しているが、ℓ2内から遺物は出土しなかった。

焼土面の範囲は、下部の掘形の平面形と概ね一致している。掘形の平面形は、南北に長い楕円形である。掘形の規模は、南北長83cm・東西長73cmである。検出面から掘形底面までの深さは、中央の最深部で13cmを測る。掘形の断面形は皿状を呈し、壁の立ち上がりは比較的緩やかである。掘形内に熱を受けたような痕跡は認められなかった。

支脚状の石の位置は掘形底面の北東隅であり、さらに浅く窪めた底に石の基部を据えている。石の計測値は長さ23cm・幅14cmである。石の表面は熱を強く受けたと思われ、劣化していた。土師器壺（図22-1）が、この石に口縁部から被せたような状態で出土している。

なお、S K 37の北西側で焼土面を確認した。同焼土面の規模は南北長39cm・東西長29cmである。同焼土面とS K 37の関係を確認することはできなかった。

遺物 (図21-11~14・図22-1~4, 写真22・23)

S K 37の焼土面・周辺部から、土師器杯類110点・甕類267点と土製品3点が出土した。図21-11・12は土師器の無台杯である。いずれも熱を強く受けて黒色処理が消失しており、また2の内面は爆ぜて所々が薄く剥落している。1の体部は曲線的で、口縁部が短く外反する。13は検出面で出土した小型甕で、口縁部は先端まで外方に開く。器形内面には、口縁部付近を中心にヘラミガキ・黒色処理が認められる。

図22-1は出土状況から、倒立状態で残された可能性がある。胴部中央はタタキメに縱位ヘラケズリを施すが、胴部下位にはタタキメが残る。比較的径の小さい底部は、タタキメを搔き消すようにナデ・ケズリが施され、平底にしている。図22-2は、口縁部を北側に向けて横位に押し潰れたような状態で出土した。器形・サイズは、近接して出土した同図1と類似している。図22-3は口縁部の約1/5が遺存する資料で、同図1の口縁部内側に沿うような状態で出土した。図22-4は、S K 37の東側で出土した鍋の破片資料である。4の底部にタタキメ・ヘラケズリが施されている。

図21-14は、図22-1の口縁部に密着するように出土した土鉢で、ほぼ完形である。器形はイチジク形を呈し、鉢には直径約3mmの穴が貫通している。底部には鉢口が切られ、その両端に円孔を入れている。内部には直径約1.6cmの土玉が1個入っている。他に土鉢の小片と思われる土製品が2点出土している。

まとめ

S K 37は、支脚状に固定された石から検出当初はカマドの可能性も想定した。しかし、カマド構築土の未検出など、カマドの痕跡を示す傍証に乏しい。また、S K 37の周辺は侵食等による擾乱を受けたと思われ、遺構の遺存状態が比較的悪い。

S K 37の性格としては、強く熱せられた焼土面や2次的に焼けた土師器の散布などから土師器生産に関連した遺構の可能性がある。S K 37の時期については、出土遺物から9世紀末葉～10世紀前葉と考えられる。

(香川)

38号土坑 S K 38

遺構 (図20, 写真13)

I・J 24グリッドに位置する遺構である。S I 15と重複しており、S K 38の方が古い。S I 15北半部の床面を約10cm掘り下げたところでS K 38を検出した。遺構内堆積土はℓ 1の単一層とした。ℓ 1内には1~5cmの焼土塊が少量含まれる。土色は、焼土色に近い灰褐色シルトである。ℓ 1の観察から、人為的に埋め戻されたような痕跡は確認できなかった。おそらくS K 38は、自然に埋没した可能性が高いと考えられる。

S K 38の北・西部は侵食等によって破壊された可能性があり、遺存状態が比較的悪い。S K 38の平面形は不明であるが、南東部の壁がほぼ直角に曲がっていることから方形・長方形などの可能

性がある。SK 38の規模は、東西の遺存長122cm・南北の遺存長108cmである。東壁の方向はN 8°Eを指し、重複するSI 15の東壁よりも北に約11°偏している。

壁の立ち上がりは、東壁約40°・南壁約55°である。検出面～底面までの深さは、最深の中央部で8cmを測る。底面は地山を直接利用している。床面は西方向に下るが、その傾斜は約2°と非常に緩やかである。床面の南北断面は、中央部がわずかに窪む。床面の遺存部全体が熱を受けて赤変しており、特に南東部が著しく焼けている。床面の南西部で幅15cm前後の平石を検出した。平石は熱を受けていたが、その用途は不明である。

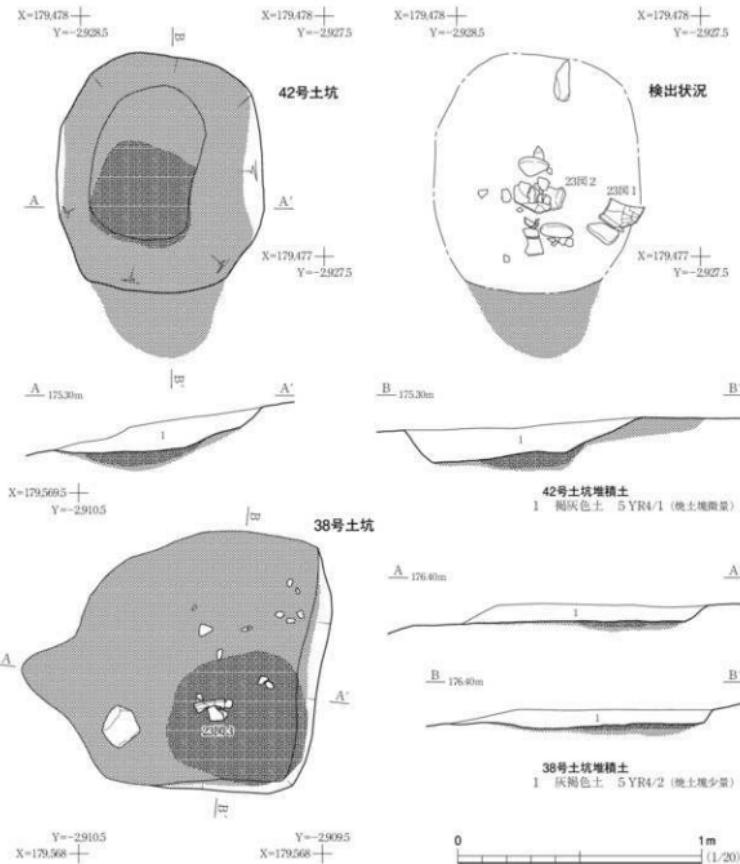


図20 38・42号土坑

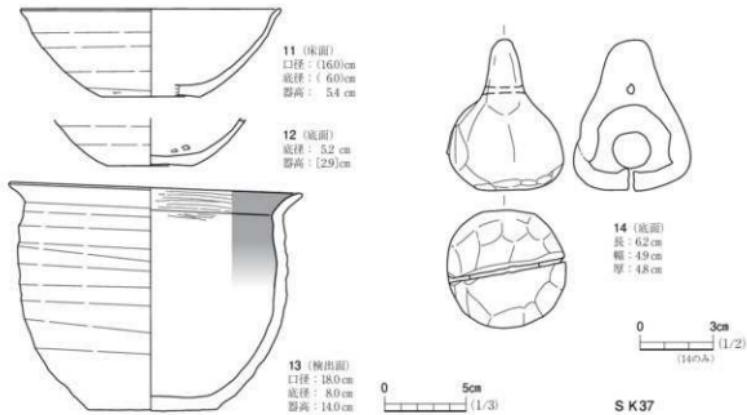
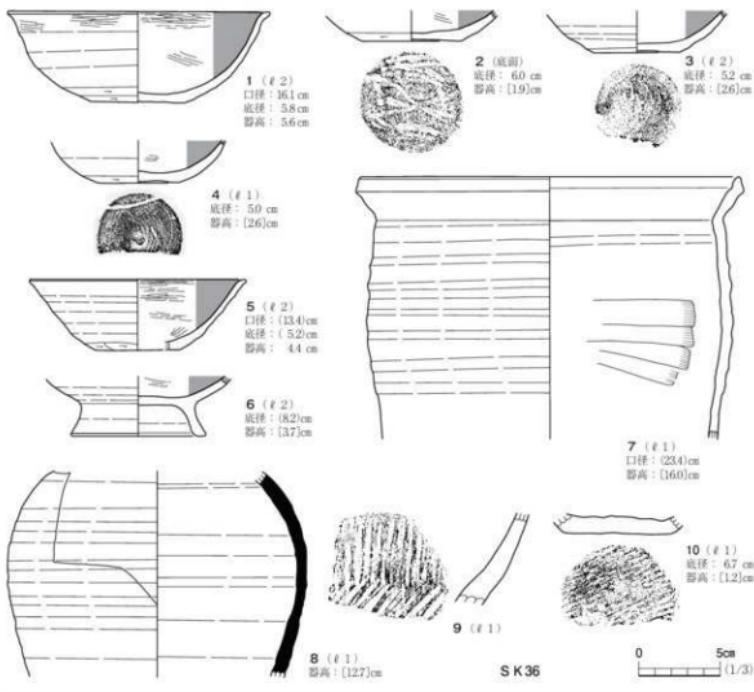


図21 36・37号土坑出土遺物

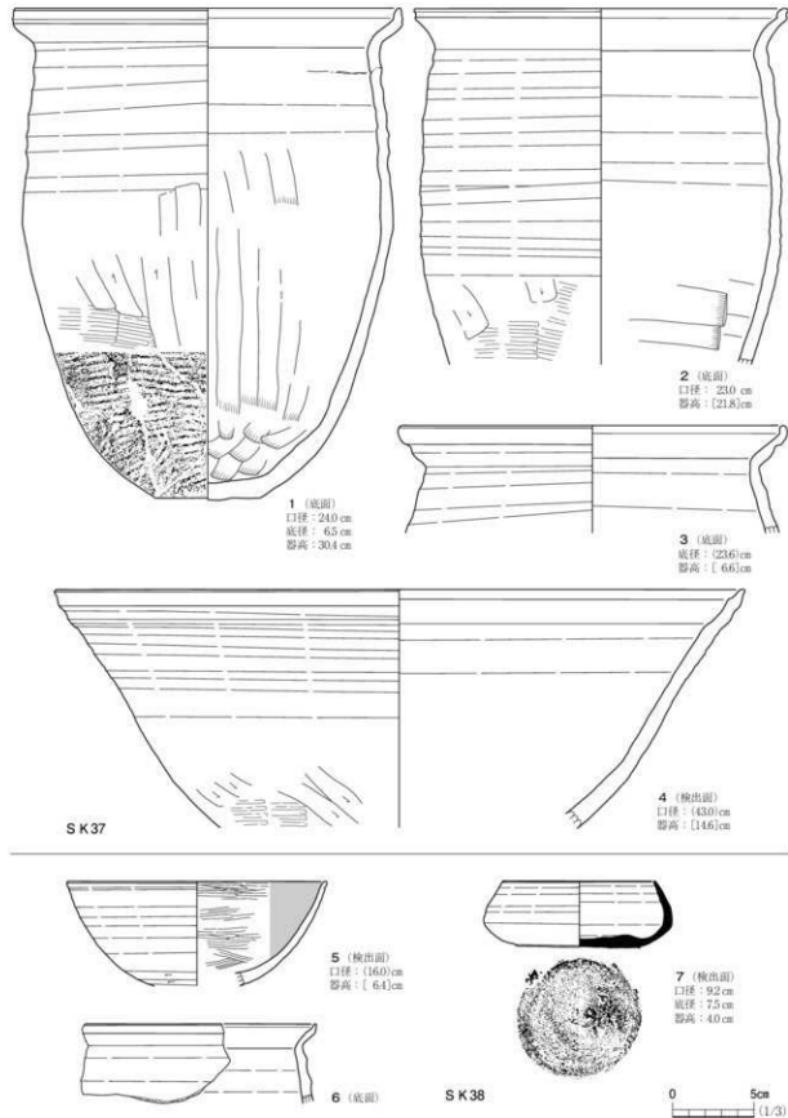


図22 37・38号土坑出土遺物

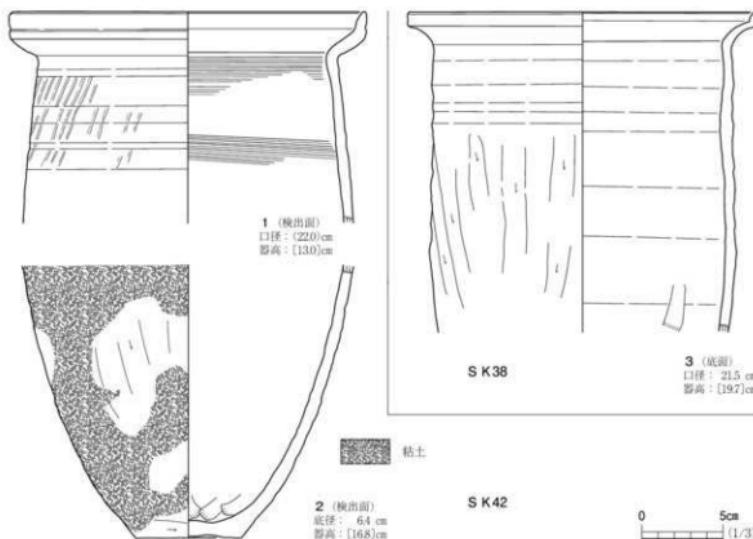


図23 38・42号土坑出土遺物

遺 物 (図22-5~7・図23-3, 写真23)

S K 38および周辺部から、土師器杯類6点、壺類76点、須恵器1点が出土した。図22-5・7は、S K 38の北側約90cmの土坑検出面で出土した土器である。5は体部～口縁部が弧状に開く器形で、内面に施されたヘラミガキは比較的丁寧である。7は、約85%が遺存する須恵器の焼台である。器面の色調は灰白色を呈し、焼成はやや軟質である。底部外面には回転ヘラ切り痕が認められ、軽いナデが施されている。

図22-6・図23-3は底面出土の土師器壺である。図22-6は比較的薄手の口縁部破片で、口径が16cm前後の小型壺と思われる。図23-3の長胴壺も比較的薄手の土師器で、胴部上位から縱方向のケズリが施されている。

ま と め

S K 38は、底面が焼けた土坑である。S K 38は、遺存状態が悪くその全容は不明であるが、土師器生産に関連した造構の可能性がある。S K 38の時期は、出土土器やS I 15との重複関係から9世紀後半と考えられる。

(香川)

39号土坑 S K 39

遺 構 (図24, 写真14)

K 24グリッドに位置する遺構である。検出面はL III b上面である。丘陵斜面から小段丘面とな

る変換点に作られている。S K 42の南側1mの地点にS G 02が近接している。S K 39と重複する遺構はない。

遺構内堆積土は2層に分けた。 ℓ 1は自然堆積土と推測される黒褐色土で、混入物はほとんど認められなかった。 ℓ 2は軟質の炭化物層で、焼土粒を少量含む。S K 39の平面形は、東西に長い楕円形である。平面形の規模は、長軸長118cm・短軸長86cmである。検出面～底面までの深さは、中央部で13cmを測る。壁の立ち上がりは直線的である。底面は舟底状に丸みがある。S K 39の北西部壁は、熱を受けて赤色に硬化している。S K 39から遺物は出土していないが、形態および周辺遺構の時期から平安時代の土坑と考えられる。

(香川)

40号土坑 S K 40

遺構 (図24、写真14)

調査南端に近いK 35グリッドに位置する。阿賀川へと下る西向き斜面の中段に形成された。狭い平坦地に立地する。遺構検出面はL III A中位である。重複する遺構はなく、南側にS G 06が隣接し、南西に2～3mほど離れてS G 04・05がある。堆積土は自然流入土と判断され、炭化物を多く含み、焼土粒もわずかにみられた。

平面形は整った楕円形で、上端における長軸長が117cm、短軸長が92cmである。周壁の立ち上がりは、北端ではほぼ垂直、南端では比較的緩やかである。検出面からの深さは10cm程度と浅い。堆積土中からは土器器の焼片5点が出土している。その性格は不明だが、S G 04～06が近接することから、近い時期に機能した可能性がある。その時期は、出土遺物や周辺から出土している遺物の年代観から、9世紀代と考えられる。

(今野)

41号土坑 S K 41

遺構 (図24、写真14)

調査区南端に近いJ・K 35グリッドに位置する。L IV b上面で、暗褐色土の広がりとして検出された。周辺の地形は、平坦地から西向きの斜面へと変化する肩部にあたる。重複する遺構はなく、東側にS K 40、S G 04～06が近在する。また、北北東に約8.5m離れた位置にS K 44がある。

堆積土は10層に分けた。 ℓ 1・2には、沼沢バミスとみられる軽石が少量含まれている。 ℓ 3・4は、植物根により搅乱されている可能性がある。 ℓ 7・9は、縮まりのある暗褐色の粘質土である。周壁際の ℓ 5・6・8や、底面に堆積した ℓ 10には、比較的多くの黄褐色土塊が混入する。堆積土の状況から、S K 41は土の自然流入と周壁の崩落を繰り返して埋没したものと考えられる。なお、遺物は出土していない。

平面形は上端と中端では楕円形、底面では隅丸の長方形である。長軸の方位は真北より約70°西に振れている。上端の長軸長は130cm、短軸長は79cm、中端では106cm×54cm、下端は135cm×41cmである。周壁は短軸方向では垂直に立ち上がり、上半で開く。長軸側では下半分がオーバー

ハンギし、特に東端では大きく抉れている。底面は概ね平坦で、検出面から最深部までの深さは78cmである。

その規模と形状および検出面から、縄文時代の落し穴と考えられる。その時期は、L IV bが掘り込まれていること、沼沢バミスが降下した時期には半ば埋まっていたと推察されることから、早期後葉以降～前期末葉以前と考えられる。

(今野)

42号土坑 SK 42

遺構 (図20、写真14)

H33グリッドに位置する遺構である。検出面はL III上面である。傾斜が比較的緩やかになる斜面端部に構築されている。SK 42に近接・重複する遺構はない。検出状況は、まずℓ 1上面に散布する土師器と長さ15cm前後の石を計4個確認した。ℓ 1内には遺物が1点も含まれていなかつたことから、ℓ 1上面の土師器・石は原位置を保っている可能性がある。

ℓ 1は、1～3cmの焼土塊を僅かに含む。土色は赤味を帯びた褐灰色で、ℓ 1上面で火が焚かれた可能性もある。堆積土の観察から、ℓ 1の形成が人為・自然の判断はできなかった。土師器出土面の下部から、橢円形の掘形を検出した。掘形の規模は、長軸長98cm・短軸長85cmである。長軸の方向は概ね南～北を指し、立地する等高線の向きと一致している。掘形壁の断面形は、皿状を呈する。検出面～底面までの深さは、中央の最深部で13cmを測る。

掘形内のほぼ全面が熱を受けて赤変している。特に掘形底面の南部が著しく焼けており、厚く硬化していた。掘形の南側も舌状に赤変しているのが確認されたが、断面観察からℓ 1の堆積以前に熱を受けたものと考えられる。

遺物 (図23-1・2)

SK 42のℓ 1上面で、土師器杯類の破片1点・甕類の破片78点が出土した。また、SK 42西側の斜面から土師器片が183点出土している。SK 42の出土土師器は大半が小片で、図化できたのは、検出面で確認した図23-1・2の2点である。1の長胴甕は頭部からタタキメが認められ、さらにロクロナデが加わる。内面はカキメ状のナデが施されている。口縁部はやや肥厚気味で、上外方に立ち上がる。2は、1と同一個体の可能性がある。2の胴部には化粧粘土が付着しており、剥離面からケズリ調整が認められる。また、平底の底部にもケズリが施されている。

まとめ

SK 42は、2次調査区の南東部で単独に立地する遺構である。SK 42の検出面で出土した遺物は原位置を保っている可能性があり、土師器生産に関連した遺構の可能性がある。SK 42の西側で出土した土師器は、排出、または流出した遺物の可能性がある。出土遺物の下部から熱を受けた掘形が確認され、SK 42の操業に時間差があった可能性が考えられる。しかし、掘形内から遺物が出土しておらず、ℓ 1の堆積状況も判然としないため、SK 42の時間差等については不明である。SK 42の時期については、出土遺物から9世紀後半代と考えられる。

(香川)

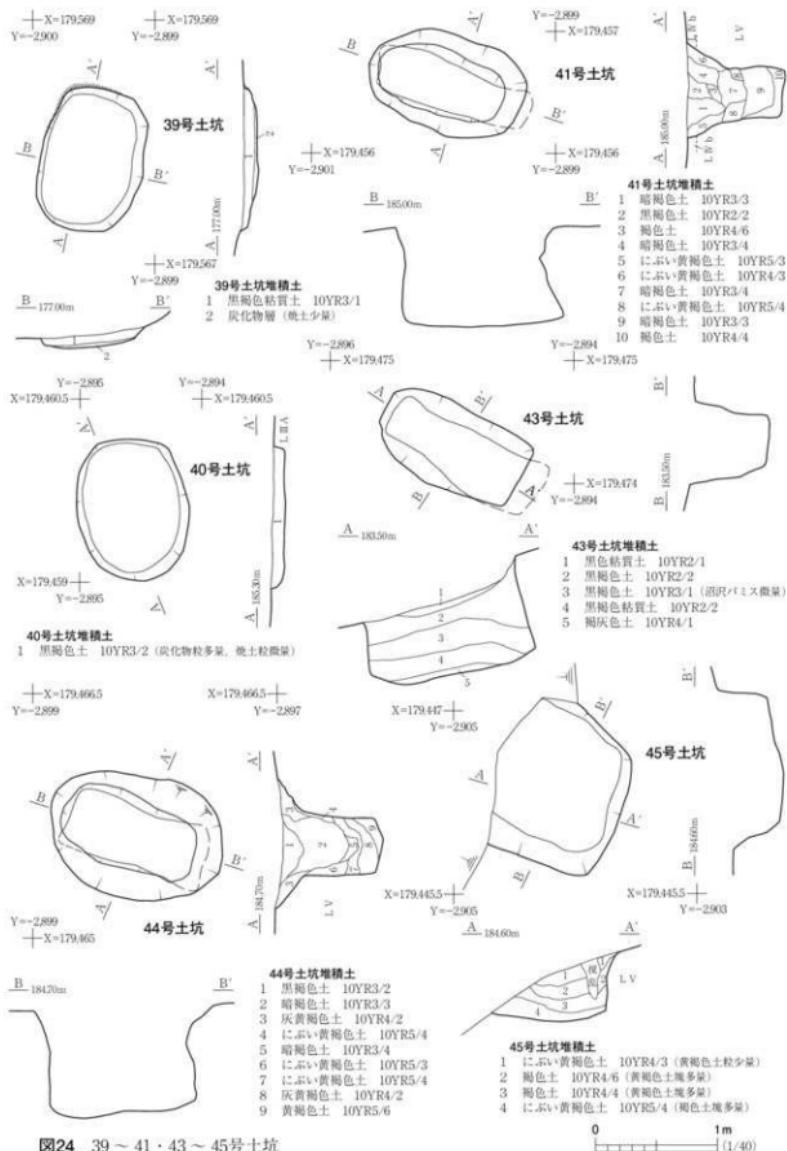


図24 39～41・43～45号土坑

43号土坑 S K 43

遺 構 (図24、写真15)

K 33グリッドに位置する遺構である。検出面はLV上面である。検出面の標高は183.6mである。SK 43の北東側約8mの地点にSK 47、南西側約9mの地点にSK 44があり、3基の土坑が概ね一直線に並んでいる。SK 43と重複する遺構はない。遺構内堆積土は5層に分けた。 ℓ 1は凹レンズ状、 ℓ 2~5は凸レンズ状に堆積している。 ℓ 1~5は自然堆積土と推測される。SK 43の平面形は長方形で、その長軸方向は立地斜面の等高線とほぼ直行している。平面形の上端規模は、長軸長124cm・短軸長69cmである。検出面～底面の深さは、最深の東端部で86cmを測る。

東壁は、約100°の角度で掘り込まれてハンギングしている。西壁の立ち上がりは垂直に近い。底面の規模は、長軸長137cm・短軸長48cmである。底面は約9°の傾斜で、西方向に下がっている。底面はほぼ平坦に作られている。底面からピットを確認することはできなかった。SK 43は、出土遺物が認められなかつたが、その形態から縄文時代の落し穴と考えられる。

(香川)

44号土坑 S K 44

遺 構 (図24、写真15)

K 34グリッドに位置し、検出面はLV上面である。調査区南端の狭い平坦地に立地し、周囲は緩やかに西へ下っている。重複する遺構はなく、南南西方向に約8.5m離れてSK 41が、北北東に約9m離れてSK 43が位置し、3基の土坑は直線的並んでいる。堆積土は9層に分けた。その多くは流入土と周壁からの崩落土の混土とみられ、堆積土の下層ほど崩落土の割合が高くなっている。また、 ℓ 1・2には沼沢バミスが少量ながら含まれていた。なお、遺物は出土していない。

平面形は上端では楕円形、中端と底面では隅丸長方形である。長軸の方位は真北より約70°西に振れている。上端の長軸長は148cm、短軸長は102cm、中端では114cm×57cm、下端は117cm×45cmである。周壁は、短軸方向と長軸方向の西壁では垂直に立ち上がり、上端近くで大きく開いている。東壁は、下半が若干オーバーハンギングしている。底面は鍋底状で、東から西へわずかに下がっている。検出面から最深部までの深さは86cmである。

本土坑は規模と形状から縄文時代の落し穴と考えられ、沼沢バミスが ℓ 1・2に見られたことから前期末以前の所産であろう。直線的に並ぶSK 41・43・47と共に機能した可能性が高い。(今野)

45号土坑 S K 45

遺 構 (図24、写真15)

調査区南端に近いJ 36グリッドに位置し、狭い平坦地から西へ下る肩部に立地する。LV上面で検出され、重複する遺構はない。東方約5mにSM01とSX 03がある。堆積土には周壁からの崩落土とみられる黄褐色土が含まれ、いずれも自然堆積土と判断された。

西壁は遺存せず、平面形は方形と推定される。上端における南北長が136cm、東西方向の遺存値が113cmである。周壁の立ち上がりは急角度である。検出面からの深さは56cm、底面に目立った凹凸はなく、鍋底状である。遺物は出土していない。本遺構の性格は明らかにできなかった。堆積土がにぶい黄褐色土や褐色土であることから、その時期は縄文時代の可能性がある。

(今野)

46号土坑 SK 46

遺構(図25、写真15)

調査区の中央寄りK 30グリッドに位置し、西へ下る傾斜地に立地する。LV上面で検出され、重複する遺構はない。周辺に遺構もなく、南南東方向に約15m離れて1次調査で確認されたSK 08がある。堆積土は主に斜面上位からの流入土とみられ、周壁から崩落した黄褐色土塊が混じる。

平面形は不整椭円形で、上端における長軸長が127cm、短軸長が100cmである。周壁は急角度で立ち上がるが、南壁では比較的緩やかである。周壁は斜面上位側の残りが良く、その高さは8～32cmである。底面は、全体としては斜面に沿うように西側が低くなっている、細かい凹凸がある。

本遺構の性格および年代は明らかにできなかった。

(今野)

47号土坑 SK 47

遺構(図25、写真16)

調査区南寄りのK 32グリッドに位置し、阿賀川へと下る西向きの斜面に立地する。LV上面で、



図25 46・47号土坑

黒褐色土の広がりとして検出された。重複する遺構ではなく、南南西に約8m離れてSK43が、北北東約10mには1次調査で確認されたSK08がある。

堆積土は7層に大別した。 ℓ 1・3はLIVaに類似した黒褐色土である。 ℓ 2・4は東壁際にみられた堆積土で、周壁からの崩落土を含んでいる。 ℓ 5～7も、土の流入と周壁の崩落を繰り返して堆積したものとみられる。なお、遺物は出土していない。

平面形は隅丸長方形である。長軸方位は真北より約80°西に振れている。上端の規模は136cm×69cm、中端では126cm×50cm、下端は121cm×57cmである。周壁は、下半分が若干オーバーハングしている。底面は斜面に沿ってごく緩やかに傾斜し、検出面から最深部までの深さは89cmである。

本土坑はその規模と形状から、绳文時代の落し穴と考えられる。堆積土上位にLIVaとみられる黒褐色土が堆積していたことから、前期末以前には埋没していたと推察される。直線的に並ぶSK08・41・43・44と一体で機能した可能性がある。

(今野)

第5節 焼土遺構

2次調査で確認した焼土遺構は計6基である。遺構番号は、1次調査から継続してSG02～07を付けた。掲載した焼土遺構の中には、掘形などの構造を失った遺構も含まれている可能性があるが、検出段階で焼土面のみの確認にとどまったものはすべて本遺構に一括した。

2号焼土遺構 SG02 (図26・28、写真16)

J24グリッドに位置する遺構である。検出面はLIIIb上面である。SG02の東側にSK39が近接している。SG02と重複する遺構はない。SG02は、侵食等による擾乱を受けたらしく遺存状態が非常に悪い。焼土面の遺存形は、東西に長い楕円状である。焼土面の遺存規模は長軸長100cm・短軸長35cmで、検出面から最深6cmまで赤変しているのが観察された。

SG02の西側に近接した地点で、土師器杯片3点・甕片19点が出土した。細片が多く、図化できたのは図28-1の1点である。1は小型甕の底部と思われる資料である。底部下端に回転ヘラケズリ、底部外面に手持ヘラケズリが施されている。

SG02の性格については、遺存状態が悪いため不明であるが、土師器生産に関連した遺構の可能性もある。SG02の時期は、出土遺物から9世紀後半以降と考えられる。

(香川)

3号焼土遺構 SG03 (図26、写真16)

I24グリッドに位置する遺構である。検出面は、表土直下のLIIIb上面である。SG03の北西側がやや角張るため、検出当初は掘形の壁が失われた焼土面の可能性を想定した。SI15と重複するが、焼土面の位置・標高からSG03・SI15は同一遺構の可能性がある。SG03の南部は降雨等による擾乱を受けたと思われ、窪地が生じている。

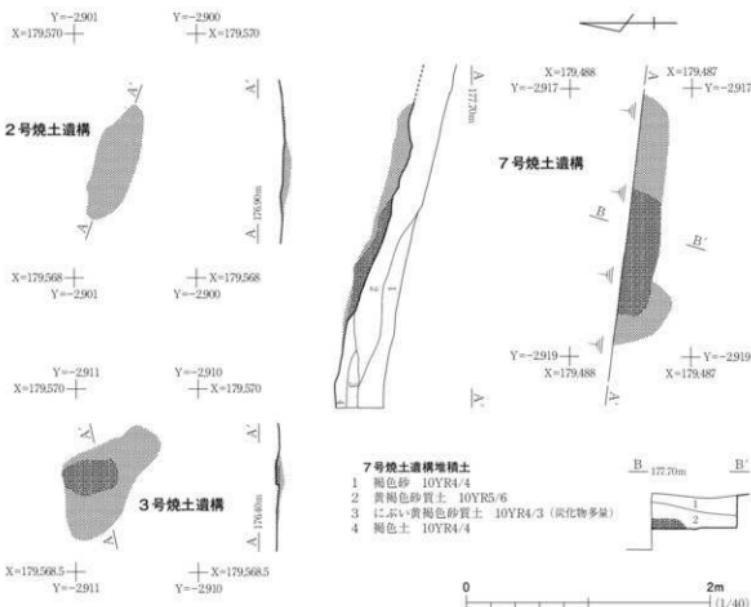


図26 2・3・7号焼土遺構

焼上面は、熱を最も強く受けた箇所が固く盛り上るよう遺存している。焼上面の遺存規模は東西長82cm・南北長95cmで、検出面から最深6cmまで赤変しているのが観察された。

S G 03の南部で土師器杯片1点・甕片7点が出土した。いずれも細片で図化できなかったが、杯は内面黒色処理、甕は底部付近に顯著なタタキメが観察される。

S G 03の性格については遺存状態が悪く不明であるが、S I 15と同様の土師器生産に関連した遺構の可能性がある。S G 03の時期は平安時代と推測される。
(香川)

4号焼土遺構 S G 04(図27・28、写真16・23)

調査区南端に近いK 35グリッドに位置する。阿賀川に下る西向き斜面の中段に形成された、幅の狭い平坦面に立地している。南北82cm、東西83cmの不整円形に、L III A上面が赤褐色に熱変化しているのが確認された。本遺構を断ち割ったところ、もっとも厚い箇所で7cmほど熱変化していた。重複する遺構はなく、北方約1mにS G 05が隣接し、北東方向へ2~3mほど離れた位置に、S G 06・S K 40がある。

S G 04と隣接するS G 05との間には遺物が散乱していた。どちらの遺構に伴うものか判断できないもの、また両遺構間で接合した土器も多いことから、S G 04・05の出土遺物について、一

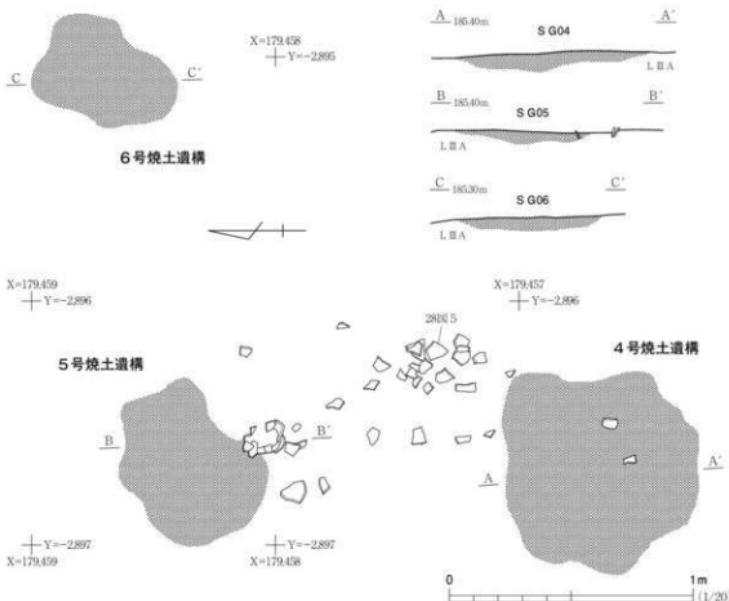


図27 4～6号焼土遺構

括して記載する。出土遺物は土師器杯片3点、土師器甕片47点、土管状土製品1点、須恵器杯片1点などがある。図28-2～4は土師器の甕である。2は口唇部が立ち上がり、縁帶を有している。胴部外面と口縁部内面に横ナデが施されている。3は、2に比べ口唇部のつまみ出しがごく弱い。胴部の内外面に横ナデが加えられている。4は胴部の破片である。下半には縦方向のヘラケズリがあり、内面にはハケメが施されている。5は土管状土製品である。器壁が12mm前後と厚く、外面には縦方向のハケメが施されている。また外面の一部に薄く粘土が付着している。2～5とも2次的に熱を受けた可能性があり、器面の一部が橙色に変色している。特に3は、被熱により器面が荒れた破片と、荒れていない破片とが接合している。SG 04の性格については不明である。出土遺物の特徴から、9世紀代の遺構であろう。

(今野)

5号焼土遺構 SG 05(図27、写真16)

調査区南端に近いK35グリッドに位置する。阿賀川に下る西向き斜面の中段に形成された、幅の狭い平坦面に立地している。南北60cm、東西69cmの不整形に、L III A上面が赤褐色に熱変化しているのが確認された。本遺構を断ち切ったところ、もっとも厚い箇所で6cmほど熱変化が及んでいた。南に約1mの距離にSG 04が隣接し、東に約1m離れてSG 06とSK 40がある。

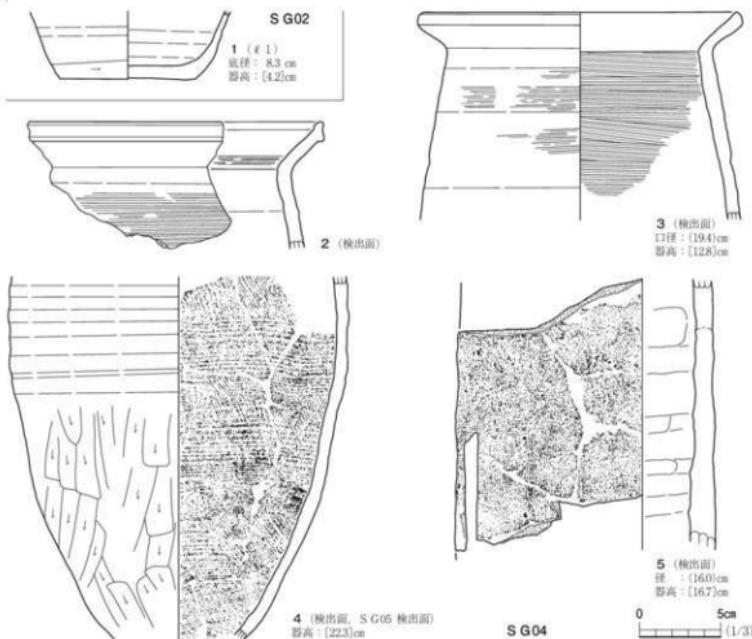


図28 2・4号焼土遺構出土遺物

遺物に関する記載については、SG04出土遺物と接合したものが多いため、SG04の項に一括した。SG05の性格については明らかにできなかった。出土遺物の特徴から、9世紀代の遺構と考えられる。隣接するSG04と一緒に機能した可能性がある。

(今野)

6号焼土遺構 SG06(図27、写真16)

調査区南端に近いK35グリッドに位置する。遺構周辺の地形はほぼ平坦で、緩やかに西に下っている。南北59cm、東西46cmの不整形に、LIII A上面が赤褐色に熱変化しているのが確認された。本遺構を断ち割ったところ、もっとも深いところで6cmまで、熱変化範囲が及んでいた。北側にSK40が隣接し、南西方向に1~2mの距離をおいてSG04・05がある。本遺構の検出面や周辺からは、土師器5点が出土しているが、細片のため図示していない。

本遺構は、近在にあるSG04・05と検出面が同じで規模も近いことから、SG04・05と一緒に機能していた可能性がある。しかし、その性格については明らかにできなかった。その時期は、9世紀代と考えられる。

(今野)

7号焼土遺構 SG 07(図26, 写真17)

I 32グリッドに位置する遺構である。検出面は、LV上面である。比較的急な斜面に立地し、SG 07の周囲には他遺構が認められない。SG 07は土層確認のためのトレンチで発見した遺構で、同トレンチによって大きく破壊してしまった。

遺構内堆積土は4層に分けた。 ℓ 1・2は砂・砂質土で、斜面上方からの流入土と推測される。 ℓ 3内には多量の消し炭状の炭化物が含まれる。 ℓ 4は、一部が焼土面上に堆積し、炭化物等はほとんど含まれない。 ℓ 1～4は自然堆積土と考えられる。壁は確認できなかった。焼土面は、約18°の角度で東方向に傾斜している。焼土面の遺存規模は、東西長206cm・南北長43cmで、底面の受熱は最大13cmの深さまで赤変していた。

SG 07は遺存状態から侵食等によって上部構造が破壊されたものと思われ、その性格は不明である。また、SG 07の内外から遺物が出土していないため、時期も不明である。なお、地元の人々の話で、昭和時代に木炭を焼成していたという地点と概ね一致することから、SG 07は現代の木炭窯跡の可能性もある。

(香川)

第6節 その他の遺構

本節では、縄文時代の土器埋設遺構(SM 01)・石器集中地点(SX 03)について掲載した。両遺構は、いずれも2次調査区南端部の標高185m付近に広がる小段丘状の平坦面に立地する。同平坦面は、縄文時代の遺構・遺物が比較的集中する一帯である。

1号土器埋設遺構 SM 01

遺構(図29, 写真17)

調査区南端のK 36グリッドに位置する。阿賀川へと下る西向き斜面の中段に形成された幅の狭い平坦地に立地し、遺構の南側は谷になっている。L III B上面で、埋設土器の縁辺を確認した。重複する遺構はなく、同じ平坦地にはSK 40・41・44・45、SG 04～06、SX 03などの遺構が集中している。掘形の平面形は不整精円形で、長軸長は56cm、短軸長は35cmである。周壁の立ち上がりは、北東側を除きほぼ垂直である。底面は鍋底状で、掘形の深さは14cmと浅い。北東側に据えられた土器が乱れていたため、この部分は木根などにより攪乱されたものとみられる。本来、掘形の平面形は円形であったと推察される。土器内の堆積土と掘形の埋土との区別は判然とせず、ともに締まりのない黒褐色土でL III Aに類似している。堆積土中に、炭化物・焼土粒は含まれなかった。また堆積土を水洗いしたが、土器片以外の遺物は出土しなかった。

掘形には4個体の縄文土器片が据えられていた。全て深鉢形土器の口縁部から胴部にかけた破片で、底部片は出土していない。周壁際には主に口縁部の破片が、2～3重に重ねて立てられていた。

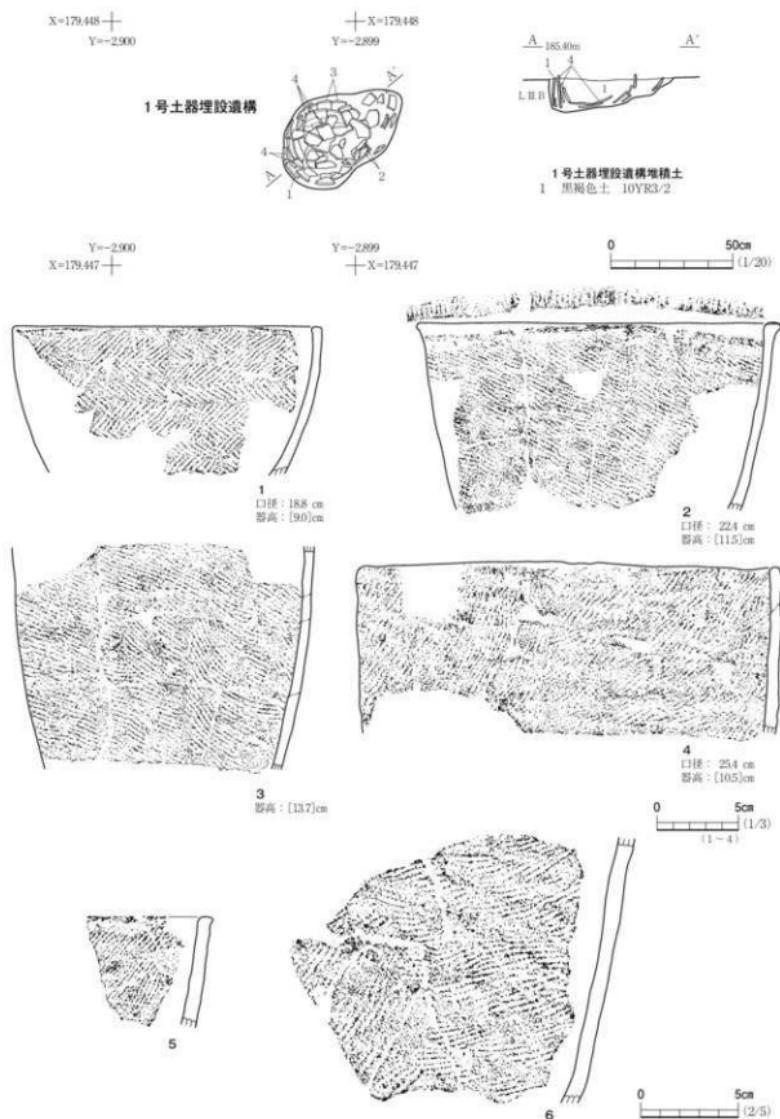


図29 1号土器埋設遺構・出土遺物

破片は正位に、内面を内側に向けて据えられていた。底面には主に胴部の破片が、内面を上に向けて敷かれていた。周壁に立てられていた口縁部の破片には、橙色に変色あるいは周辺に比べ炭化物の付着が著しく少ないなど、2次的に熱を受けたものが多くみられる。被熱箇所は主に内面に認められ、割れ口に及んでいるものもある。図29-2~4では、その上端内面が2~5cm程度の幅で帯状に2次被熱している。また1・2では、焼け方の異なる破片が接合している。一方、底面から出土した破片では、口縁部細片1点の内面に2次被熱が確認された以外、被熱の顯著な痕跡は認められなかつた。このような状況から、掘形に土器片が据えられた後、中で火が焚かれた可能性が高い。ただし底面が焼けておらず、側面も全面が被熱した状況は認められない。のことから、長時間に渡って火を焚いたとは考えにくい。また周壁際に立てられた土器の上端内面が被熱していることから、土器の上端を少し残して埋め戻した後、火を焚いた可能性がある。

遺 物 (図29、写真23)

4個体の深鉢形土器のうち、主な破片を図示した。図29-1は掘形の南西側に立てられていた。一部の破片は底面からも出土している。口縁部の大部分が出土している一方、胴部下半とみられる破片は出土していない。口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁部上端は若干内側に肥厚し、口端部は平らに整形されている。節の細かい異原体により羽状繩文を施し、菱形に表された部分も認められる。内面には横方向のミガキが施されている。

2・3は同一個体である。土器全体の1/4程度の破片が出土した。2は南東の周壁際に、3は北側の周壁際に立てられていた。胴部から口縁部にかけて、ほぼ直線的に外傾する器形である。口縁部で厚みを増し、口端部には細長い刻みが施されている。地文は、横位回転のRL繩文である。内面にはケズリに近い荒い横ナデが施されている。

4・6も同一個体である。口縁部全体の約3/4の破片が出土している。口縁部片は掘形の西側に立てられていた。胴部がごく緩やかに外傾し、口縁部が直立する器形とみられる。口端部は丸みを帯びている。地文はLR繩文で、内面には丁寧なミガキが施されている。4の下端には打ち欠いたような痕跡が一部に認められ、掘形の深さに合わせて意図的に割られた可能性がある。5は、図示した口縁部片の他に胴部片約20点があり、底面から出土した破片が多い。胴部から口縁部まで、ほぼ直線的に外傾する器形と推察される。口端部は平らで、外側にわずかにせり出す。地文はLR繩文で、口端部から内面にかけて横ナデが施されている。4個体とも主に外面に炭化物が付着し、煮炊きに使用された土器とみられる。

ま と め

本遺構は、4個体の深鉢形土器の破片を掘形に据えている。主に口縁部の破片が重なった状態で壁際に立てられ、胴部片は底面に敷かれている。あらかじめ埋め戻された後、内側で火が焚かれた可能性がある。その性格として、埋葬施設かあるいは炉跡の2つの可能性が想起される。しかし、人骨や焼土、炭化物などは確認できなかつた。その時期は、出土土器の特徴から、繩文時代後期中葉～後葉と考えられる。

(今野)

石器集中地点 S X 03

遺構 (図30、写真18)

調査区南端のK36グリッドでは、L IV a下位からL IV b上面にかけて石器86点、縄文土器片3点が出土している。その他にも、細長い自然礫や方形の扁平な花崗岩、焼けて割れたとみられる角礫などが出土地した。遺物が出土した地点は、西向き斜面の中段に形成された狭い平坦地にあたり、わずかながら窪地となっている。石器は、図30-1 a・b・dが出土した付近に最も集中している。L IV b上面からの出土が石器全体の54%を占め、垂直分布は標高184.83～184.98mの間で上下差15cm内におさまる。

遺物 (図30～32、写真24・25)

出土した石器は、石鏸1点、石錐2点、削器6点、搔器4点、2次加工や微細剥離のある剝片10点、剝片62点、磨石1点である。石核および敲石は出土していない。また、石器周辺の土を土嚢袋で5袋分水洗したが、碎片は採取されなかった。石質鑑定の結果、剝片・剝片石器の石質は全て流紋岩であった。その色調や斑晶の多寡、風化の度合いから分類すると、7～9個の母岩からなる。

接合資料・2次加工の顕著な資料を中心に図示した。図30-1・2は接合資料である。1は4点の剝片が接合している。接合距離は、最も離れた1cと1dで1.1mである。4点は同じ節理面を打面として、連続的に剥離されている。いずれも礫面が残り、2次加工は認められない。1と同一母岩の資料は図32-7・8を含め、計18点が出土している。2は2点が接合し、その接合距離は1.3mである。打面は單剥離面で、背面には自然面が大きく残る。2a・2bとも、腹面の左側縁に若干の2次加工が施されている。2と同一母岩の資料は、図31-1の石鏸、同図4・9の削器、図32-6を含め計17点が出土している。

図31-1は無茎の石鏸である。基部はわずかに窪み、両側縁が少し膨らむ形状である。両側縁から連続的な押圧剥離を加えているが、腹面には主要剥離面が大きく残されている。2は石錐の未成品と考えられる。両面に調整剥離が加えられているが、腹面に素材の大きな剥離面が残り、つまりの作り出しも弱い。同図6など計3点が、2と同一母岩の可能性がある。3も石錐未成品の可能性がある。背面の右側縁と腹面の左側縁に細かい剥離が加えられている。3と同一母岩の資料は、同図5・7・8・11・12、図32-1～3・5などを含む計18点である。

図31-4・5・7・9～11は、鋭角な刃部が作り出されていることから削器とした。図31-4は、両面から調整剥離が施された円形の剝片である。厚みを取り去るような加工が施されていることから、石鏸未成品の可能性もある。5は打瘤を取り去り、腹面の右側縁、特に基部寄りに連続的な調整剥離が認められる。7は背面側の両側縁に、部分的な調整剥離がみられる。尖った先端近くの稜線にも微小な剥離が認められる。9は、背面の左側縁は片刃、右側縁には両面加工が施されている。10・11は縦長剝片を素材とし、打面は複剥離面である。10は背面の左側縁に刃部をもち、右側縁には細かい剥離が並ぶ。10と同一母岩の資料は、5点出土している。11は、主に腹面の右側縁に

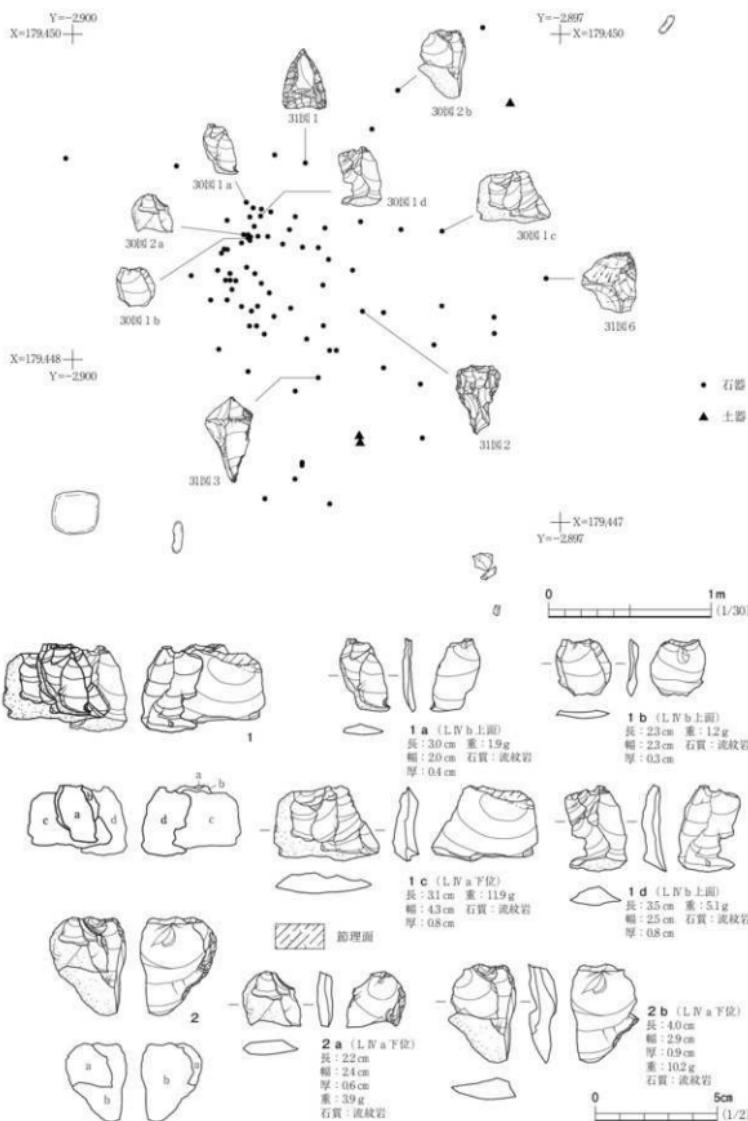


図30 石器集中地点・出土遺物（1）

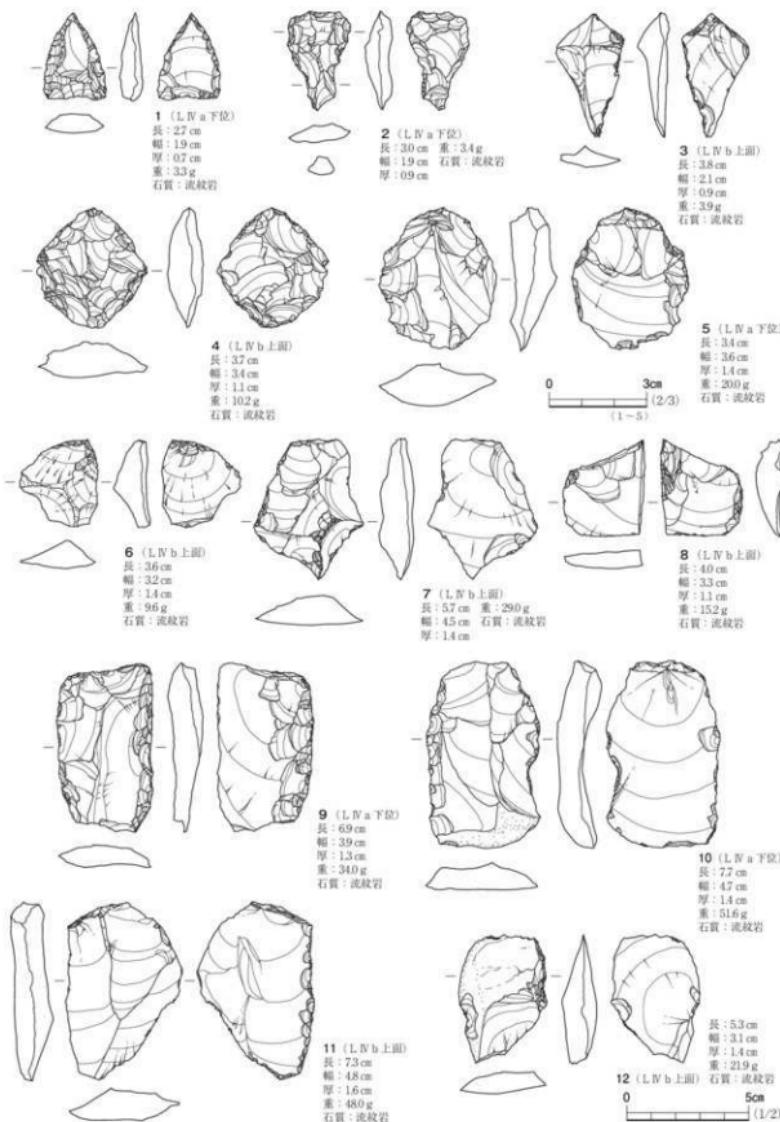


図31 石器集中地点出土遺物（2）



図32 石器集中出土遺物（3）

調整剝離が施されている。また調整剝離面は、素材面と色調が異なっている。

図31-6・8・12、図32-1は、急角度の刃部が作り出されていることから搔器とした。6は基部の腹面に打瘤を取り去る加工を、背面には刃部の調整剝離が認められる。8は腹面の右側縁に刃部を有し、左側縁には厚みを取るような剝離がみられる。また下端の縁辺にも、微細な剝離が認められる。12は自然面を残す貝殻状剝片を素材としている。背面の右側縁に連続した調整剝離を加えている。図32-1は背面の右側縁に刃部が形成され、左側縁には微細剝離が認められる。

図32-2～9は、微細剝離やわずかに2次加工が認められる剝片である。剝片の形状には3・6のような縦長のものと、7～9のような貝殻状のものがある。なお、図示しなかった剝片には、貝殻状や不整形のものが多くみられる。4は斑晶が多く含まれる石材で、下端に細かい剝離が認められる。4と同一母岩の剝片が、計14点出土している。

図32-10は、2片に割れて出土した磨石である。縦長の自然疊が用いられ、両側縁の磨面は平坦となっている。図32-11～13は、縄文土器の胴部破片である。いずれも胎土に纖維混和痕が認められる。11・12には斜方向の捲糸文、13には横位回転のLR縄文が施されている。13の内面には横ナデが施されている。

まとめ

S X 03は、平坦地のL IV a下位からL IV b上面にかけて、石器等がまとまって出土したものである。石器の半数以上が出土したL IV b上面が、当該期の生活面であったと考えられる。同一母岩の剝片と成品・未成品があり、接合資料も出土している。碎片が出土していないことから、不要な剝片等を廃棄した場の可能性もある。その年代は、遺物の出土層位と土器の特徴から、縄文時代早期後葉～前期初頭の所産と考えられる。

(今野)

第7節 遺構外出土遺物

縄文時代の遺物

遺構外出土として扱った縄文時代の遺物は、土器片・土製品988点、石器16点である。そのうち、K 33～36グリッドからは、土器片の約7割が出土している。当該グリッドは、SM01やSK41・43・44などが検出された斜面中段の平坦地にあたる。この平坦地付近からは、後期中葉～後葉に比定される土器が多く出土している。

阿賀川へと下る斜面の最も下位にあたるH・I 29～34グリッドでも、全体の約2割と比較的多くの土器が出土している。斜面下位からは、晩期中葉～後葉の土器が多く出土した。遺物の出土層位はL I～IV aである。L III・L III Aの出土数が8割を占め、L IIから10%程度が出土している。

なお、出土量が多い後期中葉～後葉の土器をI群、晩期中葉～後葉の土器をII群とした。

縄文土器（図33～38、写真26～30）

図33-1・2は、同一個体の可能性が高い深鉢形土器片である。胴部下端に近い破片とみられ、

尖底になる可能性がある。撫糸文が、縦走気味に施されている。内面にはナデかミガキが施されているが、調整は顕著ではない。胎土には、少ないながら纖維混和痕が認められる。また2の外面は、2次的な被熱により橙色に変色している。S X 03出土遺物として掲載した図32-12も、同一個体の可能性が高い。1・2は早期後葉～前期初頭に属する。3は中期中葉に比定される深鉢片とみられる。地文としてLRが縦位に施され、3条の平行沈線が縦走する。4は後期前葉に比定される深鉢形土器の胴部片であろう。地文にLRが横位に施され、多条沈線で文様を描いている。

I群土器 図33-5～図36-18が該当する。器種には深鉢・鉢形土器、台付鉢、浅鉢形土器・注口土器がある。そのうち、図33-5～図35-1は精製土器である。器形が明らかなる図33-6は、平縁の台付鉢である。高台部分は、接合面から剥離している。胴部に丸みがあり、頸部が屈折して、幅の広い口縁部は直線的に大きく開く。口縁部文様帶は横位に3分割され、上段と下段には異原体による羽状繩文が施されている。中段は入念に研磨され、上下の繩文帶よりわずかに窪んでいる。頸部には沈線が巡り、胴部には平行集合沈線を斜めに組み合わせている。

図33-5・7～図34-9は深鉢・鉢形土器と考えている。口縁部は図33-10のように、直線的に外傾するものがある。口縁上端が内側に肥厚し、口端部が平坦に整形されているものが多い。図33-5・7～10は平縁で、10には低い突起が付く。11～19は、波状口縁である。そのうち11・12・18・19は、波頂部が山形となる。また18には二股の突起が認められる。20～25、図34-1は、胴部に丸みを帯びる、あるいは頸部が屈折する器形の資料である。

文様帶構成には、図33-20のように胴部文様帶のみと推定されるものと、同図10・21～23のように口縁部と胴部に文様帶を有するものがある。また、図33-7～9・11～16・19の口縁部上端には、沈線や磨消部に区画された幅の狭い繩文帶がある。図33-20・21・23、図34-1の頸部には沈線が巡り、文様帶を区画している。図33-22の頸部には細かい刻みが、同図25、図34-9の頸部には刺突を加えた隆線が巡っている。口縁部の文様をみると、図33-11・13～16・21～23・25には、充填繩文による連弧文や曲線文、入組文が描かれている。12の波頂部には、瘤状の貼付けがあったとみられるが、ほぼ剥落している。胴部文様には、20の斜行する平行沈線文、22の曲線文などがある。23・24は横位の平行沈線が巡り、24はその上に蛇行沈線が垂下する。

図34-2・3は同一個体とみられ、平行沈線が縦位の沈線と弧線により区画されている。4～8は磨消繩文による区画文が認められる。地文は、節の細かい異原体による羽状繩文が大勢を占める。図33-24、図34-4～6には、斜行繩文が施されている。

図34-10・11は浅鉢形土器と推察される。10には充填繩文による区画文が描かれている。同図12～19は壺形土器と考えているが、注口土器の口縁部片を含む可能性がある。12～16は口縁部が直立または内傾し、そのうち12・15は頸部が大きく屈曲する。12・13は胴部に充填繩文による文様が施文されている。17～19は口縁部が内湾し、口端が肥厚して短く立つ。19の口縁直下と頸部には、細かな刺突を加えた隆線と沈線が巡る。口縁部には、充填繩文による大柄な曲線文が描かれている。いずれの内面にもミガキが施されているが、12・14・15の体部内面は、磨かれていない。

図34-20～図35-1は注口土器である。20は球形の胴部で、最張部が胴部上半にある。文様帶は沈線で区画され、胴部上段には充填縄文による入組状の曲線文が描かれていたと推定される。中段には羽状縄文を多段に施し、下段は磨り消されて無文である。用いられた縄文原体は、非常に節が小さい。注口部は接合面から剥落し、底部は円形に窪められている。内面調整は認められない。21は外面に入念なミガキが施され、弧状の沈線が描かれている。また縦に刻んだ瘤状の小さな突起が付く。22は口縁部が短く直立し、胴部は球形である。小さな底部は円形に窪む。口縁には、2個一对の小突起が4単位で付く。胴部上端に巡る2条の隆線間にも、4単位のごく小さな貼付け文があり、その直下にはやはり縦に刻んだ瘤状の突起が付く。胴部には、櫛状の文様が同じく4単位で巡る。文様は、ミミズ腫れ状のごく細い隆線で表されている。この細隆線は、まず2本の平行沈線を描き、その外側を研磨して不明瞭にし、沈線の間を隆線状に残したものである。器面全体が丁寧に磨かれている一方、内面調整は認められず、輪積み痕も残っている。図35-1は、大ぶりな注口土器の胴部から底部にかけた破片である。胴部片と底部片は接合しないが、文様帶を区画する隆線と推定径をもとに復元した。胴部には、細かい刻みが入る隆線によって、入組状の文様を横位展開させている。胴部上位の最張部に瘤状の突起が付き、細かい刻みは瘤の頂部にも施されている。注口部が取り付けられた孔付近の内面には、液垂れのような形の付着物が認められる。

図35-2～図36-17は、粗製土器である。口縁部が内湾気味となるものに図35-2・3・6、図36-4～7がある。他には、図35-4・10のように直立するもの、同図15のように直線的に外傾するものがある。精製土器と同様、口縁部は肥厚し口端が平らな形状のものが目立つ。特に図35-7・11は、口端の内側への張出しが顕著である。図35-2～7には、異原体による羽状縄文が施文されている。3・5は同一個体の可能性が高い。節の細かいLRとRLの原体を用いている。同方向の原体が2段続くななど、不規則な部分も見受けられる。7には特に細い原体が用いられている。図35-8～図36-2の地文は単節LR、図36-3～5は単節RLである。図35-15は、顕著な横ナデの上にわずかに縄文が認められる。図36-1・2は、横と斜めに施文方向が乱れている。

図36-6～8は無文の口縁部片である。薄手の8は、ミニチュア土器の可能性がある。同図9～17には、条線文が描かれている。工具の歯数が5～6本で条間が広い9～12と、条間が密で条線が細い14～17がある。文様には、口縁部に沿って平行に施文される9、波状文が縦に垂下する10・11、縦方向に直線的に引かれた13、螺旋状に施文されたとみられる14～17などがある。10・12の器面には、ヘラ状工具による横ナデの痕跡が顕著に残る。

図36-18～20は底部資料である。18の底面には2本越え2本潜りの網代痕が付く。胴部外面には丁寧なミガキが、内面にはヘラナデ状の調整が認められる。19は精製土器の底部片とみられる。胴部は大きく開き、小さな底部はわずかながら上げ底となっている。LR縄文が施され、胴部下端は磨かれて無文である。20は胴部・底面とも無文で、外面は丁寧に磨かれている。

Ⅱ群土器 図37-1～図38-21が該当する。そのうち、図37-1～9・11は精製土器である。1の浅鉢形土器は、口縁部が短く内湾気味に開き、頸部は「く」字に屈曲している。体部は丸く、

その上位に最張部がある。底部は丸底氣味である。波状口縁で11単位の突起が付くと推定される。口縁直下には指頭圧痕による波状の凹凸が巡る。また波頂部の下に、三角形の窪みが付く突起もみられる。突起の内面にも三角形の窪みがあり、沈線で連結されている。肩部にはボタン状の貼付文と2個一対の小突起が4単位で付く。これを繋ぐように沈線と刺突を付した沈線が巡っている。体部下位にも2本の沈線とそれに挟まれた刺突を付した沈線が巡り、文様帶を区画している。体部には、磨消繩文によって文様が表されている。C字状文が直線化した三角文と菱形文が縦に連結し、工字文に近い文様が描かれている。この単位文が4単位で配置され、その間にも小さな三角文が入る。地文は単節LR繩文である。また図示できなかったが、口端部沈線内に赤色塗料の可能性がある付着物が、ごくわずかに認められる。

図37-2～5・8・9も浅鉢形土器とみられる。2は、磨消繩文によってC字状文が上下2段に描かれ、文様帶の上下は沈線で区画されている。3・4は、体部に工字文が描かれている。5は平行沈線がみられる体部下位の破片である。8は、口縁直下に2個一対の瘤状の貼り付けがあり、肩部にメガネ状付帯文がある。その下には幅広で浅い平行沈線が引かれている。9もメガネ状付帯文がみられる資料である。口縁には、2個一対の丸い小突起が付く。また口縁部内面には沈線が1条巡っている。体部の文様帶は平行沈線で区画され、直線化して横長となったC字状文が、磨消繩文によって上下2段に描かれている。6・7は波状口縁の突起部分である。6は口端部と口縁直下に沈線が描かれている。7の口端部にも太い沈線が描かれている。また、7は橙色で他の土器と色調が異なる。11は壺形土器とみられ、突起は6単位と推定される。口端部には沈線が描かれ、その直下の隆帶には1と同様の凹凸が付けられている。波頂部の下は、三角形に窪められている。波頂部の内面にも三角形の窪みがあり、沈線で連結されている。頸部には連続刺突を付した沈線と平行沈線が横走し、縦長の刺突が間隔を空けて施文されている。

図37-10は壺形土器である。口縁部は複合口縁となり、撫糸文が横位に施されている。図38-1～15は、粗製土器の資料である。図38-12・13は壺形土器の可能性もあるが、細い原体を用いた撫糸文が施文されている。図38-1～11・14・15は、深鉢形土器の口縁部・胴部片である。口縁部片は内湾または直立し、胴部片は直線的に外傾する。口縁部は複合口縁で、輪積み痕が観察される。文様には撫糸文、網目状撫糸文、櫛歯状工具による条線文がある。文様は口縁部では横方向に、胴部では縦に施文されている。6は撫糸文の施文方向が変えられ、網目状となっている。10の条線は比較的太く、条間の空いた工具で施されている。14・15は細かい櫛歯状工具で施文され、工具幅は2cm前後とみられる。

図38-16～21は底部資料である。16～20は、胴部下端が急角度に立ち上がってから外反して開いている。特に18は、胴部下端に高台のような無文帶がある。17の底面にはケズリが施され、19・20の底面には細い素材で編まれた網代の痕跡が認められる。粗製土器の内面にはナデまたはミガキが施されているものが多い。また、図38-4・7の内面、同図5の外面上には炭化物が付着している。

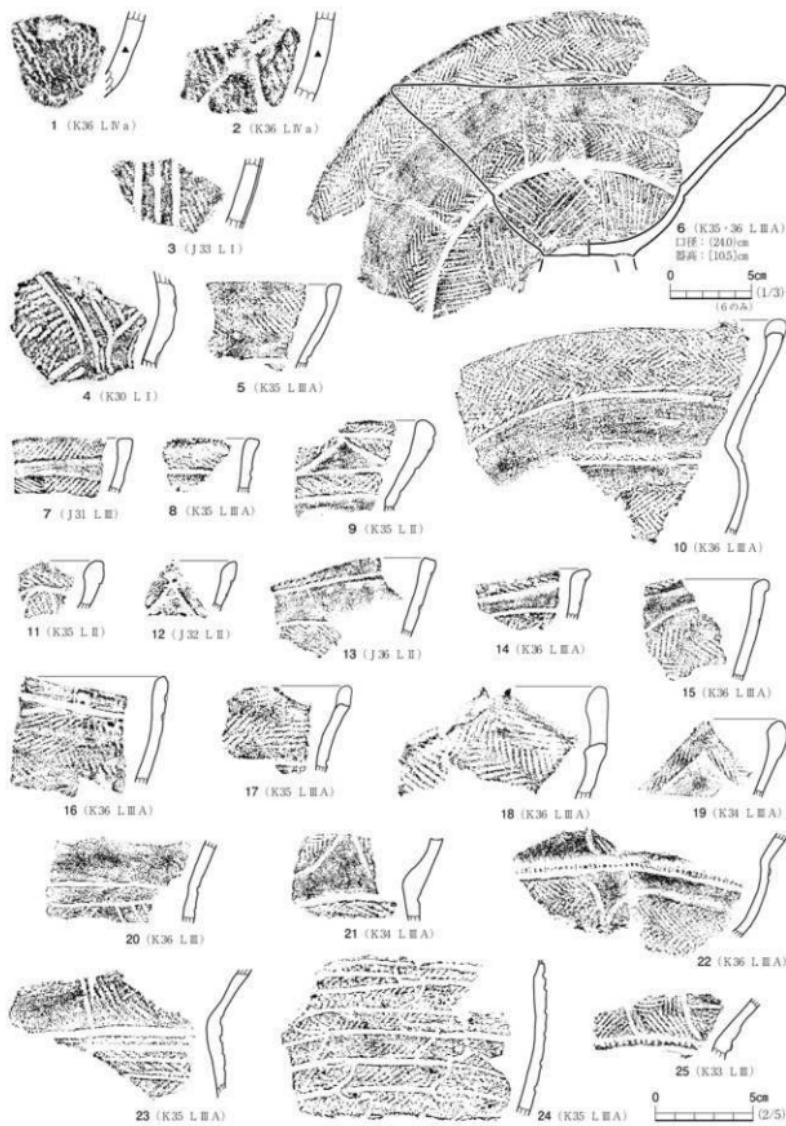


図33 遺構外出土縄文土器（1）

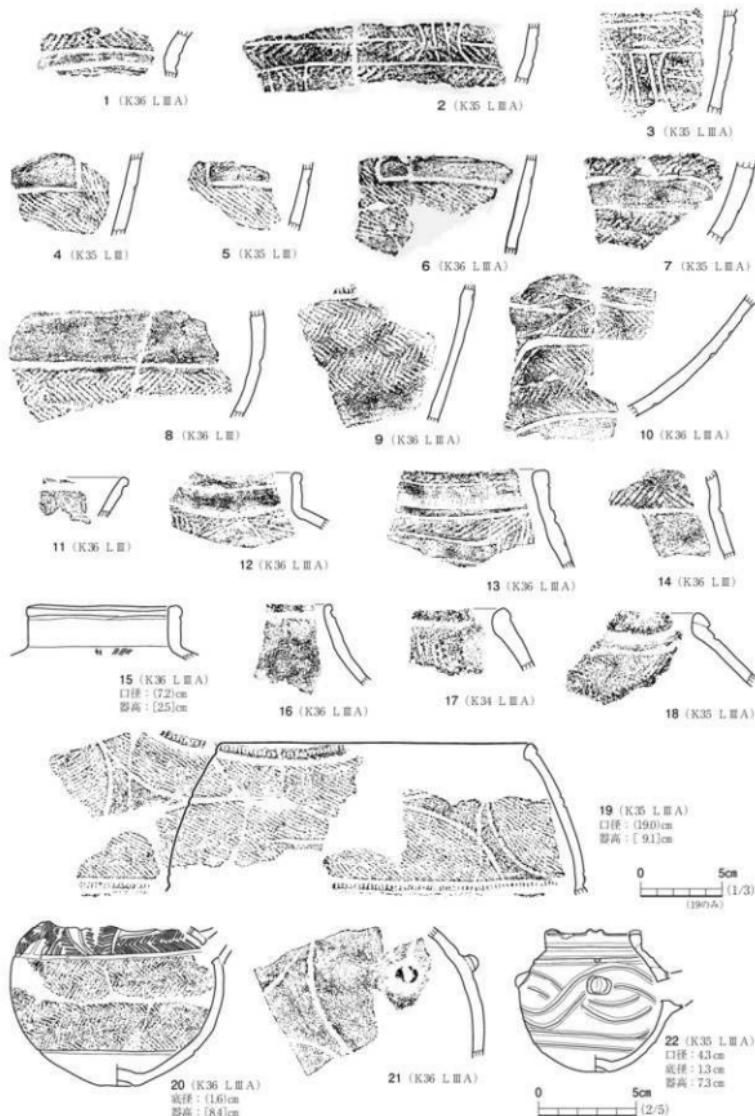


図34 遺構外出土繩文土器（2）

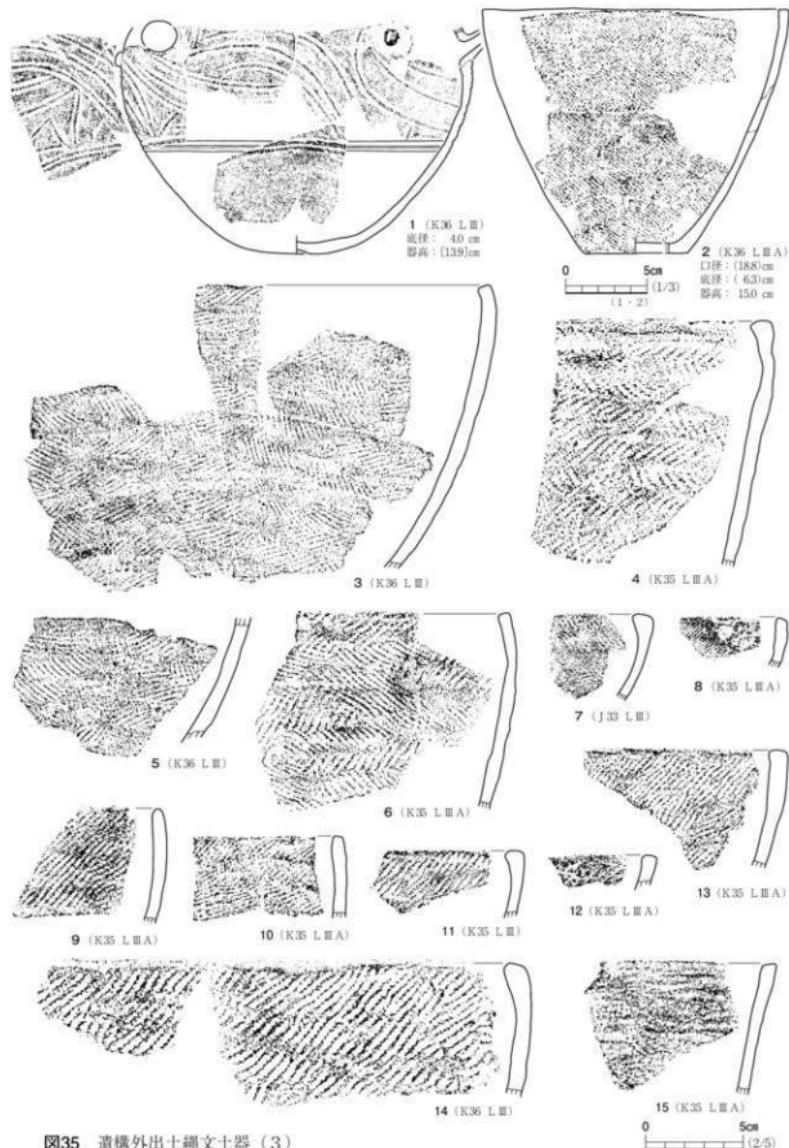


図35 遺構外出土繩文土器（3）

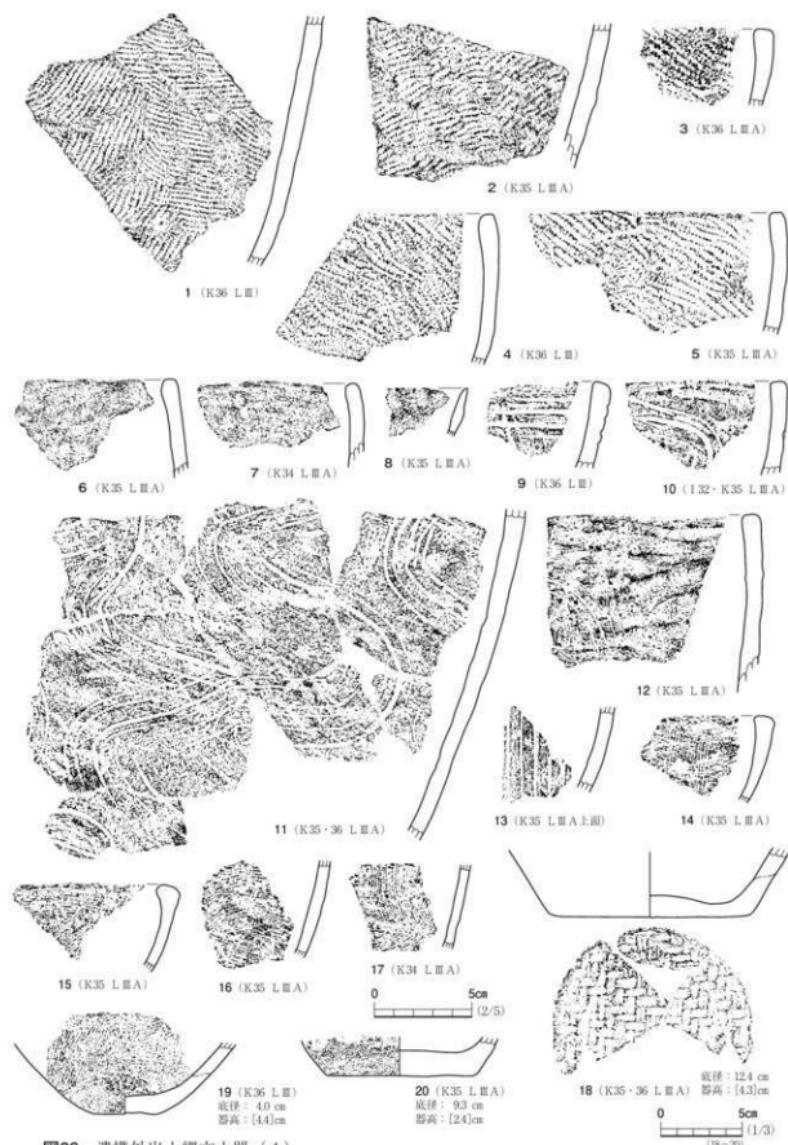


図36 遺構外出土繩文土器（4）

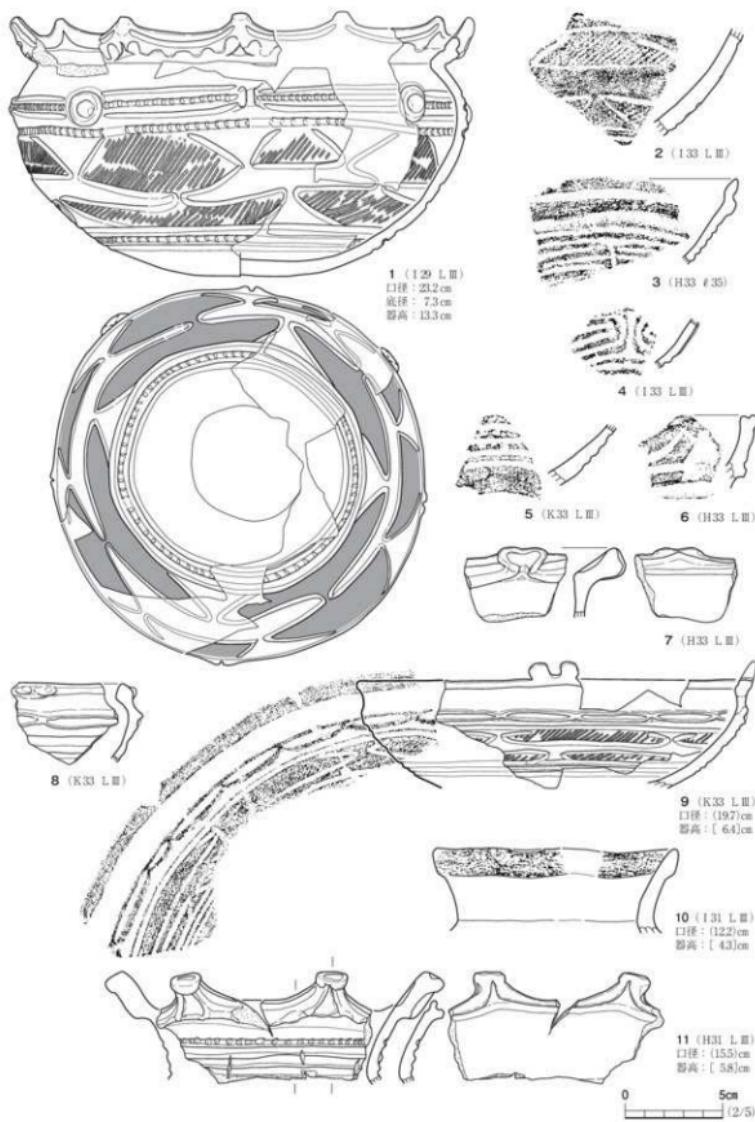


図37 遺構外出土繩文土器 (5)

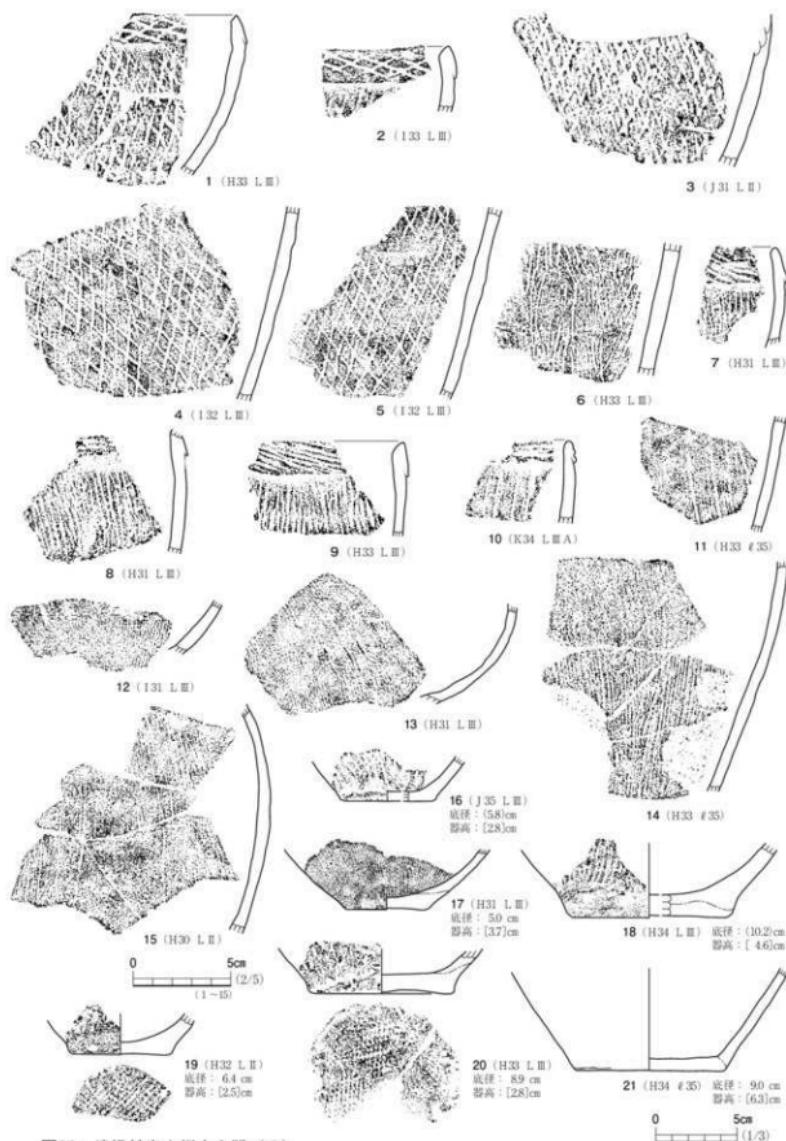


図38 遺構外出土縄文土器（6）

土 製 品 (図39、写真29)

図39は、ミニチュア土器および土製品である。1は鉢形のミニチュア土器である。胴部中位に最大径があり、頭部の括れが弱く、口縁部は短く外傾する。口縁部は無文で頭部以下に斜行繩文が施されている。内面は口縁部から頭部にかけて、横ナデが施されている。2は土版である。全体の1/4程度の被片とみられ、小判型になるものと推定される。砂粒の多い粘土が用いられ、粘土を重ねた痕跡が破断面に確認できる。表面とした側には渦巻き文が、裏面には多条沈線による弧文が描かれている。側面には円形刺突が2列並ぶ。1・2は晩期に属すると考えている。3は土偶の脚部か土器の把手とみられる。無文で表面にはミガキが施されている。4は断面形が丸い棒状の土製品で用途は不明である。表面に指オサエの痕跡とミガキが認められる。

石 器 (図40、写真31)

図40-1は有茎石鏃である。長幅比は3.4:1と際立って縱に長く、両側縁は直線的である。調整刺離が全面に及び、左右対称の整った形状をしている。基部には、黒褐色の付着物が帶状に巡っている。2は横型の石匙である。つまみが端に寄り、刃部が緩やかに湾曲する形状である。貝殻状の剥片を素材とし、素材の刺離面が大きく残されている。刃部には主に背面に調整が加えられ、鋭角で薄い。つまみの付く側縁には両面から調整刺離が入り、刃部に比べ角度が鈍く厚みがある。3は削器あるいは石箒等の欠損品であろう。両面加工が施され、側縁は鋭角である。4は搔器とみられる。背面の右側縁に連続的な調整刺離が加えられ、急角度の刃部が作出されている。また、表面全体の磨減が著しい。5は削器の可能性がある両面加工石器である。粗い2次加工が施され、片面には節理面が大きく残されている。

6・7は、打製石斧の基部と考えている。6は背面に棱を形成する調整刺離が施される一方、腹面には素材面が残されている。7は両面全体に刺離整形が及び、両側縁は平行となっている。8は片刃の磨製石斧である。両側縁は刃部に向かってやや幅を狭め、刃部の形状は弧状である。両面に右下がりの研磨痕が認められ、刃部には刃と直行する線状痕も確認される。9は磨製石斧の未成品

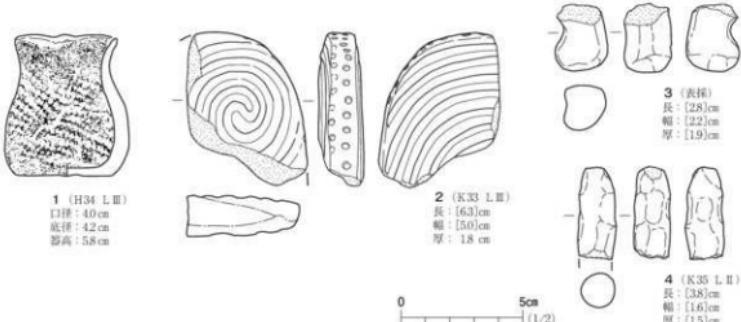


図39 遺構外出土製品

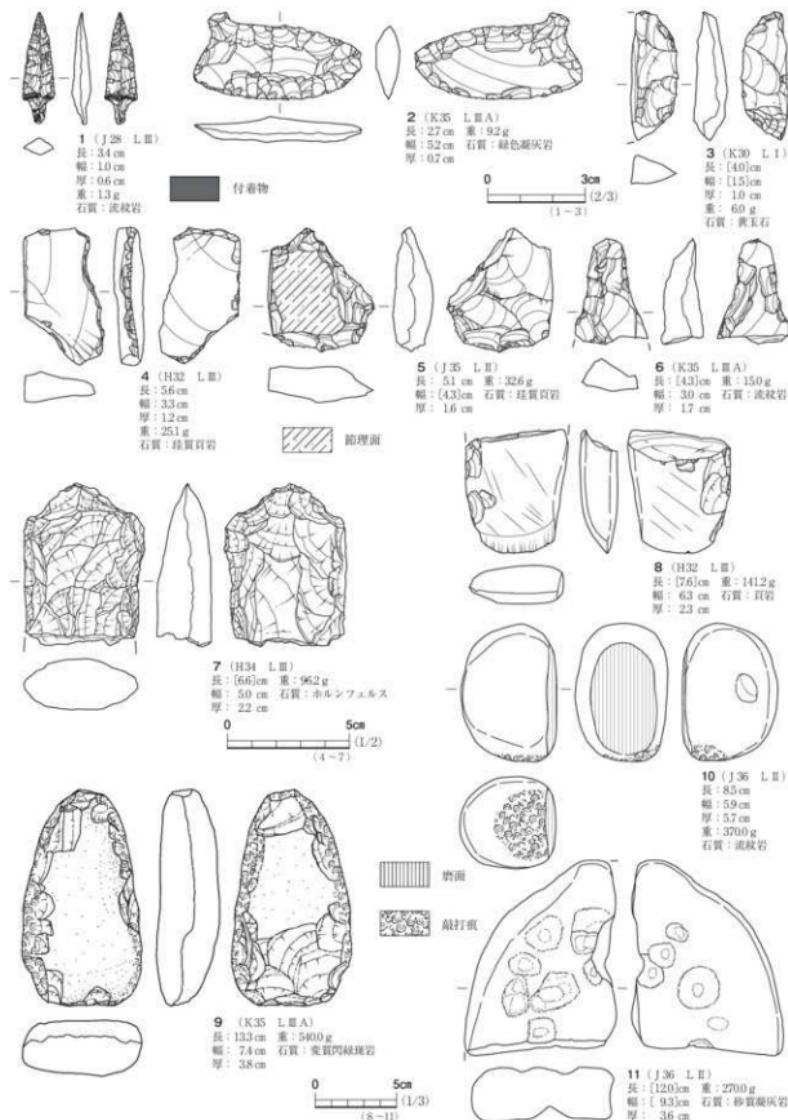


図40 遺構外出土石器

とみられる。扁平で細長い礫を素材としている。側縁と刃部に剥離を加え、剥離の棱線を消すために敲打している。10は亜円礫を素材とした敲石・磨石である。下端には敲打痕が認められ、側縁の一方は磨面として使用されたことで平坦になっている。11は凹石である。軟質で平板な凝灰岩が用いられ、両面に円錐形の窪みが多数認められる。

(今野)

古代の遺物

今回の2次調査区において、遺構外から出土した古代の遺物は、土師器3,876点・須恵器121点・鉄製品9点である。出土土器の大半が破片資料であるが、概ね平安時代に位置付けられるものが多い。土師器の内訳は、杯類829点・甕類3,023点・その他24点である。須恵器の内訳は、杯類67点・甕類47点・その他7点である。2次調査区における古代の出土土器の総量の内、須恵器が占める割合は約3%である。

土師器類の分布状況は、S I 14・15を検出した小段丘面付近に集中している。S I 14周辺のI・J 27～29グリッドから521点、S I 15周辺のI・J 23～25グリッドから1,706点出土し、併せて全体の約57%を占める。2次調査区北端部のS I 15周辺部では、土師器生産に関連した遺構が分布することから、周囲で出土した土師器は、生産遺構からの侵食等による流出、または廃棄品の可能性がある。また、2次調査区南西部のH 33グリッドに位置するSK 42も土師器生産関連の遺構と推測され、G・H 33グリッドで土師器が227点出土している。SK 42の周囲には同時代の遺構が分布しておらず、周辺部で出土した土師器についても同遺構からの流出・破棄品の可能性がある。

土 師 器 (図41・図42-18~22、写真32)

図41-1は、S I 15の東側約2.5mの地点で、正位の状態で出土した杯である。全体の約85%が遺存しており埋納された可能性もあるが、詳細は不明である。1の器形は、体部～口縁部まで曲線的に開く。体部下位～底部全面に回転ヘラケズリが施されている。内面のヘラミガキは比較的丁寧に施されている。1の底径／口径比・器高／口径比は0.44・0.29であり、S I 15から出土した土師器杯よりも底径が広く、器高が浅い印象の杯である。

図41-2～6は無台の杯である。2は比較的大型の杯で、口縁部がわずかに外反する器形である。内面の黒色処理がほとんど消失しており、2次的に熱を受けた可能性がある。2の体部下端～底部前面に回転ヘラケズリが施されている。2は、出土地点からS I 15またはSK 36関連の遺物の可能性がある。3～5は、体部下位に手持ちヘラケズリが施された資料である。5は、出土地点からSK 42関連の遺物の可能性がある。6は体部下端に回転ヘラケズリが施されるが、底部外面は無調整であり回転系切り痕が観察される。

図41-9・10は高台付杯の底部破片である。9は高台が接合部から剥落している。10は短い逆三角形の高台が付く資料である。同図8は脚部の破片と思われる資料で、透かしと考えられる溝が縦に入っている。脚部の調整は外面が横位のヘラケズリ、内面がナデである。透かしの間が約4.8cmを測るため、5単位であった可能性がある。

図41-7は内面に黒色処理・ヘラミガキが施された小型の土師器甕である。胴部下位に回転ヘラケズリが施されている。同図11は小片でその全体形は不明であるが、口唇部が上方につまみ上げられており、比較的大型の甕類の可能性がある。内面には黒色処理・ヘラミガキが施されており、口縁部の外面は黒色に変色しヘラミガキが施されている。小片のため判然とはしないが、黒班の可能性もあり、内面の黒色処理とは性格が異なっている可能性がある。

図41-13・15~20も土師器甕類の破片資料である。13の口縁部は約45°の角度で外傾し、口唇部が上外方につまみ上げられている。15の口縁部は短く屈曲している。胎土には比較的多くの砂粒を含む。外面の調整は頸部からヘラケズリが施されている。内面には粘土積み上げ痕が観察される。16も口縁部が屈曲する資料で、比較的堅致な土器である。16の内外面にはカキメ状のナデが施されている。15・16は、出土地点からS I 14関連の遺物の可能性がある。17は長胴甕の底部破片で、平底に施されたタタキメが、ケズリ再調整によってほとんど消失している。18は平行タタキメが格子状に施された資料で、底部を欠損するが比較的底径の狭い甕と思われる。内面には、ヘラナデ・指ナデによる調整が施されている。19は比較的底径の狭い甕類と推測されるが、底厚が2.5cmを測る底部資料である。20は内外面とも比較的目の細かいハケメ状工具を用いて、ナデ調整が施されている。図41-21は瓶の把手と思われる資料で、付け根に直径1cm前後の穴が開けられていたようである。

図41-12の口縁部は甕・鍋類のように面取りされている。体部下端に稜が付く資料であるが、小片のため器種は不明である。同図14は鍋と考えられる破片資料で、体部下端外面にタタキメ・ケズリが施されている。

前出の土師器は平安時代の資料であるが、H29グリッドで古墳時代と考えられる図42-18~22が出土している。H29グリッド付近の地形は2次調査区最下段の平坦面であり、小流路状に侵食された窪地から各土師器が出土した。検出当初は祭祀遺構の可能性も想定したが、各土師器は洪水砂で被覆されていたため、原位置を保っていない可能性もある。18・20・21は高杯である。18は杯底部の破片資料で、脚との接合部が直径約1.5cmの脚状に張り出している。20・21は脚部の破片資料で、外面の調整は縦位のケズリ後、ヘラミガキが施されている。内部は中空で、指オサエ・ナデ等による調整が施されている。19は低い柱状の平底資料である。底部内は熱を受けており、器面が爆ぜて薄く剥離している。22はほぼ完形の壺である。算盤玉に近い丸底・球形の胴部から、逆「ハ」字状の口縁部が内湾気味に立ち上がる。口縁部には横ナデが施されている。胴部外面にはハケメ状のヘラナデが施されている。胴部内面は、口縁との接合部を指ナデで調整している。底部内は熱を受けており、器面が斑状に薄く剥離している。

須恵器(図42-1~17)

1~5は、無台杯である。1は約60%が遺存する。器面は黄味を帯びた灰白色で、焼成は良好でない。底径/口径比・器高/口径比は0.62・0.27で、比較的底部が広い器形である。1の内面には火だすき痕が観察される。1の底部には回転ヘラ切り痕が認められ、軽いナデ調整が施されてい

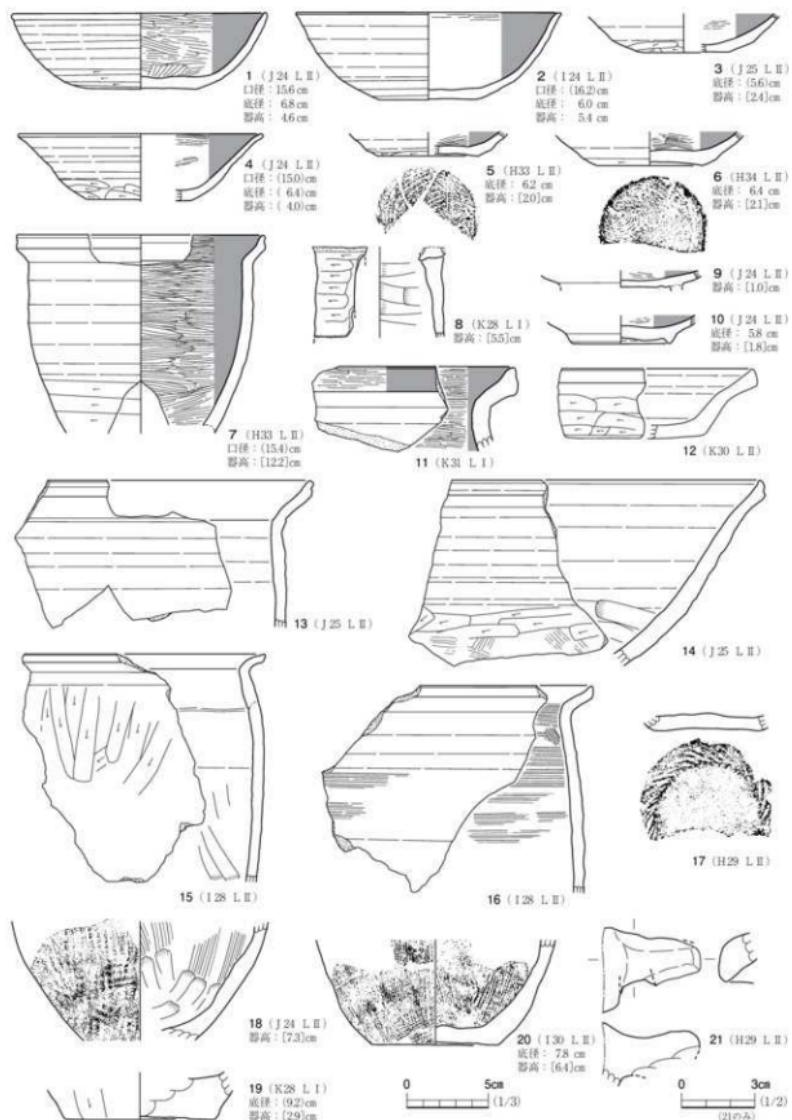


図41 遺構外出土土器 (1)

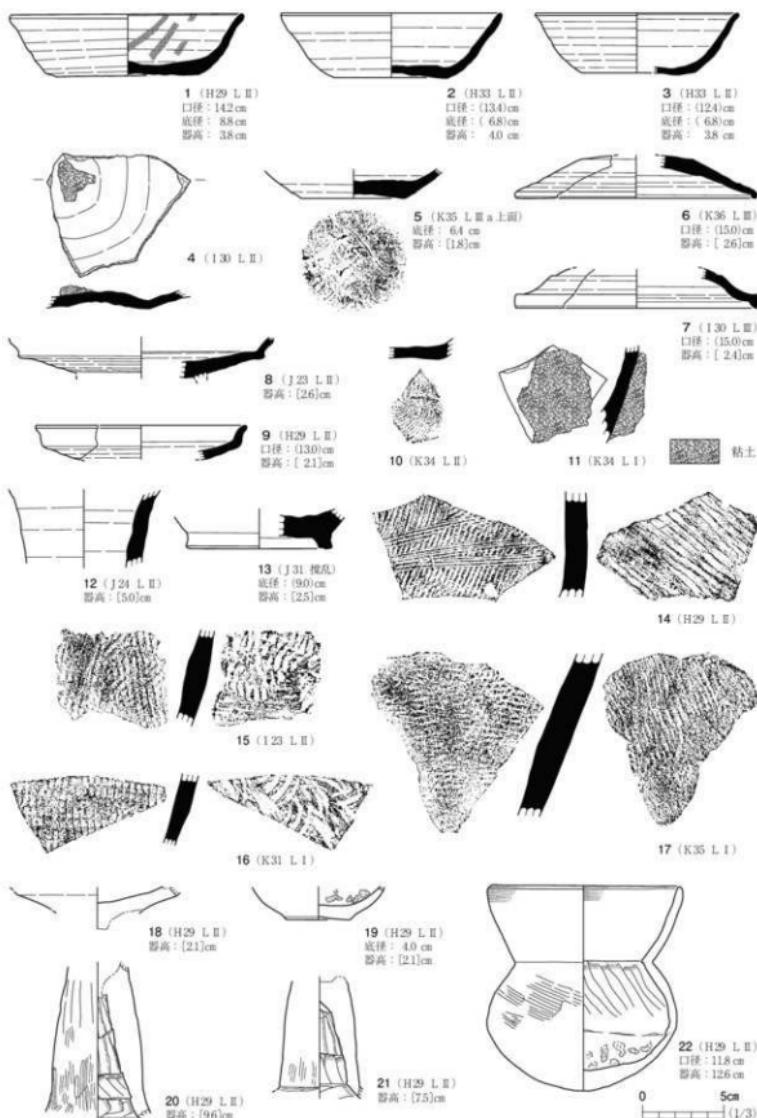


図42 遺構外出土土器 (2)・須恵器

る。2・3は小破片であるが、1よりも底径／口径比の値が小さい杯である。4は歪みが著しく、また粘土小塊が付着した杯で、生産遺構からの廃棄品と思われる資料である。5の底部資料は、回転ヘラ切り痕がナデによってほとんど消されている。10は細片のため不明点が多いが、遺存部の形状から杯の可能性がある資料である。10の底部外面には回転系切り痕が認められ、ロクロからの切り離し技法が他の須恵器杯とは異なる。

6・7は須恵器杯蓋の小破片である。6の口縁端部は丸く収められているが、7は口縁基部が面取りされ、その端部は断面が逆三角形になっている。

8・9は須恵器盤と思われる小破片である。8は体部上端に明瞭な稜が付き、後円部が上外方に開いている。9の口縁部は、体部から丸みを帯びて立ち上がり、口唇部でわずかに外反する。

11～17は、須恵器瓶・甕類の破片資料である。11は、胴部破片の外面にスサ入りの粘土塊が溶着した資料である。12は長頸瓶の小破片で、外面に自然釉が付着している。13の底部資料は、高台端部がほぼ水平に仕上げられている。14～17はタキメが観察される胴部資料で、15・16の内面には当て具痕が認められる。

鉄製品(図43、写真32)

平安時代頃と推測される鉄製品が少量出土している。1～3・5は、刀子と考えられる資料である。1はSK42の西側で出土したもので、切先と茎端部が失われている。刀身に対し茎がわずかにせり上がっている。3はSK36の南側で出土したもので、茎は二等辺三角形状に伸びる。5は刃幅が比較的細い刀子である。6も刀子としたが、棟と刃が平行に近く、他器種の可能性がある。

4は、先端部を欠損した棒状の鉄製品である。先端側が広がるが遺存状態が悪く、器種は不明である。7は、SI15の北東側で出土した比較的小型の袋状鉄斧である。基部は上端から中ほど近くまで及び、両縁を楕円状に巻き込んで形成されている。

(香川)

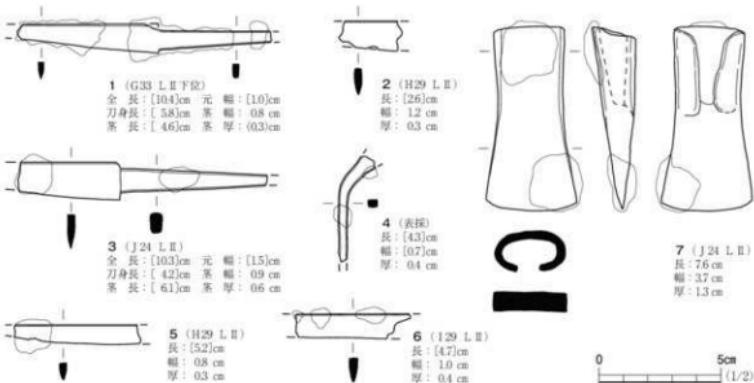


図43 遺構外出土鉄製品

第3章 総括

第1節 繩文時代

縩文土器について

縩文時代の遺物は、1号土器埋設遺構(SM01)から深鉢4個体の破片、石器集中地点(SX03)から縩文土器片3点、石器86点、遺構外から土器片・土製品988点、石器16点が出土している。ここでは、出土量が多い縩文時代後期中葉～後葉のI群土器と晚期中葉～後葉としたII群土器について、先学や類例との比較からその編年的位置を検討する。

I群土器 SM01出土の図29、遺構外出土の図33-5～図36-18がI群土器である。会津地方の遺跡にI群土器の類例を求めるに、磐梯町角間遺跡のV群2類土器の第Ⅲ段階(福島県1990)、会津美里町(旧会津高田町)北平遺跡第Ⅲ群のうち「角間遺跡の新期に対応する」土器群(福島県1992)がある。後者の北平遺跡出土例は加曾利B3式期を中心としたものと位置付けられているが、本遺跡のI群土器もまた、主体はこの時期にあると考えられる。

加曾利B3式期より古段階の可能性があるものに図33-20があり、その特徴から加曾利B2式並行期とみられる。新しい可能性がある土器としては図33-12が挙げられ、瘤付土器第I段階(小林1999)に相当しよう。山形の波頂部となる同図11・18・19は、加曾利B3式から新地式への「過渡的様相を示す一群」(石川町1998)と考えられる。図34-22の注口土器は、櫛掛け状の入組文が描かれていること、小さな貼瘤があることから加曾利B3式期に後続する時期に位置づけられる。

SM01から出土した図29-2の粗製土器は、口唇部の刻みが特徴的である。新潟県北蒲原郡中条町江添遺跡に出土例があり、加曾利B2式並行に比定されている(新潟2005、金内2009)。図29-2は同図1と共に共伴関係にあるため、加曾利B3式期か瘤付土器の初現期の土器と考えている。新潟県との関係を考える上で、今後注視したい土器である。以上のようにI群土器は加曾利B3式期を中心として、これに前後する時期、特に瘤付土器への過渡的段階の資料を含んでいる。

II群土器 遺構外から出土した図37-1～図38-21が該当する。II群に類似する土器は、会津坂下町袋原遺跡・鬼渡A遺跡、喜多方市(旧山都町)上林遺跡・金山遺跡、中通り地方では須賀川市一斗内遺跡、新潟県では三条市上野原遺跡、豊栄市鳥屋遺跡などから好例が出土している。袋原遺跡では、図37-1・2・8・9と同様のメガネ状付帯文や磨消縩文による横長のC字状文などを特徴とする土器を大洞C2式の後半に、図37-3・4のような工字文を描く土器を大洞A式の前半に並行させている(会津坂下町1976)。一斗内遺跡の浅鉢形土器の変遷(福島県1984)でみれば、前者はII期6段階に、後者はII期7段階に該当する。II群土器はその特徴から、大洞C2式の新段階～大洞A式前半、新潟県の上野原式～鳥屋1式(豊栄市1988)の時期に比定される。特異な例では、図37-1のボタン状貼付文は、金山遺跡、鳥屋遺跡出土の大洞A式期古段階の浅鉢に認められる。

図37-9の口縁部に付く丸い小突起は、鬼渡A遺跡出土の浅鉢形土器に類例がある。いずれも福島県内では稀な例であり、会津地方や新潟県にみられる地域的な特色といえよう。

縄文時代の遺構について

2次調査で確認された縄文時代の遺構には、土坑4基(S K 41・43・44・47)、土器埋設遺構1基(S M01)、石器集中地点(S X 03)1箇所がある。このうち、土坑と土器埋設遺構について若干の検討を加える。

落し穴 斜面の中段に形成された狭い平坦地に並ぶS K 41・43・44・47は、縄文時代の落し穴とした。1次調査で確認されたS K 08を含め、5基がほぼ一直線上に8~10m間隔で並んでいることから、同時期に機能した可能性が高い。また土坑の長軸方向は、いわゆるトラップラインに対していずれも直交している。トラップラインは、阿賀川と平行して設置されている。

その機能時期については、S K 41では縄文時代早期後葉～前期初頭の生活面としたL IV bが掘り込まれていることから、それ以降の所産と考えられる。また土坑内の堆積土と堆積土中に含まれる沼沢バミスの観察から、いずれの落し穴も縄文時代前中期以前にはある程度埋まっていたものと推察される。

土器埋設遺構 I群土器が埋設されたS M01は、埋葬施設と炉跡の二つの可能性を考えている遺構である。埋葬施設の類例として、青森県青森市小牧野遺跡の土器埋設遺構No.2がある(葛西2002)。底のない深鉢形土器1個体を埋設し、底面に埋設土器とは別個体の破片を敷いている。埋設土器の年代は、十腰内I式である。別個体の破片を底面に敷く点に、S M01との共通点がある。しかし、基本的には単体の土器を埋設した土器棺墓に類する遺構であり、4個体の破片を埋設したS M01とは大きな相違がある。この他にも複数の土器が埋められた埋葬施設とみられる遺構は多くあるが、管見にふれる限りそれらは、大きな土坑に複数の土器を入れる・入れ子状に重ねる・合口にする・別破片を蓋や底にするなどの事例である。

炉跡の可能性を考慮した場合、まず福島県における後期中葉～後葉の炉跡は石囲炉が多く、地床炉も存在するが、土器埋設炉は稀である。その事例として、磐梯町角間遺跡3号住居跡の土器埋設炉がある。角間遺跡例は、口縁部を欠く深鉢形土器1個体を埋設している。土器の周辺は強く焼けているにも関わらず、土器内には火床面が認められなかった点が注視される。埋設土器の文様は地文のみであるが、同住居跡からは主に加曾利B2式期の土器が出土している。角間遺跡例は単体の土器を埋設している点が、やはり本遺跡のS M01と異なる。

後期中葉～後葉の遺構として挙げられている新潟県新発田市の村尻遺跡第10号炉は、「円形石組炉内に土器片を円形に立て、さらに内部に土器を敷いている」(増子他1999)。土器埋設部分の平面形は円形で、直径は50cmほどである。その土器埋設状況と規模は、S M01とよく類似している。しかし、石で囲われている点がS M01とは異なる。以上のように他遺跡の事例と比較してもなお、その性格についてはいずれとも結論付けられず、今後の検討課題としたい。

(今野)

第2節 平 安 時 代

遺物について

今回の2次調査は、調査Ⅲ区(計8,500m²)とした河道部の継続調査である。平成22年度の1次調査では、調査Ⅲ区については北部(3,000m²)の発掘調査を行い、平安時代の竪穴住居跡S I 06・11を検出している。S I 06・11の性格は、立地から土器生産に関連した竪穴住居跡の可能性がある。S I 06・11は重複関係にあり、出土資料の構成・時間差が明確である。S I 06よりもS I 11の方が古い。なお、S I 11の食膳具には須恵器杯を伴うが、胎土分析の結果から調査Ⅱ区S R 01～03の生産品の可能性が指摘されている。

S I 06・11については、1次調査の『阿賀川改修(長井地区)遺跡発掘報告1』(pp.167～180)で詳細に報告されているが、2次調査出土資料との比較・検討のため、S I 06・11出土土器について再度、要約する。

S I 11出土資料について 図44-1～15は、S I 11の床面・カマド底面から出土した土師器・須恵器である。杯類には内面黒色処理・糸切り底の土師器(1～6)、ヘラ切り底の須恵器(11～14)の2種があり、底部の形態は無台に限られる。S I 11の床面・堆積土から出土した杯類の破片点数は、土師器303点：須恵器108点で、その整数比はおよそ3：1である。S I 06の食膳具は、土師器杯の比率が高い。

土師器杯の器形は、体部から口縁部まで内済気味に開き、口縁部が外反するものはほとんど認められない。土師器杯の形態は、法量から(1・2)、(3・4)、(5・6)の3種の規格が存在した可能性があるが、器高／口径指数では浅身(1・2)と深身(3～6)の2種に明確に分かれる(図45)。土師器杯1・2と須恵器12～14は、底径／口径指数50～40・器高／口径指数32～27のG類枠におさまり、器形・法量とも近似的である。なお、このG類は、山中氏の土器分類(山中：1999・2000、以後、「山中分類」とする)に準拠している。

図44-7～10・15は土師器壺である。小胴壺の7・8は、胴部下位に回転ヘラケズリを施すが、底部外面は無調整で回転糸切り痕が明瞭に残る。各小胴壺の口唇部は、比較的緩やかに屈曲している。9は底部を欠損するが、遺存部の形状から比較的長胴であったと思われる資料で、胴部下半にタタキ整形・ヘラケズリが施されている。15も長胴壺の底部資料で、比較的底径が小さい平底の下端にタタキ痕とヘラケズリが認められる。

S I 11資料を山中分類にあてはめると、概ね以下のとおりになると思われる。

- ・杯類…土師器杯：D 2類(図44-1・2)・D 4類(図44-4・5)主体、須恵器杯：G類
- ・壺類…土師器長胴壺：A c ②類、小胴壺：II c ②類

よって、S I 11の杯類は、法量の傾向から山中分類の(ホ)、または(ヘ)段階に位置付けられるだろう。長胴壺のタタキ痕は顕著なものではなく、粘土紐圧着等の「整形」技法にとどまっている

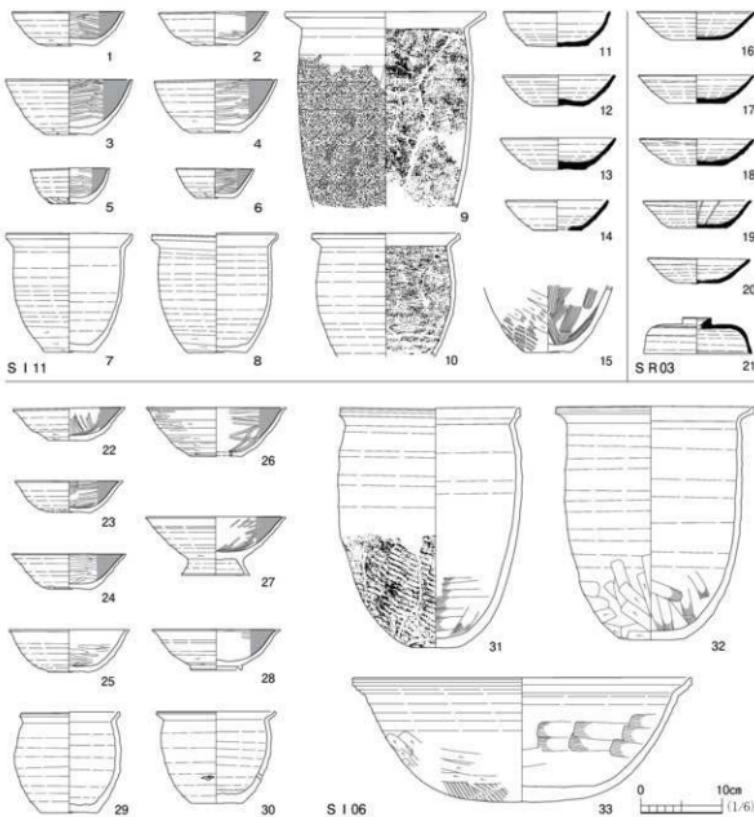


図44 6・11号住居跡、3号須恵器窯跡出土遺物

と思われる。

以上から、S I 11土器群は、土師器杯生産の展開期、または須恵器杯の急減期となる山中分類の第2段階第1群に属すると考えられる。また、土師器長胴甕のA類が確認されることから、9世紀後半代でも比較的古い段階の時期に位置付けられる可能性がある。

S I 06出土資料について 図44-22～25・29、31・32の土師器は、カマドから出土した一括資料である。火床面上に29の小胴甕を倒置し、その上に22～25の杯が重ねられていた。また、31・32は、カマドの両袖の構築材として使用された長胴甕である。S I 06では、出土土器に須恵器がほとんど含まれない。また、S I 06とほぼ同時期と考えられるS I 08(調査II区)では赤焼土器が出土している。

22~25の土師器無台杯は、口縁部がやや外反する所謂「楕」形杯である。堆積土中の出土であるがS I 06の土師器杯には高台付杯27・28もあり、高台部を除いた杯身の口径／底径・器高／底径指數は23の無台杯とほぼ同一である。器高／口径指數から、無台杯は深身の25・26と浅身の22~24のおよそ2種に分類が可能と思われる

(図45)。しかし、器高／底径指數の分布幅はS I 11と比べて顕著な差ではなく、比較的浅身の器形にまとまっている。また、22~28の内面に施されたヘラミガキは、S I 11資料と比較して緩慢である。

31・32の土師器長胴甕は、口径に対し寸詰まりの印象を受ける器形で、いずれも平底である。32の胴部下位にはタタキ痕が明瞭に観察されるが、31ではタタキによる整形痕等は不明である。29の小胴甕は再調整が施されておらず、また底部外面には回転糸切り痕が明瞭に観察される。

S I 06資料を山中分類にあてはめると、概ね以下のとおりになるとと思われる。

- ・杯類…土師器杯：D 2類(図44-23)、E 1~3類(図44-22・24~26)

- ・甕類…土師器長胴甕：D d ⑥類(図44-32)、小胴甕：II e ⑥類

S I 06の土師器杯は、法量の傾向から山中分類の(ト)、または(チ)段階に位置付けられるだろう。また、高台付杯(図44-27・28)が加わる可能性が高い。土師器長胴甕の図44-31は山中分類のA類に位置付けられるが、「D類は成型技法的にはA類」とされており、31・32の違いは胴部下半のタタキ痕の有無である。

以上から、S I 06土器群は、山中分類の第3段階に属すると考えられる。また、土師器長胴甕のD類が確認されることから、第3段階初期の9世紀末葉~10世紀初頭頃の時期が考えられる。

2次調査遺構の時期 S I 06・11の出土土器について概観したが、同一の小段丘面に立地するS I 14・15、SK 37・38出土資料についても、およそS I 06・11の2時期に区分することが可能である。口縁部が短く外反するS I 15の土師器杯の法量指數は、浅身の図44-1・2から底径が縮小化し、かつS I 06土師器杯のエリア内に入るものが主体である(図45)。S I 14の堆積土中の出土であるが、内面黒色処理の図12-1はヘラ切り底の可能性がある土師器杯で、その法量指數はS I 06・11土師器杯の両エリアから大きく離れている。しかし、図12-1は図44-11の法量指數に接近しており、G類からは外れるが須恵器杯との器形的な近似性が窺える。

2次調査で検出した遺構について、出土遺物(山中分類に準拠)から時期区分すると、

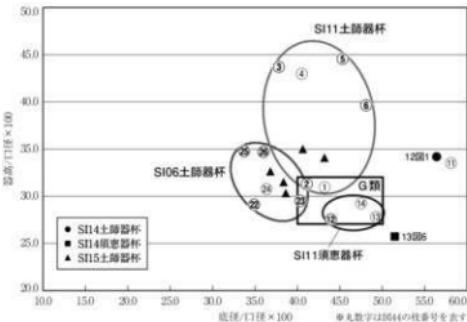


図45 6・11・14・15号住居跡出土杯類指數分布

- ・ S I 11期…S I 14：須恵器杯E類(図13－6)，土師器長胴壺A 2 c ③類(図12－10)，土師器小胴壺II c ③類(図12－7)
- S K 38：土師器長胴壺A類？(図23－3)，須恵器焼台(図22－7)
- ・ S I 06期…S I 15：土師器杯E 2類(図16－1・3・4・7・8・12・13)主体，土師器長胴壺D d ⑤類(図17－10)，小胴壺II e ⑤類(図17－5)，土鉢(図18－8・9)
- S K 37：土師器杯E 2類(図21－11)，土師器長胴壺D d ⑤類(図22－1)，小胴壺II e ①類(図21－13)，土鉢(図21－14)

のように位置付けられ，S I 14・S K 38が9世紀中葉～後半頃，S I 15・S K 37が9世紀末葉～10世紀初頭頃の遺構と推測される。

S I 14・S K 38が該当する山中分類の第2段階は，食膳具から須恵器杯が後退するとされるが，要因の一つとして萩ノ窯窯跡など在地須恵器窯跡の衰退が挙げられている(山中2000)。萩ノ窯窯跡は小田高原遺跡南西の阿賀川対岸に位置し，9世紀前半と推測される半地下式の須恵器窯跡が検出されている。同窯跡では糸切り底の須恵器杯が焼成され，法量等から大戸窯KA 12～MH 19の中間期に位置付けられている(吉田2000)。また，同じ窯跡から山中分類A類の土師器長胴壺が出土している。同一窯で須恵器・土師器が生産されていたことについては，「短期小規模窯では工人間の分離が緩慢だった可能性」が指摘されている(菅原2010)。なお，萩ノ窯窯跡の第1号焼土遺構から，小田高原遺跡と推測されるヘラ切り底の須恵器杯が出土している。

小田高原遺跡の1次調査では，調査II区の北端部で須恵器窯跡S R 01～03を検出している。S R 01～03は遺存状態が非常に悪く，窯構造等の詳細は不明である。出土遺物は須恵器杯が大半であることから，S R 01～03では杯を中心と生産していた可能性がある。須恵器杯は，すべてヘラ切り底である。須恵器杯の形状は概ね山中分類のD～G類に含められ，喜多方市坂田A遺跡の22号住居跡出土資料のような体部が内湾気味の浅身器形が多い。出土須恵器には少量だが小口径の盤も認められており，S R 01～03の操業は萩ノ窯窯跡に続く大戸窯 MH19期に近い時期頃の可能性がある。

9世紀中葉以降，会津地方の食膳具は土師器杯が優勢になることから，S R 01～03の須恵器杯は過渡期の所産であり，やがて需要の変化から淘汰されたように小田高原遺跡や，隣接する西新田窯跡群の須恵器生産が終了するようである。大戸窯跡でもMH 19段階を境に杯の器種割合が急減しており，杯生産の縮小が小田高原遺跡などの短期小規模窯にも波及した可能性がある。

遺構について

調査III区における平安時代の遺構は，1・2次調査をとおして竪穴住居跡4軒・溝跡1条・土坑14基・焼土遺構7基を検出している(表2～6)。竪穴住居跡の平面形は，9世紀中葉頃のものが概ね正方形(S I 11・14)，9世紀末葉頃のものが長方形(S I 06)である。カマドはいずれも角寄りに作られ，S I 14のように燃焼室が外部へ張り出すものもある。S I 06・11のカマドの袖に

は、構築材と推測される土師器長胴甕が据えられていたが、S I 14では石が利用されている。S I 14の火床面には小胴甕が倒置されており、器面が著しく熱を受けていることから支脚の可能性が考えられた。阿賀川対岸の萩ノ窯跡の9世紀後半代とされる第1号住居跡でもカマドから逆位に重ねられた土師器杯・小型甕が出土しており、支脚と推測されている。一方、S I 06の図44-22~25、29については、カマド廃絶に伴う行為と推測されている。しかし、S I 06資料の器面はいずれも強い熱を受けており、黒色処理の消失や爆ぜ痕が顕著に観察される。このことから、S I 06資料もS I 14と同様に支脚であった可能性があり、杯類が重ねられていたことについては、煮炊具の長短に応じて底上げ調整を行ったものと推測することも可能であろう。ただし、会津坂下町能登遺跡の1号住居跡の事例では、土器類に火を受けた痕跡が認められなかつたため、廃棄時の行為と捉えられている。なお、調査Ⅲ区から出土した土師器甕類の中には焼成前の胴部に小さな穴を開けたものがあり(図17-1、図44-30)、通常の用途とは異なつた使われ方をした可能性がある。

S I 15は、当初、堅穴住居跡として調査を実施した遺構である。しかし、カマドの痕跡を明瞭に確認することができず、S I 15の名称は堅穴状遺構とすべきかもしれない。S I 15の特徴としては、地床炉状の焼土面に併い多量の土師器が出土したことである。焼土面の南東部で少量の白色粘土の散布も認められた。類例としては、カマドが付くが宮城県色麻町の日の出山窯跡群C地点西部の第10号堅穴遺構が近い可能性があり、斜面下方の長辺が不明瞭であることや土鉢の出土なども共通している。第10号堅穴遺構は、須恵器・瓦の製作・成形に関係した作業場が想定されている。土鉢は郡山市広網遺跡など土器生産関連等の遺跡で確認されており、土鉢が出土したS I 15・S K 37についても土師器生産に関連した遺構の可能性が推測される。

S K 37・38・42は底面が著しく焼けた単純な土坑で、いわゆる土師器焼成坑の定義(木立1997)に適合しているだろう。また、S G 04~06についても周辺から土師器が出土しており、比較的浅い土師器焼成坑の壁が失われた姿と解釈することも可能であろう。一方、S K 39は壁面のみが赤色に焼けており、土師器焼成坑の定義からは外れる。S K 36も壁に対して底面の焼けが弱い。しかし、S K 36の炭化物層内には土師器片が多量に含まれており、土師器焼成坑の可能性も考えられる。

阿賀川対岸の萩ノ窯遺跡では、同一窯で須恵器・土師器が焼成されていたことから、9世紀前半代、工人の未分化が指摘された。しかし、続く9世紀中葉頃の小田高原遺跡では、土師器の焼成がS K 38等の土坑で行われ、須恵器と土師器の底部切り離し技法の違いから両工人に分化していたと推測することも可能である。そして、会津地方の食膳具から須恵器杯が急減する9世紀後半、小田高原遺跡および周辺部では須恵器生産が廃れるが、土師器生産は継続される。

(香川)

引用・参考文献(五十音順)

【論文等】

- 石田 明夫 1998『会津大戸窯 大戸古窯群保存管理計画書』会津若松市
 石田 明夫 1998『会津、古代そして中世』(会津若松市史2 歴史編2 古代-2・中世-1) 会津若松市
 石田明夫他 2000『会津のやきもの -須恵器から陶磁器まで』(会津若松市史14 分化編1 陶磁器) 会津若松市

- 葛西 勲 2002 「再葬土器棺墓の研究－縄文時代の洗骨葬－」「再葬土器棺墓の研究」刊行会
- 金内 元 2009 「下越地方における縄文時代後期前業－中葉の土器について」『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会
- 木立 雅朗 1997 「古代の土師器生産と焼成遺構」窯跡研究会編 真陽社
- 小林 圭一 1999 「東北地方後期(発付土器)」縄文時代10号
- 小林 圭一 2001 「東北南中の発付土器成立期の様相」第14回縄文セミナー 後期後半の再検討 縄文セミナーの会
- 坂井 秀弥 1989 「古代土師器の製作技法」『新潟考古学談話会会報』第3号 新潟考古学談話会
- 坂井 秀弥 1990 「東北古代ロクロ土師器壺の二系譜と須恵器の関係－丸底の出羽、平底の陸奥－」『新潟考古学談話会会報』第6号 新潟考古学談話会
- 菅原 祥夫 2009 「古代集落内土師器生産の新事例」『研究紀要2008』福島県文化財センター白河館
- 菅原 祥夫 2010 「東北「古代窯業の基礎研究－須恵器窯の技術と系譜」」窯跡研究会編 真陽社
- 本間 宏 1996 「福島県における縄文後期中葉の土器群」『第9回縄文セミナー 後期中葉の諸様相』縄文セミナーの会
- 増子正三他 1999 「印址」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編
- 村田 晃一 1995 「宮城県における10世紀前業の土器」『福島考古』第36号 福島考古学会
- 馬日順一・古川 雄 1970 「一人子遺跡の研究－所謂亀ヶ岡式土器終末期の吟味－」『南北古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 望月 精司 1997 「北陸における古代土器生産体制の変質と展開」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 山岸 英夫 2005 「福島県から十郎内 II式を考える」『東北の考古学』喜洲勧先生還暉記念論文集刊行会
- 山中 雄志 1999 「ロクロ土師器を中心とする会津地方の土器様相(前編)」『福島考古』第40号 福島考古学会
- 山中 雄志 2000 「ロクロ土師器を中心とする会津地方の土器様相(後編)」『福島考古』第41号 福島考古学会
- 山中 雄志 2002 「会津地方におけるロクロ土師器の出現と展開を巡って」『福島考古』第43号 福島考古学会
- 吉田 博行 2000 「萩ノ窓遺跡」『会津坂下町内遺跡発掘調査報告書』会津坂下町教育委員会

【報告書】

- 会津若松市教育委員会 1993 「会津大戸窯 大戸古窯跡群発掘調査報告書」
- 会津若松市教育委員会 1994 「会津大戸窯 大戸古窯跡群発掘調査報告書 遺物編」
- 会津坂下町教育委員会 1976 「袋原道路範囲確認調査概報」
- 会津坂下町教育委員会 1980 「館ノ内遺跡」『館ノ内遺跡』
- 会津坂下町教育委員会 1989 「中丸遺跡、鬼渡りA遺跡」「会津坂下町文化財調査報告書」第15集
- 石川町教育委員会 1998 「福島県指定史跡「鳥内遺跡」」『石川町埋蔵文化財調査報告書』第16集
- 喜多方市教育委員会 1996 「第1編 考古」「喜多方市史」第4巻(資料編1)
- 喜多方市教育委員会 1997 「後谷・長尾地区遺跡発掘調査報告 I 竹田A・B遺跡 村前遺跡」
- 喜多方市教育委員会 1999 「西新田窯跡群」平成10年度市内遺跡発掘調査報告書
- 喜多方市教育委員会 2000 「西新田窯跡群範囲確認試掘調査」『平成11年度市内遺跡発掘調査報告書』
- 喜多方市教育委員会 2001 「西新田窯跡群」「小田高原遺跡」「平成12年度市内遺跡発掘調査報告書」
- 喜多方市教育委員会 2002 「西新田窯跡群範囲確認試掘調査(第三次)」「平成13年度市内遺跡発掘調査報告書」
- 喜多方市教育委員会 2010 「小田高原遺跡試掘調査」『平成21年度市内遺跡発掘調査報告書』
- 塩川町教育委員会 1997 「黒沼コストマ山農業大区画は場整備事業塩川西部地区遺跡発掘調査報告書 銀ノ町A」
- 塩川町教育委員会 1998 「館ノ内遺跡」
- 色麻町教育委員会 1993 「日の出山窯跡群－詳細分布調査とC地点西部の発掘調査－」
- 郡山市教育委員会 1985 「広網遺跡 発掘調査概報」
- 豊栄市教育委員会 1988 「鳥屋遺跡 I・II－新潟県豊栄市鳥屋遺跡発掘調査報告書」
- 新潟県教育委員会 1984 「上新バイパス開通遺跡発掘調査報告」I
- 新潟県教育委員会 2005 「登坂道路 I・江添道路」「日本海沿岸東北自動車道開通発掘調査報告書」X 1
- 新潟古代土器研究会 2004 「越後阿賀北地域の古代土器様相」
- 宮城県多賀市研究所 2010 「日の出山窯跡群」II
- 山都町教育委員会 1983 「上林道路」「福島県耶麻郡山都町文化財調査報告書」第2集
- 山都町教育委員会 1986 「金山遺跡」「福島県耶麻郡山都町文化財調査報告書」第8集
- 山都町教育委員会 1999 「上林道路」「福島県耶麻郡山都町文化財調査報告書」第13集
- 福島県教育委員会 1984 「一斗内遺跡」「母郷地区遺跡調査報告」16
- 福島県教育委員会 1989 「大村薪田遺跡、鬼渡A遺跡、西塙遺跡」「国営会津農業水利事業関連道路調査報告」VI
- 福島県教育委員会 1990 「角間遺跡、高森平A遺跡」「東北横断自動車道遺跡調査報告」8
- 福島県教育委員会 1990 「能登遺跡」「東北横断自動車道遺跡調査報告」10
- 福島県教育委員会 1992 「北平遺跡、鶴沢道南遺跡」「国営会津農業水利事業関連道路調査報告」X IV
- 福島県教育委員会 1996 「大久保F遺跡」「常磐自動車道遺跡調査報告」8

付 章

小田高原遺跡における簡易ボーリング調査 および遺跡立地の形成過程に関する考察

新潟大学災害復興科学研究所
ト部 厚志

はじめに

小田高原遺跡(古墳～奈良・平安時代)は、福島県喜多方市慶徳町の阿賀川右岸の段丘から現河道内の段丘状地形に位置する。ここでは、平成22年度に実施した現河道内の段丘状地形部分における簡易ボーリングによる包含層等の分布調査結果や段丘状地形の形成過程について検討を行った。

遺跡の立地環境

小田高原遺跡は、会津盆地西縁の丘陵部の阿賀川右岸に位置する(図46)。会津盆地は、断層带によって周辺の丘陵部と境された盆地であり、西縁部の断層帶は会津盆地西縁断層帶と呼ばれている(地震調査研究推進本部2005)。また、この断層帶の西側は、盆地に対して相対的に隆起した丘陵部が広く分布し、丘陵部を横断する阿賀川は、狭窄部で蛇行をしながら河成段丘を形成している(図46)。これらの段丘の形成は、丘陵部の隆起運動に加えて、只見川中流域の沼沢火山の火山活動と密接に関係している。

沼沢火山では、約5,000年前と約50,000年前に火碎流を伴う噴火活動を行っており、①火碎流による只見川の堰き止め、②堰き止め部分の決壊、③膨大な量の火山碎屑物による巨大洪水の発生、④火山碎屑物の大規模二次堆積作用による段丘(堆積段丘)形成を引き起こしている(ト部・片岡2003)。このような沼沢火山の火山活動と2次堆積作用によって、只見川下流域や阿賀川流域の段丘を編年することができる。

小田高原遺跡は、標高約200～205mの地形面と現在の阿賀川の流路内に分布する段丘状の地形面に立地している。このうち、約200～205mの地形面は、下位より第三系の基盤、段丘疊層、約50,000年前の沼沢



図46 小田高原遺跡の位置と周辺地域の地形

火山起源の2次堆積物、2次堆積物の風化層、ローム層、(ローム・黒土の漸移層)、黒土層のサクセッションから構成される。よって、この地形面は、約50,000年前に離水した河成段丘であると考えられる(図46)。一方、この段丘崖の直下の阿賀川右岸には、標高約160～190mでやや傾斜した複数の地形面から構成される段丘状の地形が分布する。この地形部分には、平安時代の遺跡が立地する。この地形の対岸に位置するより比高の高い平坦な地形面群は、段丘堆積物の中に約5,000年前の沼沢火山起源の2次堆積物を挟在することから、約5,000年前に離水した段丘面であると判断でき、この地形面よりやや比高の低い地形面での段丘堆積物には沼沢火山起源の2次堆積物が含まれないことから数千年前程度に離水した段丘面であると判断できる。

この平安時代の遺跡が立地する段丘状の地形の形成年代に関する考察は後述するが、対岸の河成段丘との比高や地形形成の編年からみると数千年前より新しい時代に形成された(形成され始めた)地形であると判断できる。

簡易ボーリングによる調査

阿賀川右岸の平安時代の遺跡が立地する段丘状の地形部では、事前の喜多方市の調査において、広い範囲にわたって遺跡(遺物包含層)が広がり、かつ、複数の遺物包含層の存在が推定されていた。よって、平成22年度は、全体の層序の把握と遺跡(遺物包含層)の広がり、遺物包含層の層数の確認を行う目的で、重機によるトレンチ調査と並行して、簡易ボーリングによって遺物包含層の分布の確認を行った。

簡易ボーリングは、自走式で試料採取が効率的に実施できる機材(エコプローブ)を用いた(図48)。エコプローブは、サンプラーを回転+油圧+振動で打ち込み、1mごとにオールコア試料を採取するもので、今回の調査では口径86mmのサンプラーを用いて、1地点あたり深度3～6mまでの試料採取を行った。掘削は、3日間の作業で20地点において実施した(図47)。

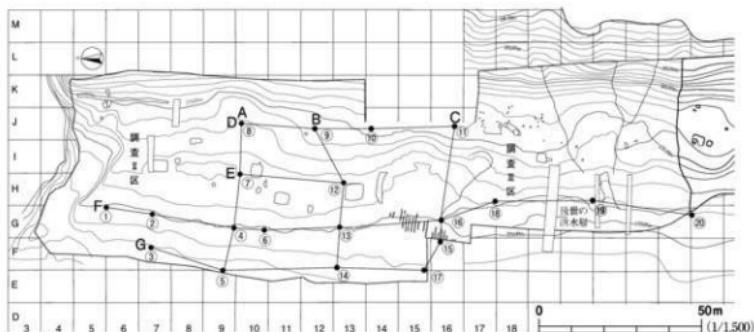


図47 簡易ボーリングの実施地点

各地点の層相と対比

各地点において採取したコア試料は、現地で半剖して層相、色調、遺物包含層の認定等を行った。特に、遺物包含層(土壤化した遺物包含層相当層)の認定は、トレンチ壁面、グリットのセクション面や露頭における層相や色調をもとに、コア試料での層位の同定を行った。

(1) コアでの層相区分

例えば、No.1コアの層相は、砂質な層相とやや土壤化した層相を基準として区分すると、ユニット①(深度0 - 1.40m)：砂質、ユニット②-1(深度1.40 - 1.66m)：土壤化、ユニット②-2(深度1.66 - 2.35m)：砂質、ユニット③-1(深度2.35 - 2.51m)：土壤化、ユニット③-2(深度2.51 - 3.00m)：砂質に区分できる(図49)。さらにユニット内を細分すると、ユニット①は、上位より深度0 - 0.28m: 砂質シルト(現表土)、深度0.28 - 0.63m: 砂質シルト、深度0.63 - 0.65m: 極細粒砂、深度0.65 - 0.69m: 砂質シルト、深度0.69 - 0.72m: 極細粒～細粒砂、深度0.72 - 0.75m: やや砂質なシルト、深度0.77 - 0.78m: 極細粒砂、深度0.78 - 1.17m: 砂質シルト、深度1.17 - 1.28m: 細粒～中粒砂から細粒砂に正級化、深度1.28 - 1.36m: 砂質シルト、深度1.36 - 1.40m: 細粒～中



図48 簡易ボーリング機器

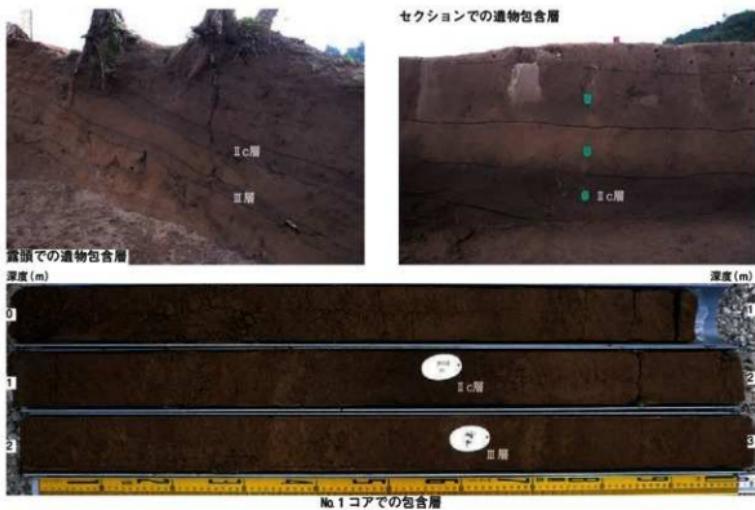


図49 遺物包含層との対比

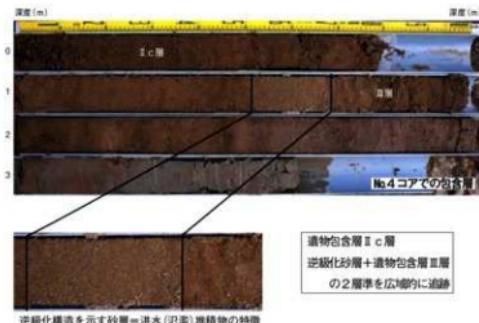


図50 逆級化砂層の特徴

ユニット②-1（深度1.40-1.66m）は、やや茶色で弱く斑紋状構造がみられることから土壌化しており、炭片を含むことや露頭、セクションとの層位関係から、遺物包含層IIc層に対比できる。ユニット②-2は、深度1.66-2.32m：砂質シルト、深度2.32-2.35m：やや淘汰のよい極細粒～細粒砂から構成される。下位のやや淘汰のよい砂層は、No.1コアでは3cm程度の層厚であるが、他の地点では層厚が約10-15cmであり、砂層の基底が細粒～中粒砂で上位が中粒～細粒砂に逆級化する特徴を示す（図50）。逆級化する砂層は、洪水時の氾濫流による堆積構造の特徴である（伊勢屋1982）。ユニット②-2は典型的な洪水氾濫流の堆積相を示しており、ユニット②-2からユニット②-1への一連の層相変化は、洪水による氾濫から洪水の減衰と堆積面の形成、洪水が減衰して堆積した堆積物の土壌化（遺跡がある場合は遺物包含層）を示している。

ユニット③-1（深度2.35-2.51m）は、やや茶色で弱く斑紋状構造がみられることから土壌化しており、炭片を含むことや露頭、セクションとの層位関係から、遺物包含層III層に対比できる。ユニット③-2は、深度2.51-2.52m：細粒砂、深度2.52-2.59m：砂質シルト、深度2.59-2.63m：中粒～細粒砂、深度2.63-2.70m：砂質シルト、深度2.70-2.72m：中粒～細粒砂、深度2.72-2.77m：砂質シルト、深度2.77-2.78m：極細粒砂、深度2.78-2.85m：砂質シルト、深度2.85-2.92m：極細粒砂、深度2.92-3.00m：砂質シルトから構成される。これらの層相は、やや弱い水流の洪水氾濫による堆積相を示しており、ユニット②と同様に、ユニット③-2からユニット③-1への一連の層相変化は、洪水による氾濫から洪水の減衰と堆積面の形成、洪水が減衰して堆積した堆積物の土壌化（遺跡がある場合は遺物包含層）を示している。No.1コアでみられるような層相変化は、遺跡地内での広く確認できる。

（2）全体の層相

洪水による砂層の形成と洪水の減衰による堆積面の形成、表層部の土壌化を基本的な層相変化として、各地点における層相を河川に対して直交方向の断面A,B,Cと平行方向の断面D,E,F,Gに整理した（図51・52）。なお、遺物包含層の認定と対比については、確実なものを実線で示し

粒砂から構成される。ユニット①の全体の層相は、下位でやや粗粒な砂の薄層、上位では細粒な砂の薄層を挟んでおり、下位の土壌化したユニットからの層相変化であることから、土壌化していた河畔にやや水流の弱い流れ（水深の浅い洪水流）が到達し、ユニット①内でも上位に向かって流速を減じながら堆積していくことを示している。

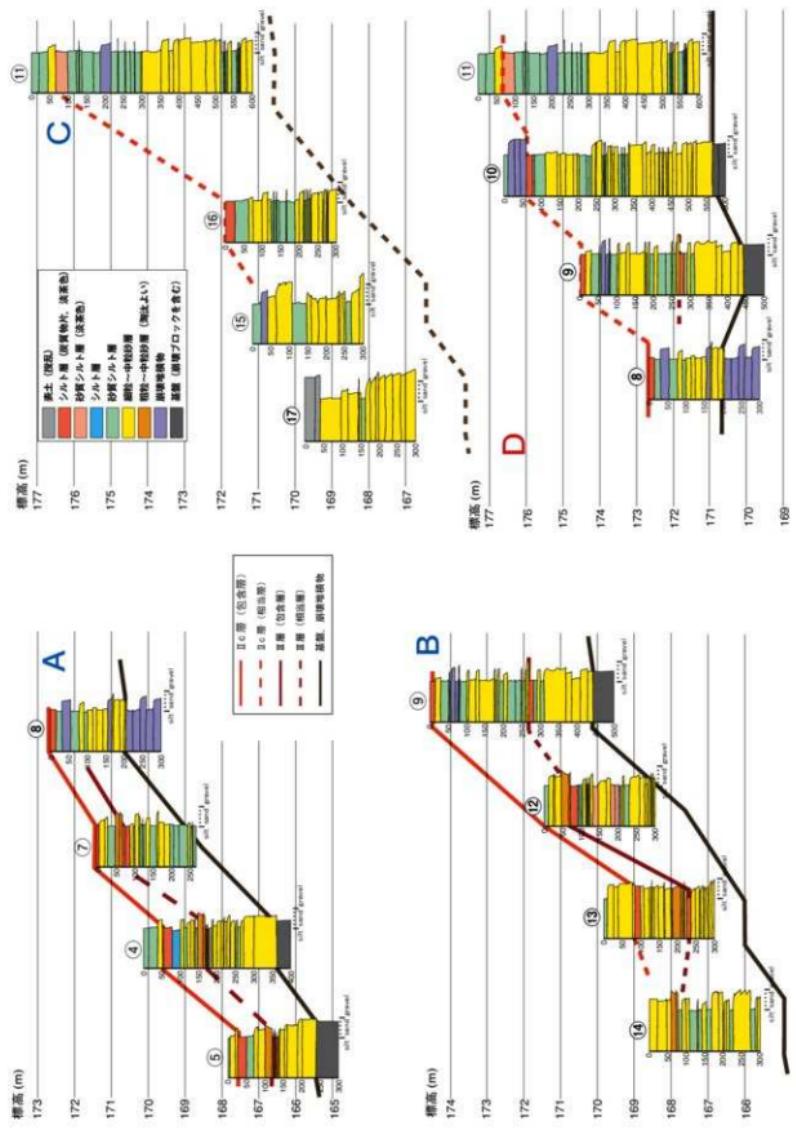


図51 断面A～D

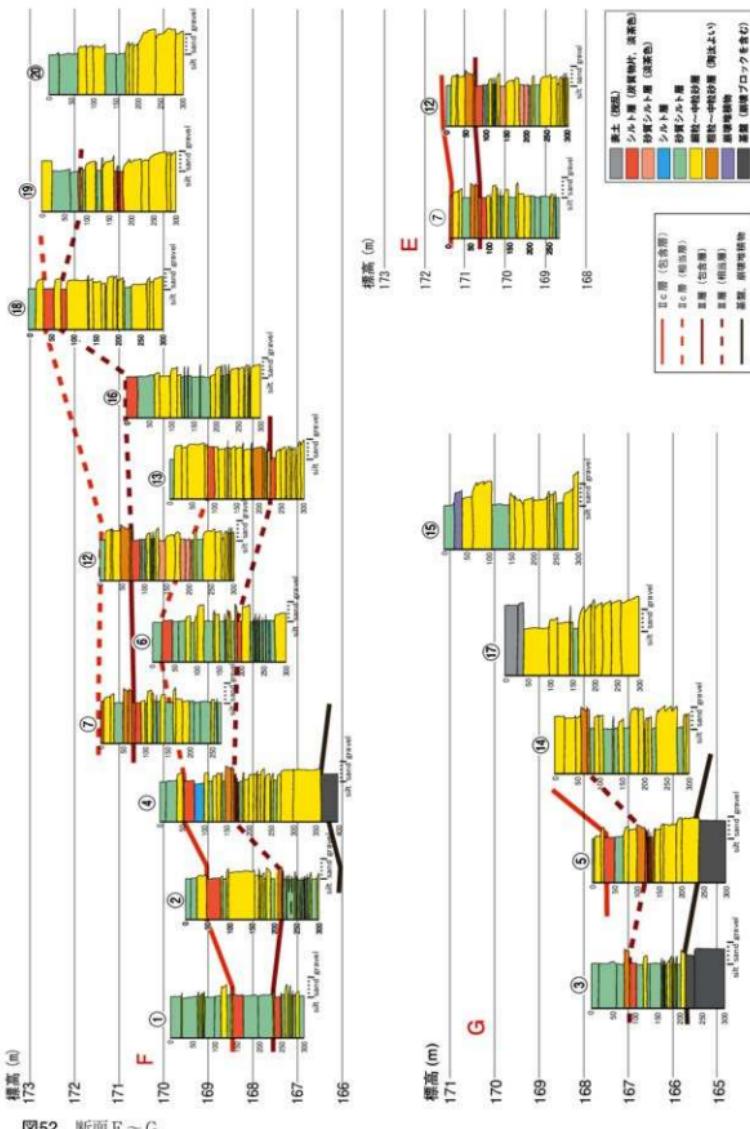


図52 断面E～G

ユニット境界として土壤化しているが遺物包含層として認められない部分を破線で示している。

(3) 層相変化の特徴

遺跡の立地地盤の形成に対して堆積相の認定は重要である。各地点のコアの層相の検討から判断すると、遺跡立地地盤の層相は、一般的な基底礫層→砂層→ローム層→黒土層への変化するような段丘堆積物のセクションではなく、流路内における洪水堆積物の累重と側方変化によって構成されている。以下に、断面Aを例として層相変化について述べる(図53)。

断面Aは、河川流路に直交する方向でNo.5が流路側、No.8が斜面側に位置する。各コアは、遺物包含層Ⅱc層に近い層準から深度3~4mまで掘削したもので、Ⅱc層の分布する地形は、平坦ではなく流路方向に低くなる斜面であることがわかる。このうちNo.5、4、7コアの層相は、No.1コアの記載で前述したように、2回の洪水堆積物→洪水の減衰→堆積面の形成と土壤化の層相変化を示しているが、それぞれのユニットは水平に堆積していない。これらのユニットの標高の相違は、洪水時の水深(流速)を反映して側方へ層相が変化した様子を示している。例えば、下位のユニットでは、No.5は粗粒砂層で砂層単層の層厚も厚いのに対して、No.4は中粒砂層を主体として、単層の層厚も薄くなっている。

さらに、No.7は砂質シルトと細粒砂の互層となり、砂層の層厚も薄くなっている。このように、No.5からNo.7での下位のユニットは、上方細粒化・薄層化し、また、河岸に向けて側方に細粒化している。また、上位のユニットもNo.5からNo.7にかけて、上方細粒化・薄層化と河岸に向けて側方に細粒化しており、ユニット全体に層厚も側方に薄くなっている。

このように、流路での洪水堆積物は側方に対して水平堆積ではなく、水深に対応した層相の変化

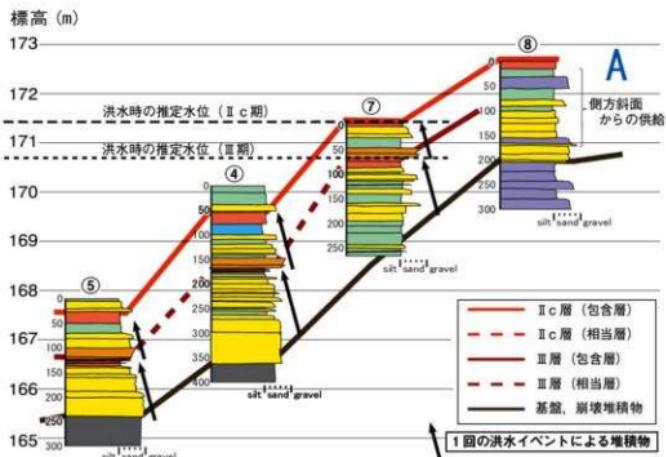


図53 断面Aにおける層相変化

を示している。また、洪水水位の低下(洪水の減衰)によって地形面が形成されて地表となり、次の洪水まである程度の時間間隔があったため、土壤化したものと考えられる。2つのユニットを形成した洪水時の最高水位は、標高171m前後であったものと推定できる。なお、これらのユニットは、露頭観察でも明らかなように新しい時代の堆積ユニットが流路側にシフトする形態を示している(堆積物の側方付加)。

これらの洪水堆積物の基底は、第三系の基盤(基盤の崩壊によりブロック化した崩壊堆積物)であり、斜面に近く標高の高いNo.8コアでは、ブロック状のシルト礫を含む崩壊起源の堆積物を多く挟在する。No.8コアは、若干の本流の洪水起源の堆積物も挟在されているものと思われるが、細粒砂層の薄層をふくめて、側方の斜面からもたらされた堆積物であると推定できる。

断面B(図51)は、河川流路に直交する方向でNo.14が流路側、No.9が斜面側に位置する。各コアは、調査面から深度3~5mまで掘削した。このうちNo.13,12では断面Aと同様に、2回の洪水に起因したユニットが認められる。流路側のNo.14は、地形的に1段低い地形面の堆積物で、IIc包含層より新規の堆積物である可能性がある。また、No.9は、側方の斜面からの崖錐性堆積物の薄層を含み、全体的に側方の斜面から堆積物であると考えられる。

断面C(図51)は、河川流路に直交する方向でNo.17が流路側、No.11が斜面側に位置する。このうちNo.16では、IIc層包含層の層位に相当するやや土壤化した堆積物が認められるが、III層包含層に相当する層位は不明である。また、流路側のNo.15,17は地形面やトレンチセクションとの対比から、No.17は新規の流路、No.15は側方斜面につながる流路(側方からの小規模流路とその埋積堆積物)に相当する可能性がある。No.11は、No.8,9と同様に側方の斜面からの崖錐性堆積物の薄層を含み、全体的に側方の斜面から堆積物であると考えられる。

断面D(図51)は、河川流路に平行した方向で斜面に近い場所において下流側のNo.8から上流側のNo.11の層相を示した。掘削深度は、3~6mである。すでに述べたように斜面沿いは、主に崩壊起源の堆積物や斜面側から供給された堆積物から構成される。

断面E(図52)は、断面Aおよび断面Bで述べたように2回の洪水ユニットと2つの遺物包含層(遺物包含層相当層)が認められる。

断面F(図52)は、河川に平行な方向で標高170m程度の地形面と標高172m程度の地形面に沿って作成したもので、遺物包含層や遺物包含層に相当層するやや土壤化した層位が、連続して確認できる。同一層位は、下流側に向かって緩く傾斜しているが、流路に直交方向の断面と比較すると傾斜は緩く連続した跡跡が可能である。なお、各ユニットの層相はやや多様性があり、流下方向に向かっても同一の層相(同じ砂層など)が連続して分布しているわけではないことを示している。河川性の堆積物の層位対比に際しては、単一の砂層の跡跡や対比ではなく、1回の洪水に起因した層相変化をユニットとしてとらえ、ユニットの境界を対比していく方法が有効となる。

断面G(図52)は、現在の河川流路に近く調査地域のなかでも標高の低い地点における層相を示したもので、地形面の区分や層相の特徴から、IIc包含層より新規の堆積物などである。

(4) 遺跡立地地盤の形成過程

① 立地地盤の成因

平成22年度調査範囲でのトレンチ調査による層相観察や簡易ボーリング調査による層相変化から、小田高原遺跡の阿賀川流路近傍範囲(平安時代)の遺跡立地について検討する。簡易ボーリングの結果から、遺物包含層を挟む地層は、阿賀川の洪水起源の堆積物であることが明らかとなった(図51・52)。これら



図54 調査II区下流側の試掘トレンチ

の洪水起源の堆積物の基底は、風化した第三系の堆積岩やシルト疊を含む崩壊起源の堆積物であることが明らかとなった。これらの基底は、現在の流路近傍で標高165m程度で、斜面側では標高170m以上を示し平坦な地形面ではない。

また、平成22年調査区の下流地点での試掘トレンチにおける観察では、洪水堆積物相の下位に堆積岩の崩壊ブロックの層相が認められており(図54)、コア試料で認められる風化した堆積岩は、崩壊ブロックの一部である可能性もある。これらのことから洪水堆積物相の基底は、広い範囲で溪岸の斜面崩壊堆積物であると推定できる。このような比較的大規模な溪岸の崩壊は、2004年の新潟県中越地震や2008年の岩手・宮城内陸地震で多く発生しており、地震による斜面崩壊の特徴くなっている。ここでの崩壊堆積物も第三系の堆積岩(崖の基盤)の大きなブロックを含んでおり、降雨等による崖の表層崩壊ではなく、やや深部の基盤部分まで崩壊したことを示していることから地震によって阿賀川の流路内に崩壊したものであると考えられる。よって遺跡の立地する段丘状の地形面は、一般的な河成段丘ではなく、流路内に崩壊した堆積物に洪水時の水位上昇により堆積物が累重・付加した堆積体であると考えられる。

② 遺物包含層を含む地層の崩壊

平成22年度調査区のトレンチにおいて、IIc包含層を含む地層が傾動していた(図55)。この要因について検討する。図55のトレンチでは、ややすべり面が不明瞭であるが変形の状況から判断すると、包含層(相当層)を含む地層が円弧すべりを起こしているものと推定でき



図55 遺物包含層を含む地層の円弧すべり



図56 基底部の液状化による地層の変形

砂層の液状化による円弧すべりである可能性が高い(河畔部の液状化による流路方向へのすべり)。図55の地点では、明瞭な液状化相は確認できなかったが、地震時の液状化では上載過重荷重が少なくとも容易に地すべりが発生することから、図55のような地すべりは、地震による液状化に付随した変形である可能性が高い。また、図56の地点でも傾動した地層が確認されており、地震による液状化に起因した地層の変形が記録されている可能性が高い。

③ 遺跡立地地盤の形成と会津盆地西縁断層の活動

遺跡立地地盤の形成に関係して、阿賀川の地震に起因した流路内の斜面崩壊によって立地地盤の基礎が構成され、平安時代の遺跡立地後にも地震による地すべりが発生している。遺跡近傍での地震活動としては、可能性が高いものとして会津盆地西縁断層帶の活動があげられる。

会津盆地西縁断層帶は、会津盆地と西側の丘陵部の境界部に推定されている断層帶で、長さ約34km、最新の活動時期は1611年、活動周期は約7,600～9,600年とされている(地震調査研究推進本部、2005)。しかし、断層帶全体の活動履歴には反映されていないが、盆地西縁の新宮地区のトレンチ調査では、約1600～1700年前の地層の変形を発見している。この成果を取り入れると、会津盆地西縁断層帶の阿賀川付近の活動履歴は、最新の活動が1611年の慶長会津地震でその1つ前の活動が約1600～1700年前(4世紀)である可能性がある。

この活動履歴に従うと、遺跡立地以前の斜面崩壊を伴う地震活動が4世紀で、平安時代の遺跡立地後の地すべりが1611年と仮定することができる。この仮定を論証するためには、遺跡立地前の崩壊堆積物と遺跡立地後の地すべりの年代を発掘調査から推定する必要がある。

今後の課題

平成23年度調査成果を合わせた遺跡立地地域の層序を確立し、河川性堆積物による立地地盤の層相変化や層序区分の手法について明らかにする必要がある。これによって、河川流路内の崩壊堆積物に起因した地盤の形成という新たなタイプの地盤形成過程を模式化することができる。また、

一般に地すべりは、重力性の移動によって引き起こされる。しかし、遺跡立地地盤は、河道内に崩落した斜面崩壊堆積物を基底として、洪水時に累重した砂質堆積物から構成されているため、遺物包含層を含む地層を重力的に移動させるための上載過重は発生しない。このため、円弧すべり(地すべり)の要因は上載過重を発生させる

ような降雨によるものではなく、基底

崩壊堆積物や地すべりイベントの年代を明らかにすることで、地震活動との関連性を検証することができる。

さらに、遺跡セクションにおける洪水による堆積層の形成と洪水水位の関係から、阿賀川の超過洪水の頻度と規模(標高)の解明することができる。平成22年度の検討では、超過洪水の水位は標高172m程度で頻度は2層準の包含層の年代となり、超過洪水の頻度は比較的高い可能性がある。

参考文献

- 伊勢屋ふじこ 1982 「茨城県、桜川における逆グレーディングをした洪水堆積物の成因」『地理学評論』55 pp.597-613.
ト部厚志・片岡香子 2003 「沼沢火山5ka噴火後の只見川・阿賀野川流域における火砕物の二次堆積過程と地形形成(演旨)」
「日本地質学会第110年学術大会講演要旨」p.152.
地震調査研究推進本部地震調査委員会 2005 「会津盆地西縁・東縁断層帯の長期評価について」 p.25.

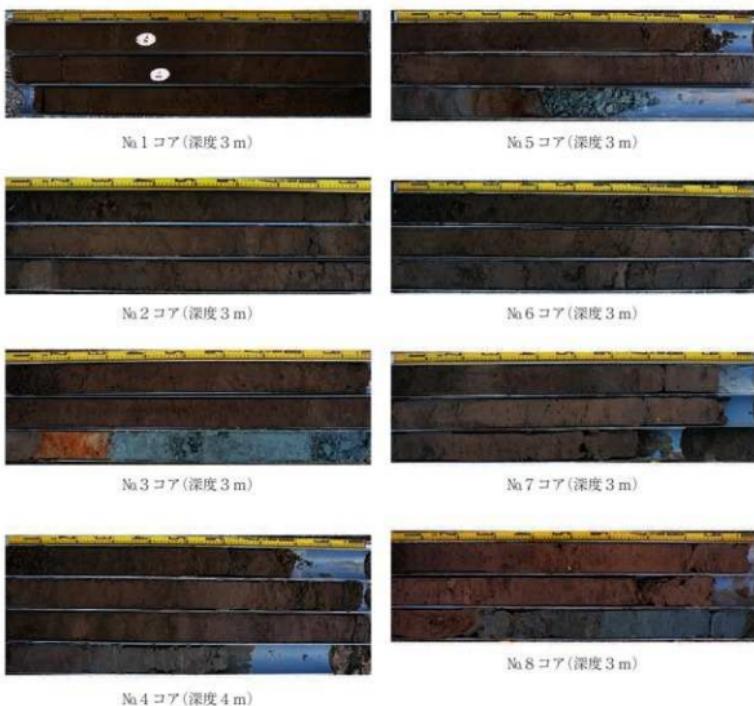


図57 No.1～8コア



図58 No.9～20コア

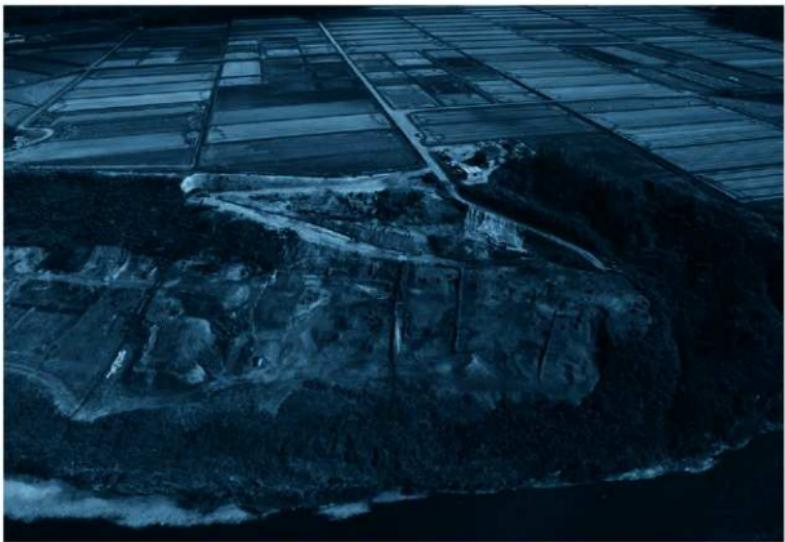
写 真 図 版



1 調査区全景（南西から）



2 調査区全景（北から）



3 調査区全景（西から）



4 調査区近景（北から）



5 J 30 G 基本土層 (B - B' 斜面上位) (北西から)



6 J 30 G 基本土層 (B - B' 斜面下位) (北から)



7 H・I 33 G 基本土層（C-C'）（北東から）



8 K 35 G 基本土層（D-D'）（北西から）



9 14号住居跡（北から）



10 14号住居跡細部



a 土器（北から）

b 葵物出土状況（北から）

c カマド（北から）

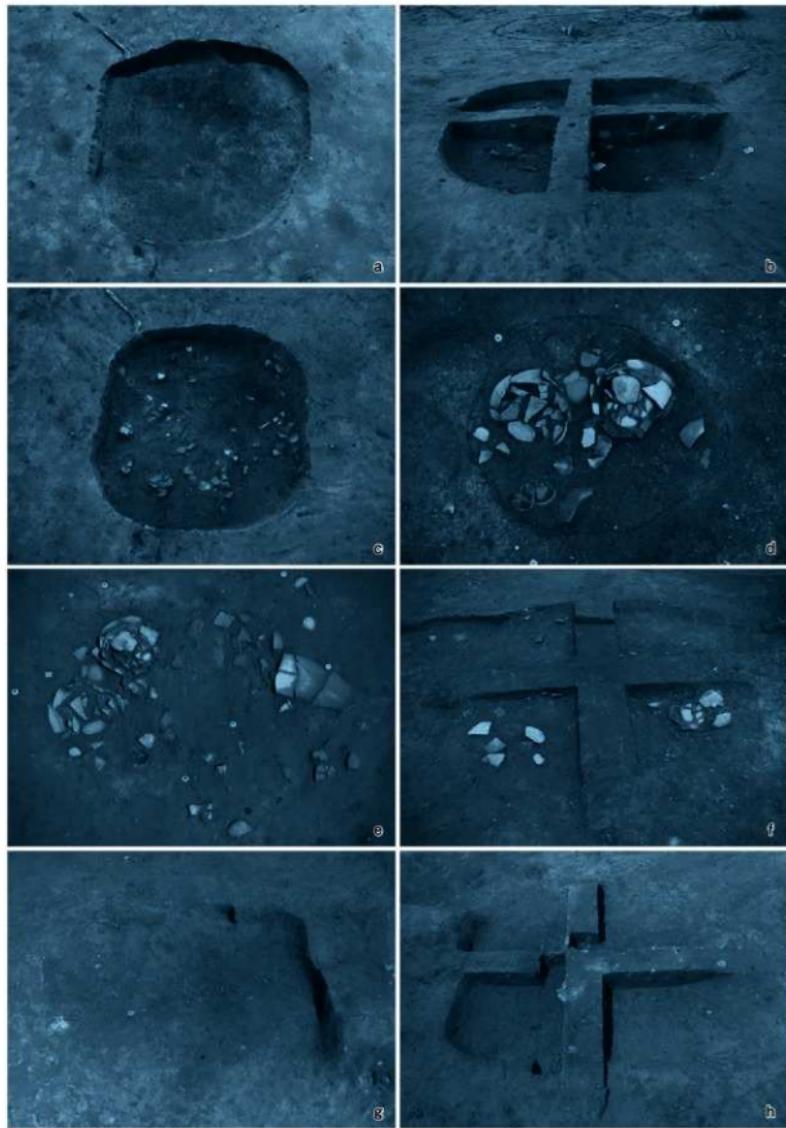


11 15号住居跡（北から）



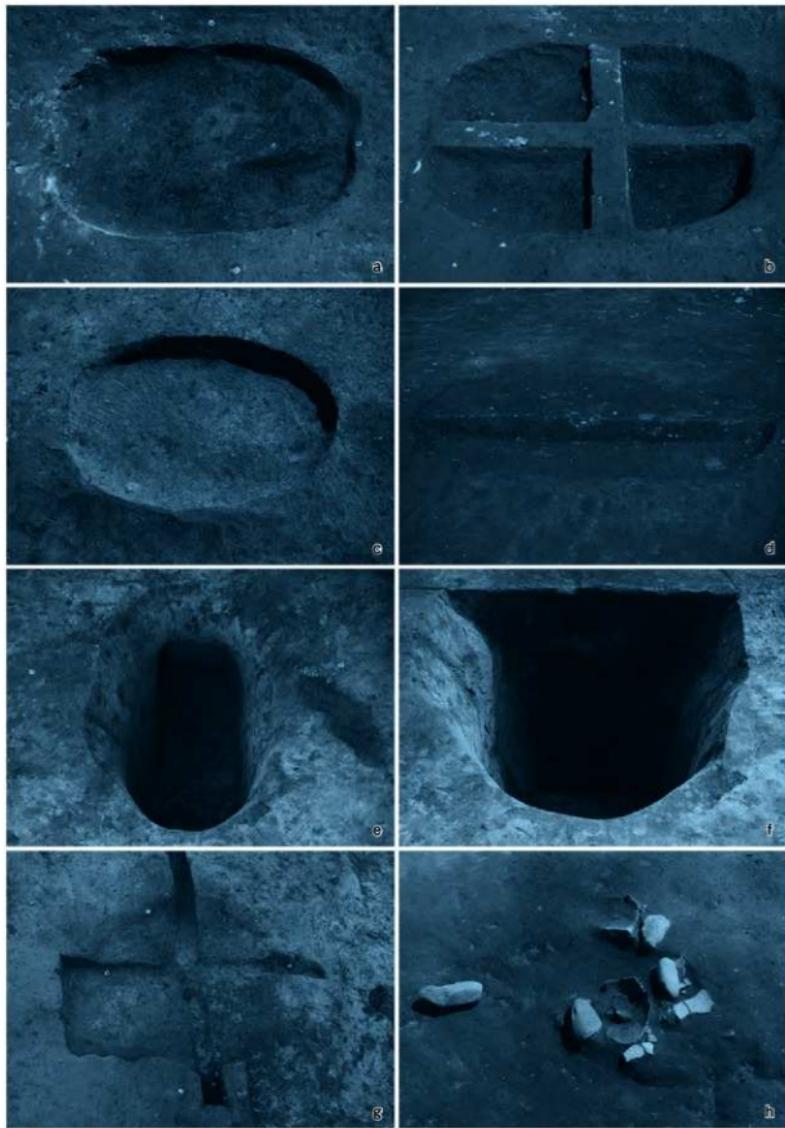
12 15号住居跡細部

a 土器（南西から）
c 遺物出土状況（北西から）
b 土器（北西から）
d 石路（北西から）



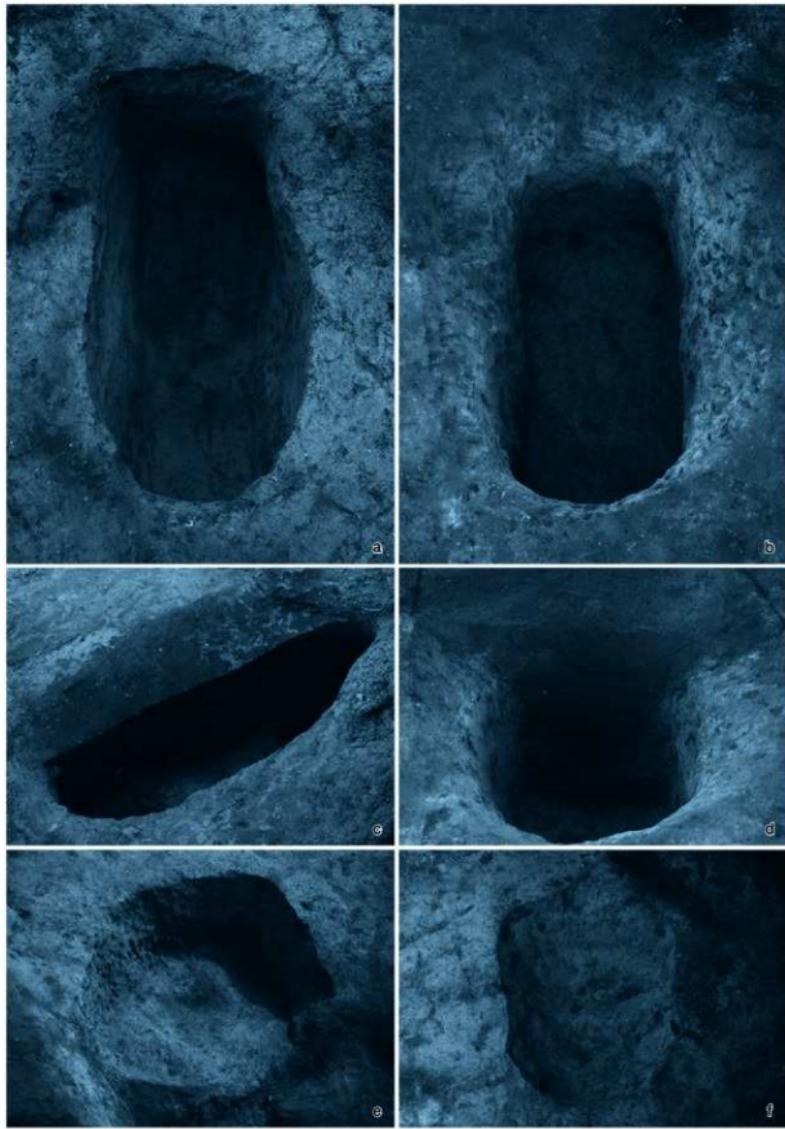
13 土坑（1）

a 36号土坑（北西から）	b 36号土坑断面（南西から）
c 36号土坑遺物出土状況（北西から）	d 37号土坑（西から）
e 37号土坑遺物出土状況（北西から）	f 37号土坑断面（南から）
g 38号土坑（西から）	h 38号土坑断面（東から）



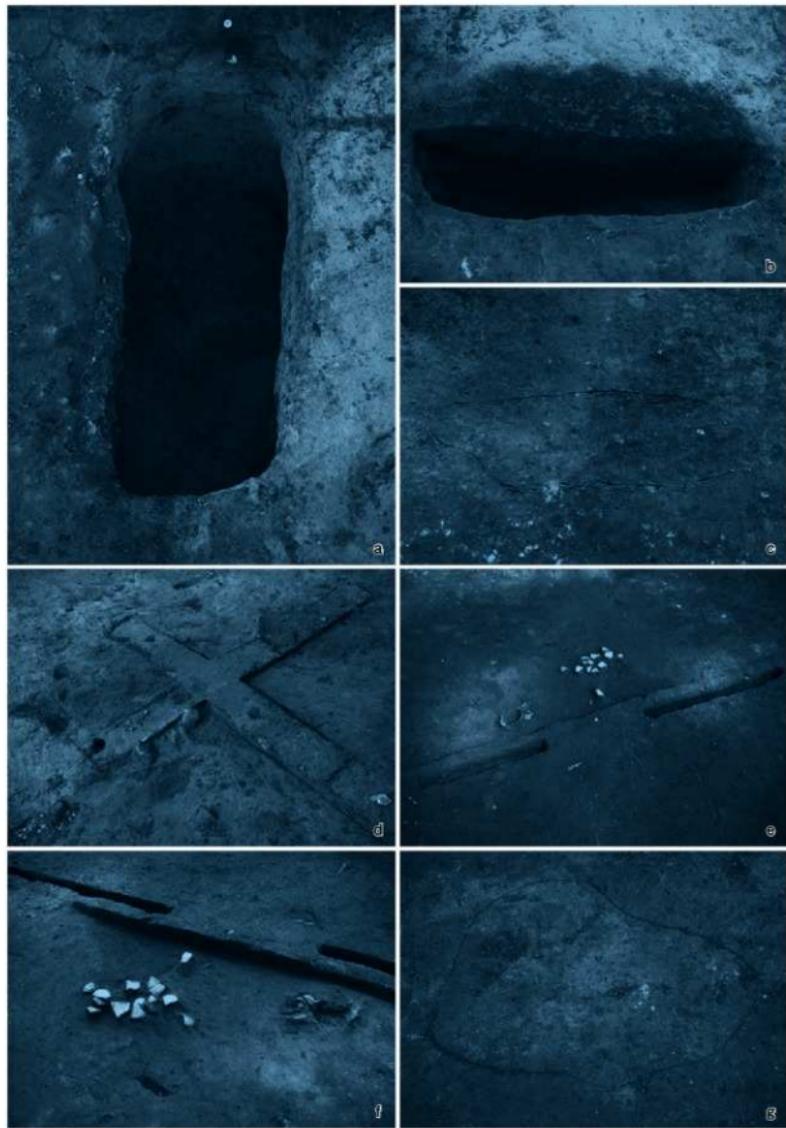
a 39号土坑 (西から)
c 40号土坑 (西から)
e 41号土坑 (北西から)
g 42号土坑 (北から)

b 39号土坑断面 (西から)
d 40号土坑断面 (西から)
f 41号土坑断面 (北西から)
h 42号土坑遺物出土状況 (西から)



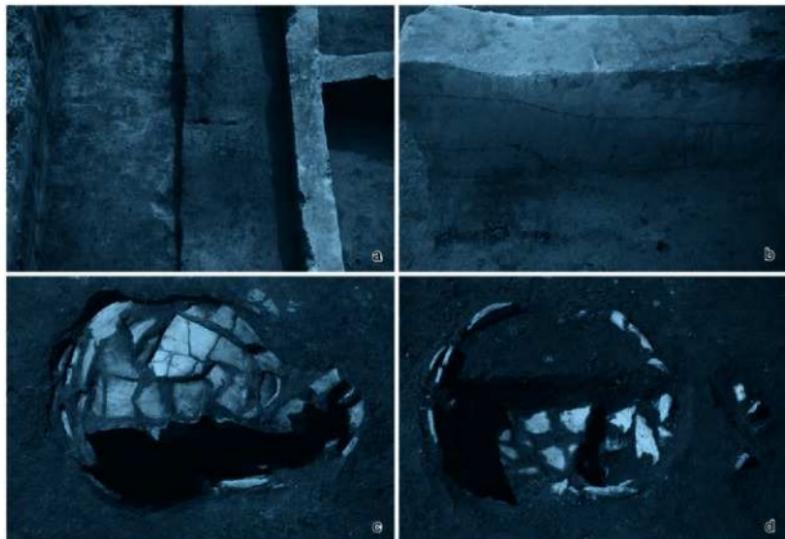
15 土坑（3）

- a 43号土坑（北西から）
c 43号土坑断面（南西から）
e 45号土坑（西から）
b 44号土坑（北西から）
d 44号土坑断面（北西から）
f 46号土坑（西から）



16 土坑（4）、焼土遺構（1）

- | | |
|------------------|----------------------|
| a 47号土坑（西から） | b 47号土坑断面（北から） |
| c 2号焼土遺構（西から） | d 3号焼土遺構断面（南から） |
| e 4・5号焼土遺構（北西から） | f 4・5号焼土遺構出土状況（北東から） |
| g 6号焼土遺構（西から） | |

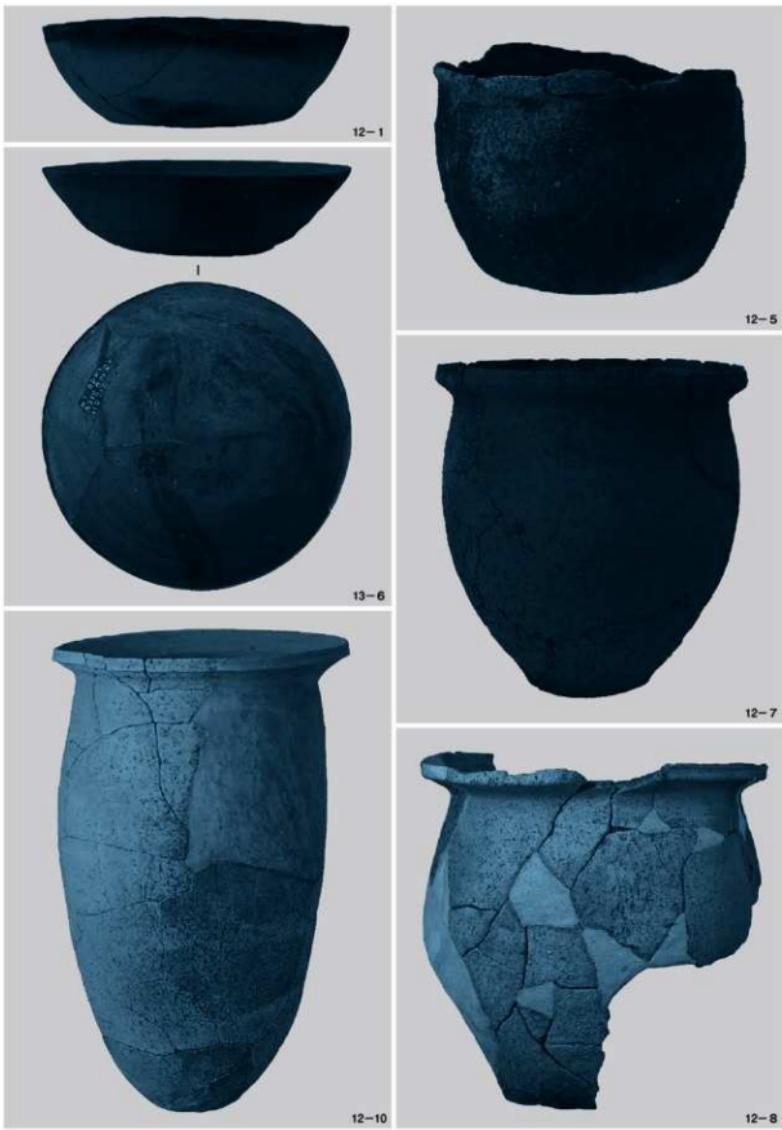


17 焼土遺構（2）、1号土器埋設遺構

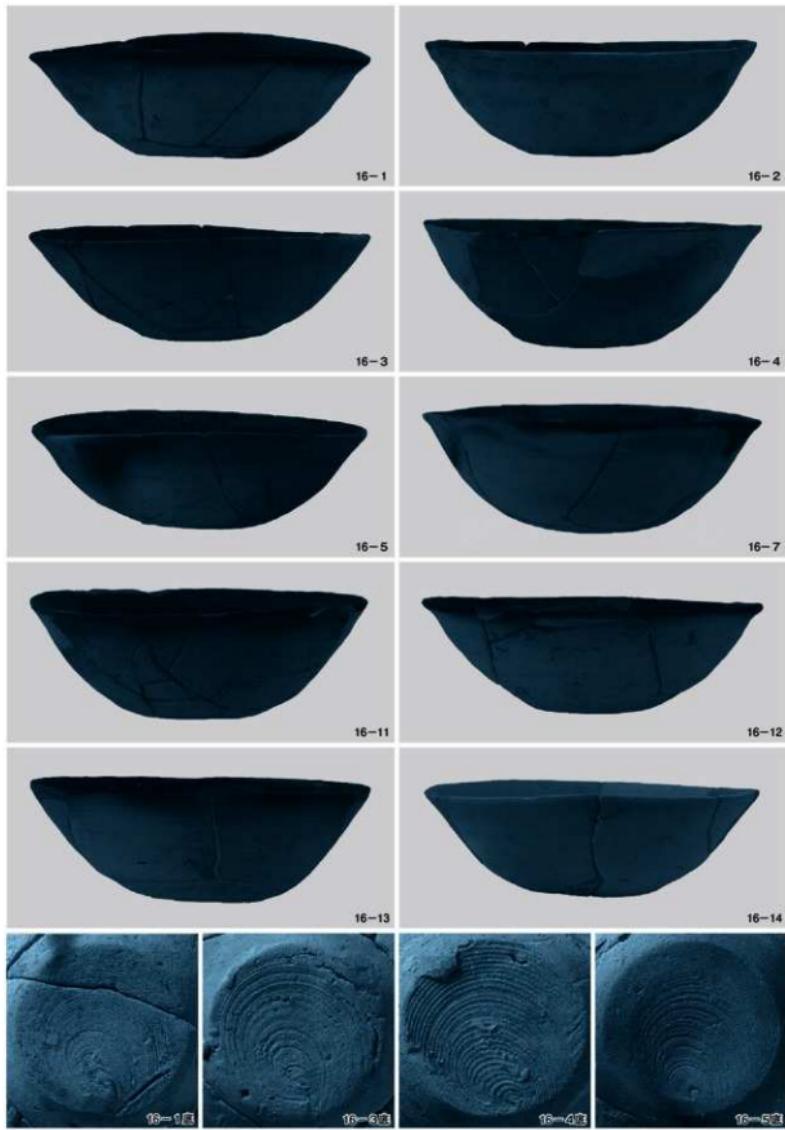
a 7号焼土造構（西から） b 7号焼土造構断面（西から）
c 1号土器埋設遺構（南東から） d 1号土器埋設遺構断面（南東から）



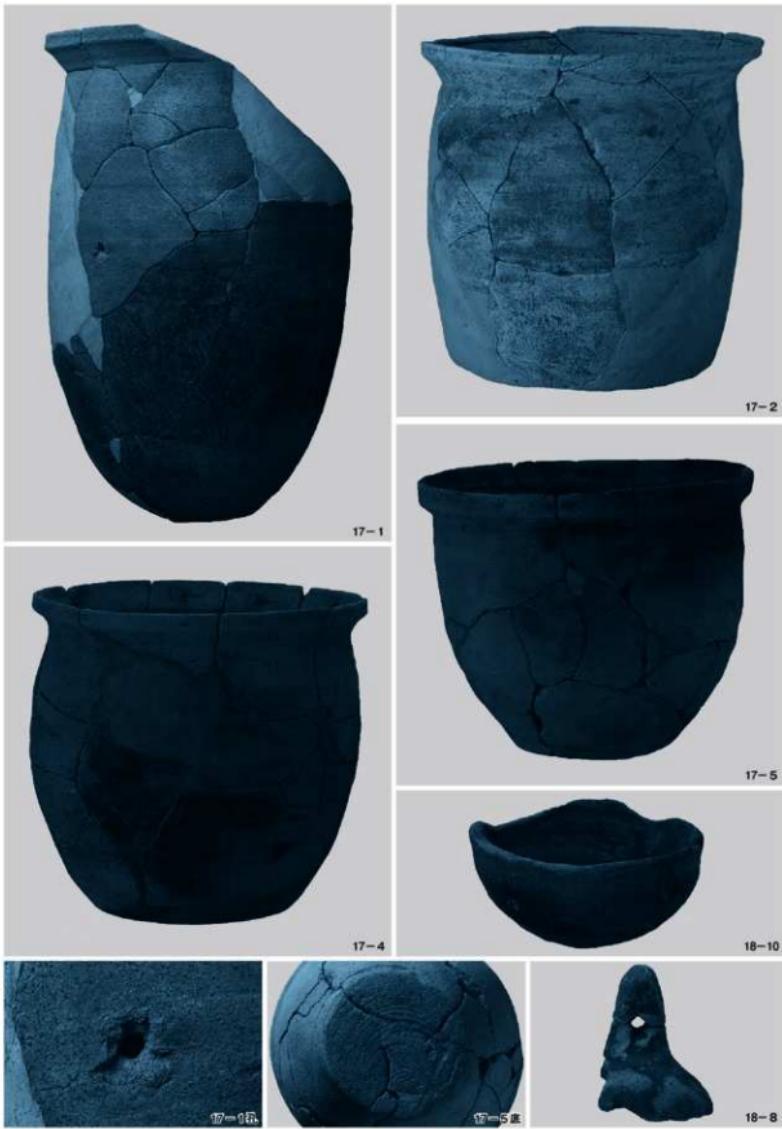
18 石器集中地点（南西から）



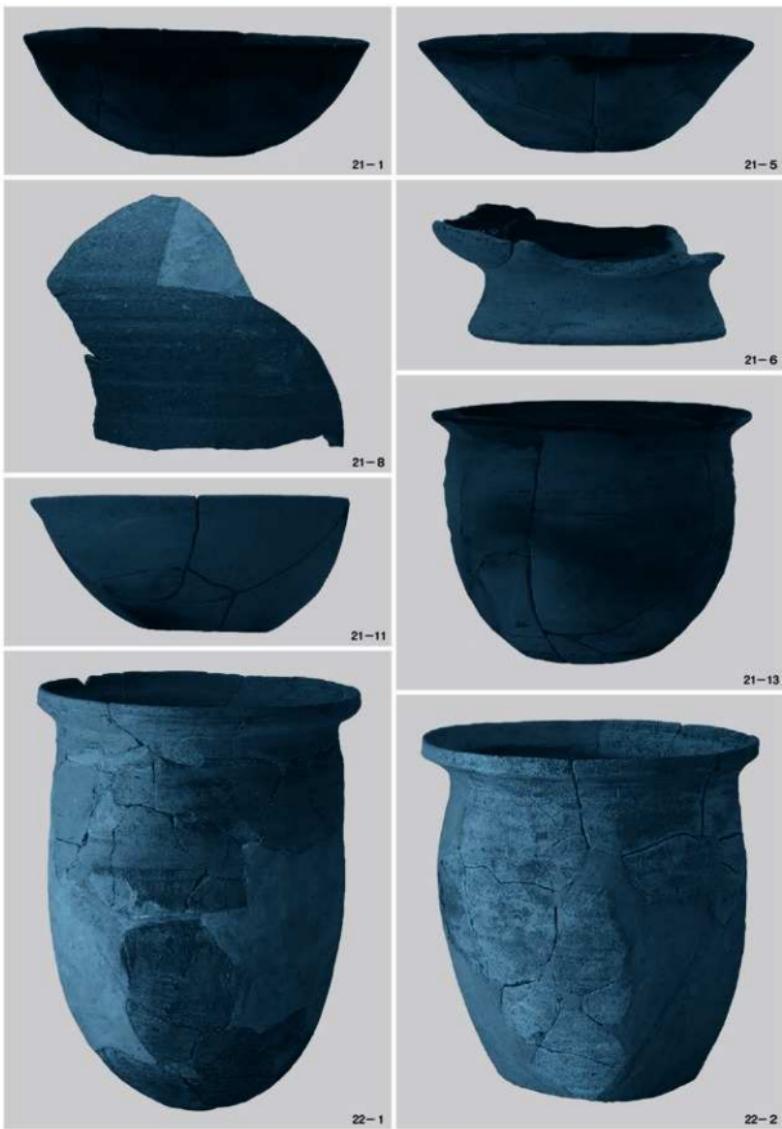
19 14号住居跡出土遺物



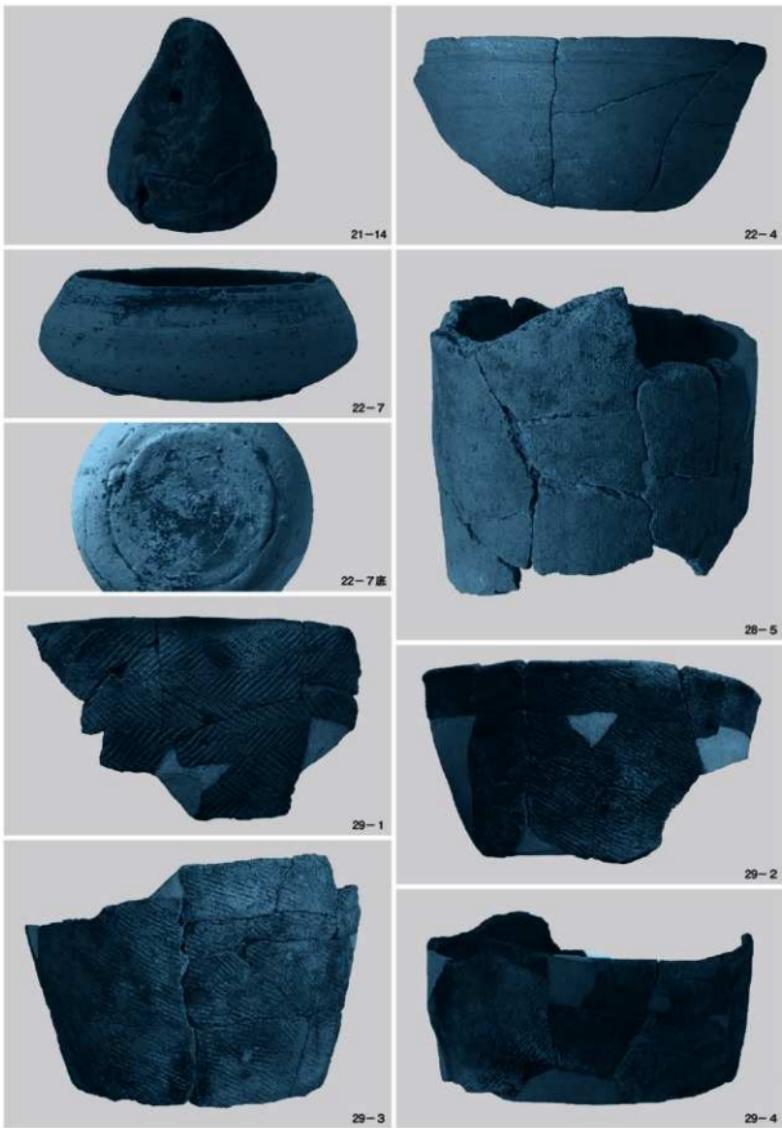
20 15号住居跡出土遺物（1）



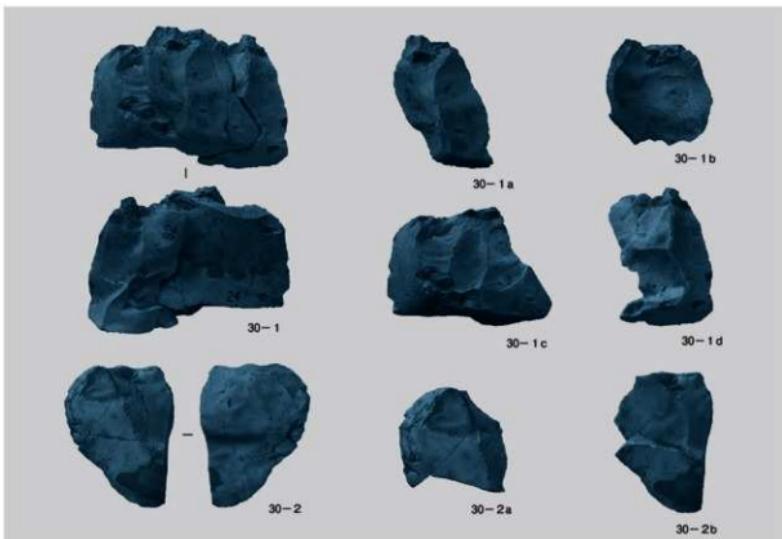
21 15号住居跡出土遺物（2）



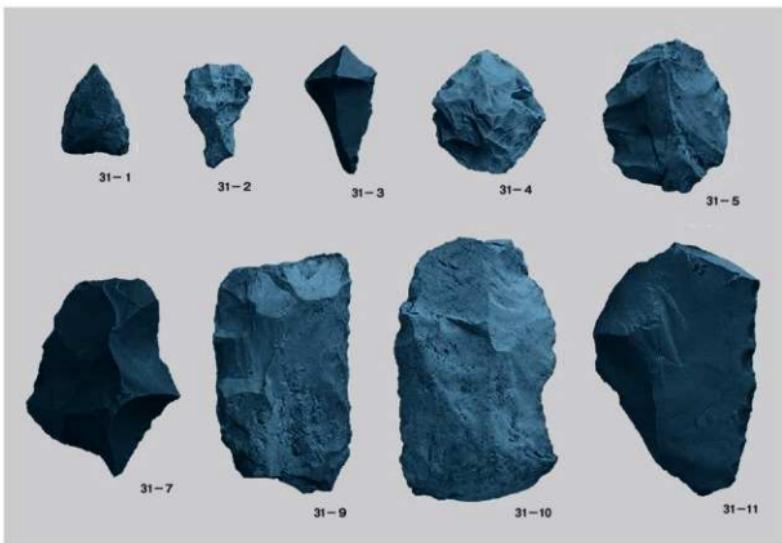
22 土坑出土遗物



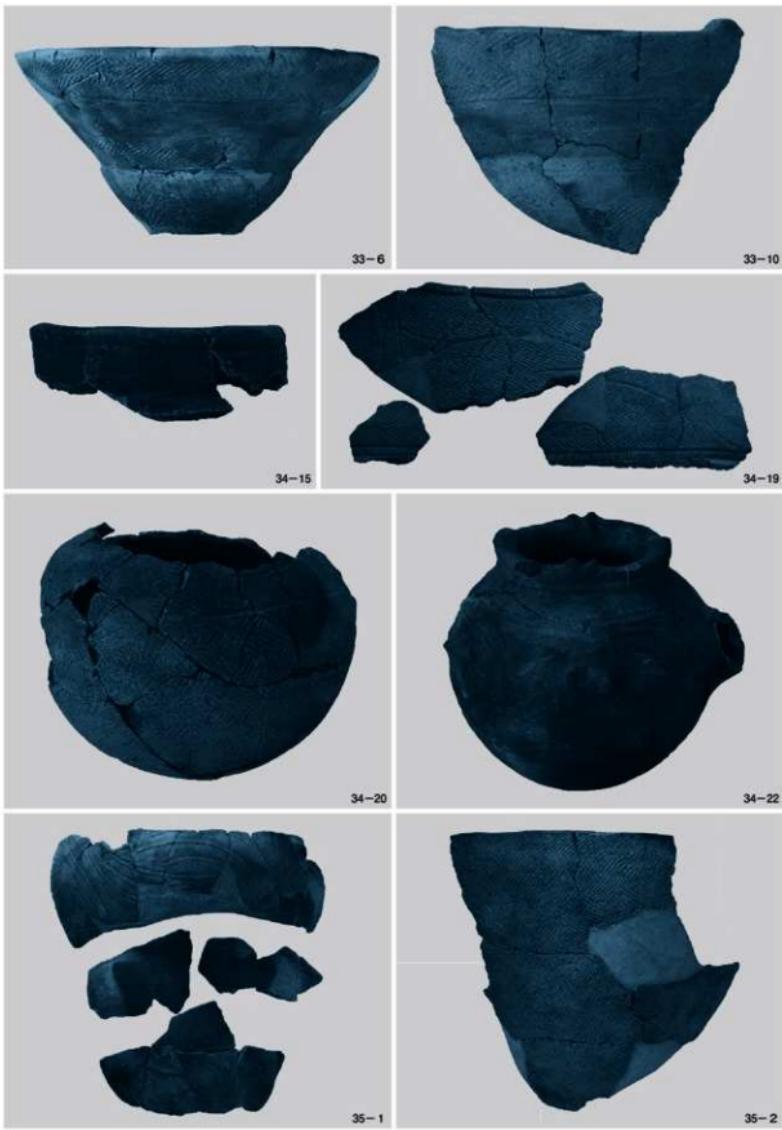
23 土坑・焼土遺構・土器埋設遺構出土遺物



24 石器集中地点出土石器（1）



25 石器集中地点出土石器（2）



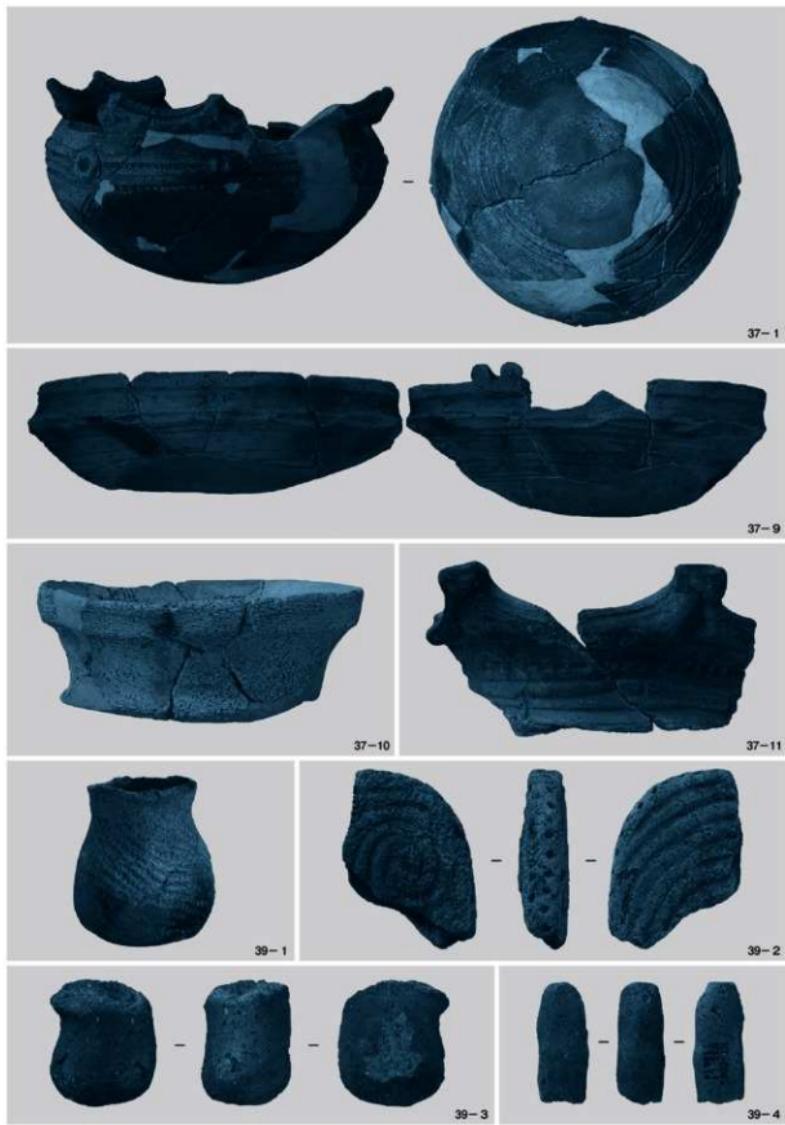
26 遺構外出土遺物（1）



27 遺構外出土遺物（2）



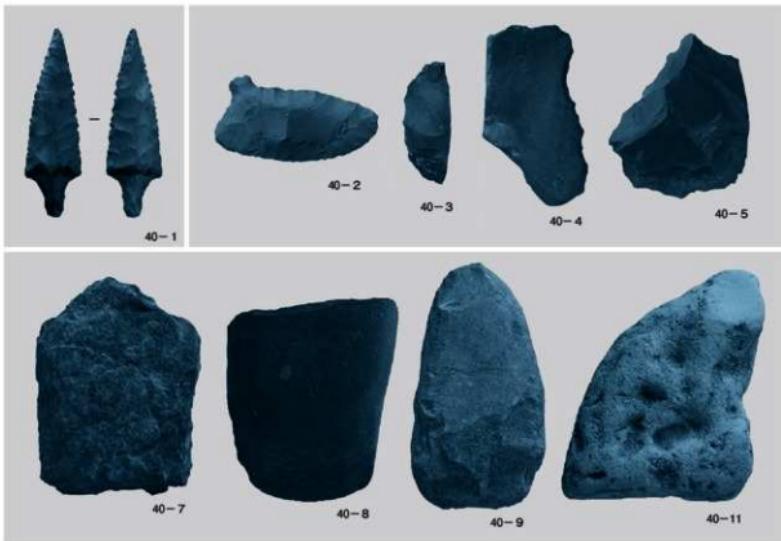
28 遺構外出土遺物（3）



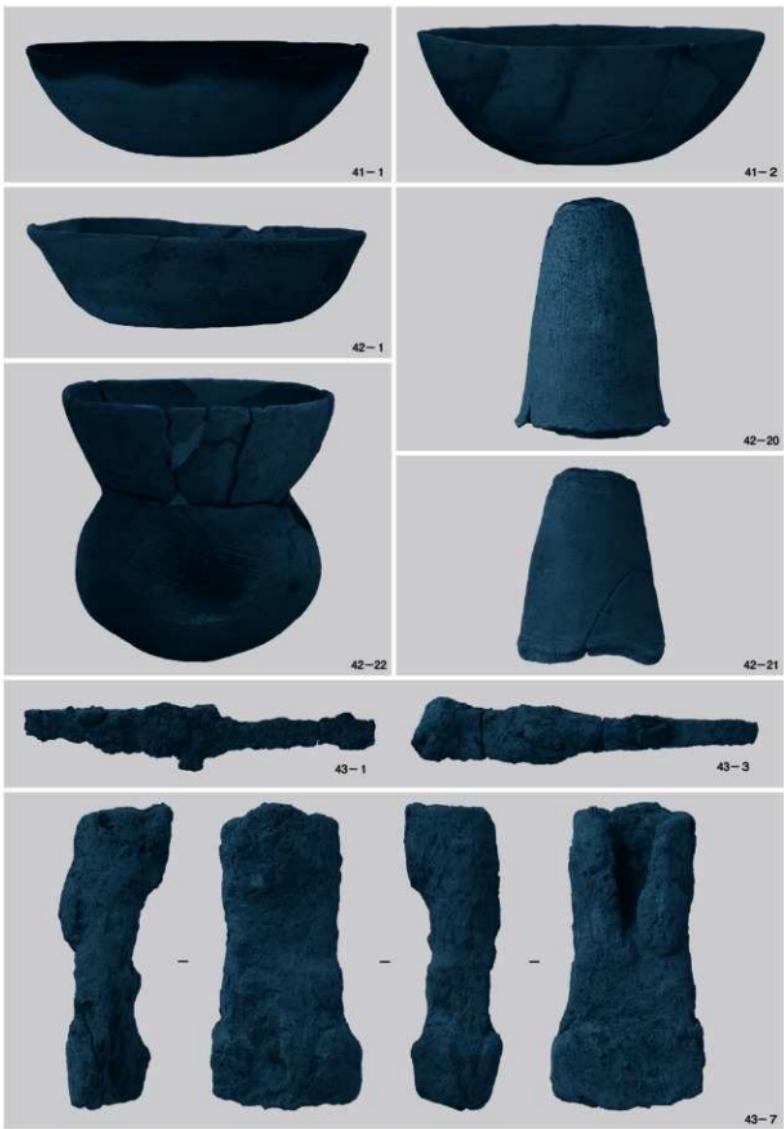
29 遺構外出土遺物（4）



30 遺構外出土遺物（5）



31 遺構外出土遺物（6）



32 遺構外出土遺物（7）

報告書抄録

福島県文化財調査報告書第486集

阿賀川改修(長井地区)遺跡発掘調査報告 2

小田高原遺跡（2次調査）

平成24年12月21日発行

編 集	財団法人福島県文化振興財団	遺跡調査部	遺跡調査課
発 行	福島県教育委員会	(〒960-8688)	福島市杉妻町2-16
	財団法人福島県文化振興財団	(〒960-8116)	福島市春日町5-54
	国土交通省北陸地方整備局阿賀川河川事務所	(〒965-8567)	会津若松市表町2-70
印 刷	八幡印刷株式会社	(〒970-8026)	いわき市平字田町82-13
